一般国道９号（静間仁摩道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書９

小金川Ｂ遺跡

2021年

島 根 県 教 育 委 員 会

序

本書は、島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局松江国道事務所から委託を受けて、令和２（2020）年度に実施した一般国道９号（静間仁摩道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をとりまとめたものです。

本書で報告する小金川Ｂ遺跡では、奈良時代後半から平安時代の土器が出土しました。この中には、仏具として用いられた灰釉陶器などがあり、周辺に仏教に関係する施設が存在すると想定されます。

当遺跡が所在する大田市静間町西部から五十猛町を中心とする地域は、大田市東部や仁摩町域に比べると、地域の歴史を知る手がかりが多くはなかったのですが、今回の調査で、当時の社会や人々の暮らしを考える上で貴重な資料を得ることができました。

本報告書がふるさと島根の歴史を伝える基礎資料として、学術並びに歴史教育のために広く活用されることを期待します。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の作成にあたり御協力いただきました国土交通省中国地方整備局松江国道事務所をはじめ、大田市静間・五十猛地区の方々並びに関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

令和３年３月

島根県教育委員会
教育長　　新田　英夫

例 言

1．本書は、国土交通省中国地方整備局松江国道事務所から委託を受けて、島根県教育委員会が令和２（2020）年度に実施した一般国道９号（静間仁摩道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をとりまとめたものである。

2．本報告書の発掘調査対象遺跡は下記のとおりである。
　小金川Ｂ遺跡（大田市静間町字小鯛ヶ原791-1）

3．発掘調査作業（安全管理、発掘作業員の雇用、掘削、測量等）については、株式会社トーワエンジニアリングへ委託した。

4．発掘調査は島根県埋蔵文化財調査センターが実施し、宮本正保が担当した。

5．現地調査及び整理作業において、次の方々から御指導・御協力をいただいた。（五十音順）
中村唯史（島根県立三瓶自然館課長代理）、西尾克己（元島根県古代文化センター長）、藤澤良祐（愛知学院大学文学部教授）　なお、諸般の事情により藤澤氏には遺物の実見がかなわず、送付した遺物実測図・写真から御教示を得た。

6．本調査に伴う石製品の石材鑑定は中村唯史氏に依頼した。また自然科学分析は文化財調査コンサルタント株式会社に委託し、その結果は第４章に掲載した。

7．本書に掲載した遺構・遺物の写真は宮本が撮影した。また、掲載した遺構図・遺物実測図の作成･浄書は、各調査員、会計年度任用職員調査員、同調査補助員、同整理作業員が行ったほか、遺物の分類・鑑定等は埋蔵文化財調査センター職員の協力を得た。

8．本書の執筆は第１章～第３章と第５章を宮本が行った。第４章は執筆者を明記した。

9．本書の編集は宮本が行った。

10．註は各章ごとに連番を振り、参考文献とともに各章末にまとめて示した。写真、挿図及び表の番号は第４章を除いて全体の通し番号により表示した。

11．本書に掲載した遺物及び実測図・写真等の資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（島根県松江市打出町33番地）にて保管している。

凡 例

1．本書で用いた土器の分類及び編年観は下記の論文・報告書に依拠している。

1）弥生土器・土師器

松本岩雄1992「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編　木耳社

鹿島町教育委員会1992『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５南講武草田遺跡』

松山智弘2000「小谷式再検討-出雲平野における新資料から-」『島根考古学会誌』第17集

2）須恵器

榊原博英2010「石見国の須恵器生産と出雲産須恵器」『出雲国の形成と国府成立の研究』

－古代山陰地域の土器様相と領域性－　島根県古代文化センター

３）陶磁器

太宰府市教育委員会2000　『大宰府条坊跡－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第49集

山下峰司　1995「4．灰釉陶器・山茶碗」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

2．本書で使用した遺構記号は次のとおりである。

SK…土坑　P…ピット　NR…自然流路

3．挿図の中の北は、測量法による第Ⅲ平面直角座標系Ｘ軸方向を指し、座標系のＸＹ座標は世界測地系による。レベルは海抜高を示す。

4．本書で使用した第２図・第３図は、国土地理院発行の１/25,000電子地形図を使用して作成したものである。

5．本書に掲載する土層等の土色は、『新版　標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所監修による。

本文目次

第１章　調査の経過
第１節　調査に至る経緯……1
第２節　発掘作業と整理作業の経過……3
第３節　調査体制……4

第２章　遺跡の位置と環境
第１節　地理的環境……5
第２節　歴史的環境……5

第３章　調査の方法と成果
第１節　調査の方法……9
第２節　基本層序……14
第３節　斜面の調査……15
第４節　段丘面の調査
１．検出遺構とその遺物……17
２．遺構外出土遺物……22

第４章　自然科学分析
小金川Ｂ遺跡発掘調査に伴う自然科学分析……30
渡辺正巳：文化財調査コンサルタント株式会社
第５章　総括
第１節　遺跡の立地と遺構……39
第２節　出土遺物……39
第３節　遺跡の評価……40

挿図目次

第１図　遺跡の位置……1
第２図　静間仁摩道路事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地位置図……2
第３図　遺跡の位置と周辺の遺跡……6
第４図　試掘トレンチ位置図・本発掘調査範囲図……10
第５図　試掘トレンチ土層実測図……11
第６図　調査区配置図・調査前地形測量図……12
第７図　調査終了後地形測量図……13
第８図　斜面土層実測図……14
第９図　斜面出土遺物実測図１……15
第10図　斜面出土遺物実測図２……16
第11図　斜面出土遺物実測図３……17
第12図　段丘面東壁土層実測図……18
第13図　南北トレンチ１土層実測図……18
第14図　東西トレンチ土層実測図……19
第15図　段丘面ピット・土坑・自然流路位置図……20
第16図　段丘面P01 ～ 20・SK01実測図……21
第17図　NR01土層実測図……22
第18図　NR01礫検出状況実測図……23
第19図　NR01出土遺物実測図……24
第20図　段丘面包含層出土遺物実測図１……25
第21図　段丘面包含層出土遺物実測図２……26
第22図　段丘面包含層出土遺物実測図３……27
第23図　A2･B2グリッド南壁土層図・南北トレンチ２土層図……28
第24図　段丘面包含層出土遺物実測図４……29

表目次

第１表　小金川Ｂ遺跡出土土器観察表……42
第２表　小金川Ｂ遺跡出土土製品観察表……44
第３表　小金川Ｂ遺跡出土石製品観察表……44

写真図版目次

図版1
調査前全景
遺跡の立地
図版2
完掘全景（南から）
完掘全景（上空から）
図版3
斜面土層
段丘面東壁土層
図版4
南北トレンチ1土層1（3層以下）
南北トレンチ1土層2（4層以下）
図版5
東西トレンチ1（東）土層
東西トレンチ1（西）土層
図版6
NR01完掘（東から）
NR01検出
図版7
NR01礫検出
NR01トレンチ1土層
図版8
NR01トレンチ2土層
C3-C4グリッド遺構検出
図版9
B4グリッド遺構検出
SK01完掘
図版10
SK01土層
段丘面遺構完掘
図版11
段丘面北西部完掘
段丘面北西部土層
図版12
斜面出土遺物
斜面出土遺物
図版13
斜面・NR01出土遺物
NR01出土遺物
図版14
段丘面包含層（4～6層）出土遺物
段丘面包含層（4～6層）出土遺物
図版15
段丘面包含層（4～6層）出土遺物
段丘面包含層（4～6層）出土遺物
図版16
段丘面包含層（4～6層）出土遺物
段丘面包含層（4～6層）出土遺物
図版17
段丘面包含層（7～9層）出土遺物
段丘面包含層（7～9層）出土遺物
図版18
段丘面包含層（7～9層）出土遺物
段丘面包含層（6・7～9層）出土遺物
図版19
斜面出土石製品（表）
斜面出土石製品（裏）

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

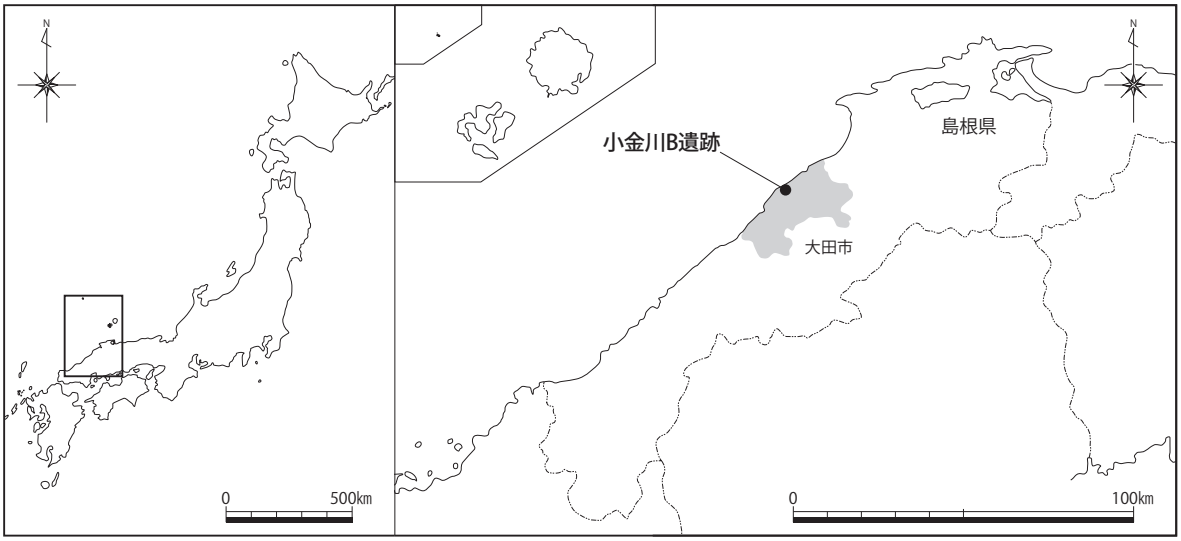
1．事業計画の概要

一般国道９号は総延長距離750㎞で、京都府京都市から山口県下関市に至る、山陰地方の諸都市を結ぶ幹線道路である。このうち島根県大田市静間－仁摩間の現道は、急カーブや急勾配が連続する区間が多く、重大事故が発生しやすい状況にある。また、この区間では国際規格コンテナの通行に支障となるトンネルが存在すること、交通事故・災害発生時に通行止が発生して大幅な迂回が必要になることなど、社会経済活動に大きな支障を来している。こうした問題を解決するため、大田市静間町から同市仁摩町大国に至る延長7.9㎞の自動車専用道路が計画され、平成20年度から「静間・仁摩道路」として事業着手された。

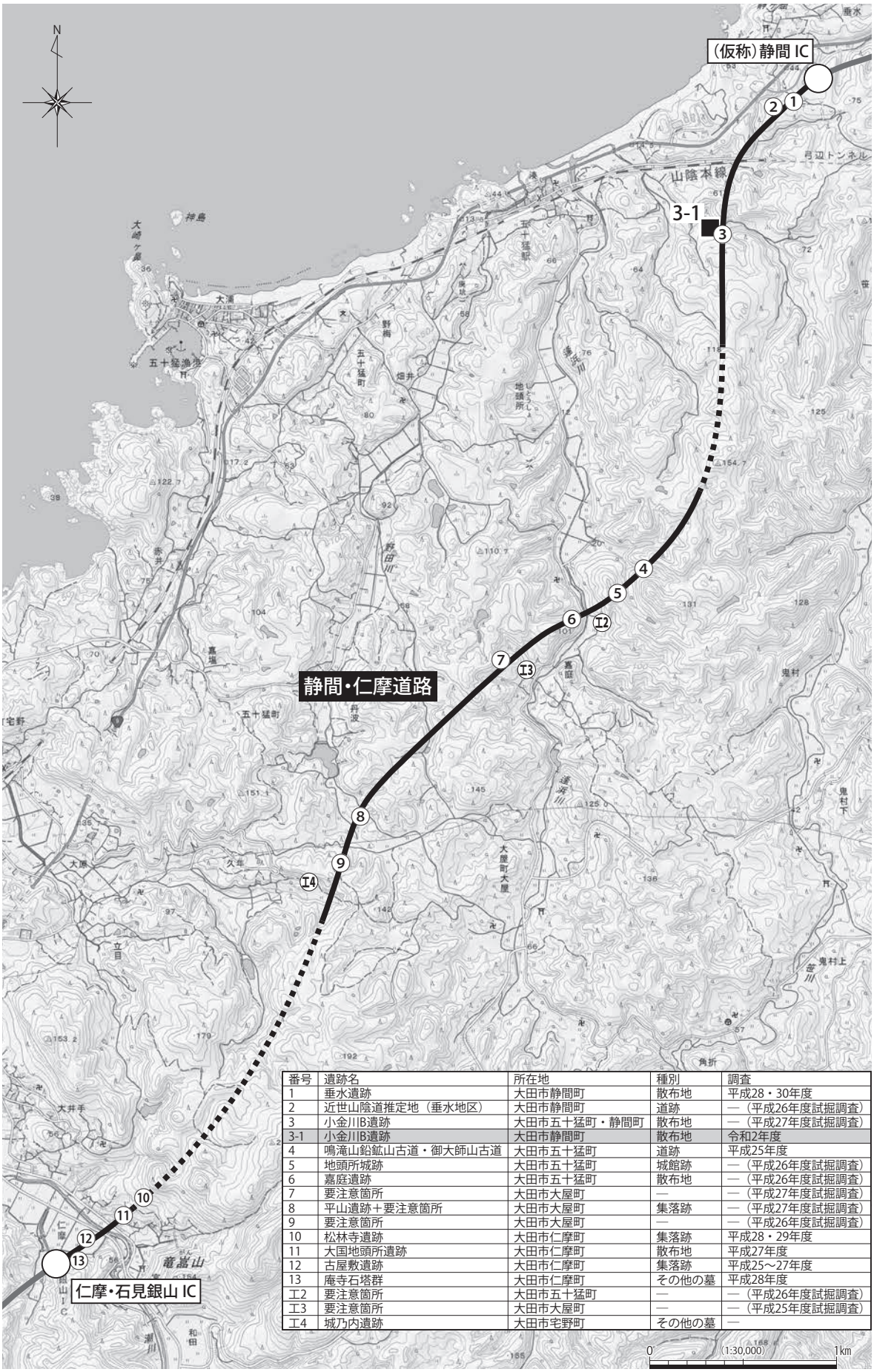
2．調査に至る経緯と法的手続き

静間・仁摩道路の計画に先立ち、国土交通省から島根県教育委員会に対して計画地内の埋蔵文化財について照会があり、平成16・17年度に最初の分布調査を実施したほか、平成18年２月、平成22年２月にも分布調査を行っている。島根県教育委員会では、平成22年５月25日付け島教文財第233号で、本線予定地内に所在する８遺跡と４カ所の要注意箇所を回答している。平成23年度末には工事用道路地内の分布調査を行い、これについては平成24年４月９日付け島教文財第49号で回答した。これらの結果を受けて、国土交通省と島根県教育委員会の間で予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議が行われ、平成25年３月26日付け国中整松一中第248号で文化財保護法第94条第１項の規定による通知が国土交通省から島根県教育委員会あてに提出された。これに対し、同年３月26日付け島教文財第11号の62で、島根県教育委員会教育長が10遺跡について記録保存のための発掘調査の実施を勧告した。

小金川Ｂ遺跡については、平成27年に実施された試掘調査の結果、道路本線部分にかかる範囲の



第１図　遺跡の位置



番号	遺跡名	所在地	種別	調査
1	垂水遺跡	大田市静間町	散布地	平成28・30年度
2	近世山陰道推定地（垂水地区）	大田市静間町	道跡	―（平成26年度試掘調査）
3	小金川B遺跡	大田市五十猛町・静間町	散布地	―（平成27年度試掘調査）
3-1	小金川B遺跡	大田市静間町	散布地	令和2年度
4	鳴滝山鉛鉱山古道・御大師山古道	大田市五十猛町	道跡	平成25年度
5	地頭所城跡	大田市五十猛町	城館跡	―（平成26年度試掘調査）
6	嘉庭遺跡	大田市五十猛町	散布地	―（平成26年度試掘調査）
7	要注意箇所	大田市大屋町	―	―（平成27年度試掘調査）
8	平山遺跡＋要注意箇所	大田市大屋町	集落跡	―（平成27年度試掘調査）
9	要注意箇所	大田市大屋町	―	―（平成26年度試掘調査）
10	松林寺遺跡	大田市仁摩町	集落跡	平成28・29年度
11	大国地頭所遺跡	大田市仁摩町	散布地	平成27年度
12	古屋敷遺跡	大田市仁摩町	集落跡	平成25～27年度
13	庵寺石塔群	大田市仁摩町	その他の墓	平成28年度
工2	要注意箇所	大田市五十猛町	―	―（平成26年度試掘調査）
工3	要注意箇所	大田市大屋町	―	―（平成25年度試掘調査）
工4	城乃内遺跡	大田市宅野町	その他の墓	―

第２図　静間仁摩道路事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地位置図

本発掘調査は不要と判断した。その後、平成30年度に大田市静間町の静間高架橋にかかる地滑り対策工事の計画が追加され、小金川Ｂ遺跡はこの計画範囲に含まれることになった。これを受けて、令和元年５月29日付け国中整松工第７号で、文化財保護法第94条第１項の規定による通知が国土交通省から島根県教育委員会あてに提出された。島根県教育委員会は令和元年６月に試掘調査を実施し、当該範囲のうち約900㎡について本発掘調査が必要である旨を令和元年７月５日付け島教文財第313号で報告した。これを受けて、令和元年７月10日付け島教文財第69号の20で、島根県教育委員会教育長は小金川Ｂ遺跡について記録作成のための発掘調査の実施を勧告した。

小金川Ｂ遺跡の発掘調査は、国土交通省から島根県教育委員会が委託を受け、島根県埋蔵文化財調査センターが実施した。文化財保護法第99条第１項の規定による通知は、令和２年４月28日付け島教埋第86号で埋蔵文化財調査センター所長から島根県教育委員会教育長あてに提出した。

第２節　発掘作業と整理作業の経過

1．発掘作業

発掘作業は令和２（2020）年５月29日～９月４日にかけて実施した。

重機による表土掘削を５月29日から行い、６月９日に南側の斜面から人力掘削を開始、併せて段丘面に土層確認のため南北トレンチ１を設定して掘削を行った。調査は斜面と段丘面を並行して行ったが、南北トレンチ１の遺物出土状況から、段丘面1･2層の重機掘削を追加することとし、６月24日～７月３日に実施した。この間は斜面の調査と調査区北西部の人力掘削を並行して行っている。７月８日から段丘面の人力掘削を再開し、７月20日に段丘面東壁の土層実測を行った。

８月６日には自然流路（NR01）を確認、８月７日から掘削を行い、土層を確認･記録したのち完掘した。NR01周辺では大量の礫を検出したが、これは写真測量を実施することとし、８月18日に測量用の写真撮影を行っている。８月17日には段丘面の遺構検出を行い、ピット20、土坑１を確認した。これらについては、その後半截して土層を記録したのち完掘した。

NR01の土層堆積状況から、それまで無遺物の基盤層としていた層が遺物包含層である可能性が高まり、８月18日から土層確認のため南北トレンチ２を設定・掘削して遺物・遺構の有無と範囲の確認を行った。その結果、遺物が多く出土したトレンチ北側を中心に８月20日から面的に調査を実施した。８月21日には自然科学分析用の試料採取を受託業者が行った。

８月26日には掘削作業を終了し、その後写真撮影・実測・地形測量を実施した。９月４日に完了検査と空中写真撮影を行い、現地調査を終了した。

なお、８月18日に西尾克己氏の調査指導を受けたほか、８月20日に石見銀山世界遺産センター職員による遺跡の視察を受けた。

発掘調査の完了協議は令和２年８月28日に実施した。現地調査終了後、令和２年10月29日付け島教文財第697号で松江国道事務所長あて発掘調査の終了報告を提出した。なお、文化財保護法第100条第２項の規定による埋蔵文化財発見通知は令和２年10月２日付け島教文財第114号の６で大田警察署長あて提出した。

２．整理作業

遺物の水洗・注記・接合作業は、発掘作業と並行して現地の事務所で実施した。現地調査終了後の令和２年９月10日からは島根県埋蔵文化財調査センターにおいて作業を継続し、遺物の接合・復元・実測等の作業及び図面・写真類の整理作業を行った。12月14日には中村唯史氏による出土石製品の石材鑑定を受けた。また、12月後半には藤澤良祐氏に図面・資料を送付し、灰釉陶器の器種・時期等についての指導を受けた。

現地調査終了後に整理した図面・写真等の記録類については、出土品と併せて総合的な整理検討を行い、遺構・遺物のトレース、写真撮影、割付、原稿執筆を行った。画像処理・図版作成・編集等にはAdobe社のソフトを使用した。

第３節　調査体制

発掘調査・報告書作成は次の体制で行った。

調査主体　島根県教育委員会

教育庁文化財課

課長　萩　雅人、文化財グループGL　田中明子、管理指導スタッフ調整監　池淵俊一

埋蔵文化財調査センター

所長　椿　真治、総務課長　和田　諭、高速道路調査推進スタッフ調整監　角田徳幸

管理課長　守岡正司

高速道路調査推進スタッフ企画幹　宮本正保

会計年度任用職員調査員　松山智弘

会計年度任用職員調査補助員　飯塚由起、糸賀伸文

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

小金川Ｂ遺跡は、島根県大田市静間町字小鯛ヶ原に所在し、日本海に向かって北西に流れる小金川の南岸丘陵斜面から段丘面に立地する。静間町の西端、五十猛町との境界付近に位置しており、日本海からの距離は0.8㎞である。遺跡の標高は15ｍ～ 21ｍである。

大田市は、東西に長い県のほぼ中央に位置し、南には国立公園三瓶山や大江高山の火山群があり、北は日本海に面している。古くは石見国、現在は石見地方の東部にあり、中国山地から北に延びる丘陵が日本海に迫り、深い入り江となった海岸とその間に開けた平野や砂丘が交錯する変化に富んだ地形となっている。

小金川Ｂ遺跡が所在する大田市静間・五十猛地域は、大田市海岸部のほぼ中央に位置し、海岸部及び静間川流域を除くと、小さな河川に伴う小規模な平地が存在するのみで、大半は山地となっている。遺跡は、海岸及び平地からの距離は遠くないが、入り組んだ谷間に所在し、居住の場や幹線道路からは見通しのよくない、隠れた場所にあるといえる。また、遺跡周辺は軟弱な地盤による地滑りや後世の開墾を受け、調査対象地も後世の水田造成が行われ、地形が大きく改変されている。

第２節　歴史的環境

旧石器・縄文時代

今のところ大田市域では旧石器時代の遺跡は確認されていないが、平成26年度に発掘調査が行われた久手町中尾Ｈ遺跡４区では、縄文時代草創期から早期に遡る可能性を持つ尖頭器が出土している。縄文時代の遺跡では、この中尾Ｈ遺跡で後期を中心とした土器が出土しており、前期・中期に遡る土器も含まれる。大型の石棒なども出土している。このほか平成29年に発掘調査が実施された長久町・鳥井町の御堂谷遺跡では後・晩期とみられる落とし穴を確認している。

弥生時代

静間川下流域では、前期の土器が見つかった長久町土江遺跡や静間町八日市遺跡などが存在している。久手町栗林Ｂ遺跡では前期の河道２本が検出され、ここから貯木施設と考えられる環状の杭列が確認されている。また、前述の御堂谷遺跡では、標高約53ｍにある谷状地形の遺物包含層から前期後葉の土器が多量に出土し、周辺に当該期の高地性集落が存在する可能性もある。

中期以降では、鳥井町鳥井南遺跡で中期から古墳時代初頭の集落が確認された。中期後半を中心とする竪穴建物、同時期の多数の段状遺構を検出したほか、後期の焼失建物から鉄製の鋤先が出土した。御堂谷遺跡でも中期末から後期前半の竪穴建物や加工段が確認されている。平ノ前遺跡（10）では後期前葉の水路２条が検出され、静間川からの導水用施設の可能性が考えられている。五十猛地域では五十猛神社遺跡（20）で弥生土器が出土している。

古墳時代

集落としては、御堂谷遺跡、鳥井南遺跡、平ノ前遺跡などが知られている。御堂谷遺跡では中期前葉の竪穴建物や加工段が複数検出され、土製勾玉も出土している。鳥井南遺跡でも、中期～後期の竪穴建物、加工段が多数確認されたほか、人形、武器形など祭祀に関する土製模造品が大量に出

1	小金川Ｂ遺跡	2	新田遺跡	3	静間鈩	4	渡瀬遺跡	5	鯛渕遺跡
6	近藤浜横穴群	7	近藤平遺跡	8	平山横穴	9	綱引浜遺跡	10	平ノ前遺跡
11	垂水古墳	12	平遺跡	13	静間城跡	14	柿田立目後横穴群	15	竹下忠紀宅後横穴
16	垂水遺跡	17	笹川遺跡	18	湊東遺跡	19	楠石横穴群	20	五十猛神社遺跡
21	湊横穴	22	八日市鈩遺跡	23	五十猛小学校遺跡	24	野梅横穴	25	八日市横穴群
26	第二八日市横穴	27	八日市鍛冶遺跡	28	畑井遺跡	29	畑井南遺跡	30	五十猛鈩山遺跡
31	地頭所城跡	32	嘉庭遺跡	33	近世山陰道	34	鳴滝山鉛鉱山古道・御大師山古道		

第３図　遺跡の位置と周辺の遺跡

土した点も注目される。平ノ前遺跡では前期～後期にかけての竪穴建物のほか、中期～後期の灌漑用水路が確認され、水路埋土からは多量の土器とともに金銅製歩揺付空玉1点が出土した。朝鮮半島で製作された可能性も考えられ、当時の朝鮮半島と日本海沿岸地域との交流を窺わせる貴重な資料である。静間城跡（13）でも後期の竪穴建物や加工段が検出されている。五十猛地域でも遺跡が増加し、湊東遺跡（18）、畑井遺跡（28）、畑井南遺跡（29）、五十猛小学校遺跡（23）、五十猛町明神遺跡といった散布地が確認されている。

古墳時代の大田地域は、石見地方でも有数の横穴墓密集地域として知られ、特に東部の波根湖周辺に存在する丘陵部に集中するが、静間川下流域から五十猛にかけても近藤浜横穴群（6）、湊横穴（21）、楠石横穴群（19）、野梅横穴（24）などが知られる。また、古墳では前期～中期と考えられる久手町竹原古墳、後期では久利町行恒古墳、垂水古墳（11）、五十猛町赤井穴ヶ迫古墳が知られる。垂水古墳は径10ｍの円墳と考えられる。赤井穴ヶ迫古墳は石棺式石室に似た構造で、切石を用いた横穴式石室をもち、出雲地方との交流を窺わせる。

古　代

古代の遺跡では、御堂谷遺跡、平ノ前遺跡のほか、鯛渕遺跡（5）が知られる。御堂谷遺跡では門の可能性を持つ掘立柱建物や柵列が確認され、灯明皿形土器や鉄鉢形土器なども出土したことから周辺に仏教関連施設の存在が想定されている。平ノ前遺跡では、3間×5間、3間×6間といった大型の掘立柱建物や、漆付着土器、墨書土器なども確認されており、郡家の津に相当するような役割も推測されている。鯛渕遺跡でも「郡」、「大」などの墨書、「司」のヘラ書きを持つ土器、転用硯、漆付着土器などの遺物が出土し、地方官衙の役割をもつと見られている。

小金川Ｂ遺跡周辺は、『和名類聚抄』によると安濃郡静間郷に属すると考えられる。また、『延喜式』に見える石見国には波祢、詫農、楠道、江東、江西、伊甘の6驛家があったとされている。古代山陰道の位置は判明していないが、託農驛家が現在の大田市仁摩町宅野付近であれば、小金川Ｂ遺跡の比較的近隣を通っていた可能性があり、静間から五十猛付近についてはJR山陰本線に沿うように通る経路も推定されている。静間西部から五十猛地域においては古代の遺跡は明らかでないが、垂水遺跡（16）では奈良時代から平安時代の土師器や須恵器が出土し、平ノ前遺跡では古墳時代終末期から古代の大型掘立柱建物や溝等が検出されている。水上町の白坏遺跡からは「延喜九（909）年」と記された木簡が出土しており、末端官衙の可能性が指摘されている。

中世・近世

中世の一時期、遺跡の所在する静間郷は邇摩郡に属する。大永7（1527）年、石見銀山が再発見され、銀鉱山開発が活発化すると、大田地域は戦国大名の争奪の場となる。五十猛地域においては、地頭所城跡（31）、泊山城跡、唐郷山城跡の3カ所の山城が知られている。このうち地頭所城跡は鳴滝山鉛鉱山古道・御大師山古道（34）の南側の山に築かれており、尾根づたいに郭が階段状に築かれ、背後の尾根を断ち切る形で堀切を設け、山腹の平坦面には石組の井戸などがある。このほか周辺では静間城跡が知られる。静間城跡では、礎石建物や掘立柱建物が検出されている。城跡以外には、五輪塔が確認されている嘉庭遺跡（32）や、鉄滓が採集され製鉄遺跡と考えられる五十猛鈩山遺跡（30）、五十猛金クソ遺跡がある。五十猛の周辺地域では、大屋町鬼村Ａ遺跡や大屋金床跡で鉄滓が採集されている。

近世に入ると、静間川河口では前原家による静間鈩（3）の操業が開始され、明治末まで稼業され

ている。現地には金山彦を祀った祠の跡が残り、周辺の家々では石垣などに鉄滓や炉壁の破片が転用されている様子が窺える。また、近世山陰道（33）は海岸部を静間から五十猛を通過し西に向かっている。

〈参考文献〉

大田市 1968『大田市誌』
角川書店 1991『角川日本地名大辞典 32　島根県』
平凡社 1995『日本歴史地名体系第 33 巻　島根県の地名』
関　和彦 2008「古代石見国安濃郡の郡家と駅」『郷土石見』第七十七号　石見郷土研究懇話会
島根県教育委員会 1981『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅷ集
島根県教育委員会 1984『島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅱ　石見部製鉄遺跡』
島根県教育委員会 1996『歴史の道調査報告書　山陰道Ⅱ』
島根県教育委員会 1997『島根県中近世城館分布調査報告書〈第 1 集〉石見の城館』
島根県教育委員会 2002『増補改訂島根県遺跡地図Ⅱ（石見編）』
島根県教育委員会 2017『高原遺跡（3 区）・中尾Ｈ遺跡（4 区）・門遺跡（2 区）』
島根県教育委員会 2018『静間城跡』
島根県教育委員会 2019『垂水遺跡　松林寺遺跡　庵寺石塔群』
島根県教育委員会 2019『御堂谷遺跡　諸友大師山横穴Ⅳ群 1 号穴』
島根県教育委員会 2019『平ノ前遺跡』
大田市教育委員会 1984『三瓶川流域遺跡他詳細分布調査Ⅱ』
大田市教育委員会 1989『白坏遺跡発掘調査概報』
大田市教育委員会 2011『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書』1
大田市教育委員会 2016『栗林Ｂ遺跡』
大田市教育委員会 2017『鯛渕遺跡』
大田市教育委員会 2018『鳥井南遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
大田市教育委員会 2018『鳥井南遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

小金川Ｂ遺跡は大田市静間町字小鯛ヶ原に所在し、低山地の谷を日本海に向かって流れる小金川南岸の丘陵斜面から段丘面にかけて位置する。日本海からは直線距離で0.8㎞である。調査前は、丘陵斜面は荒蕪地、段丘面は耕作が行われなくなった棚田の跡となっており、いずれも杉がまばらに生えている状態であった。また、遺跡周辺は地盤が緩く、調査区南側の斜面では地滑りの痕跡も認められた。斜面からは常に湧水があったため排水溝を設けたが、夏場の一時期を除き、乾くことはなかった。

試掘確認調査は平成27年度と令和元年度の２回、島根県教育委員会によって実施された。平成27年度の調査は、一般国道９号（静間仁摩道路）の改築に伴うもので、山陰道本線の予定地を中心にトレンチ４カ所を設定して行った。このときの調査では遺物・遺構とも認められなかったことから、本調査は実施されなかった。令和元年度の調査は令和元年６月10日から６月24日にかけて実施した。一般国道９号（静間仁摩道路）の改築工事に伴う本線南側の盛り土施工予定地約7,600㎡を対象に、トレンチ16カ所を設定して実施した。その結果、対象地の北東部、TR13・15・16で弥生時代から古代にかけての土器が出土するなど遺物包含層を確認し、またTR15ではピットも検出した。このことから、これら３つのトレンチが存在する丘陵斜面から段丘面にかけて、この時期の遺構が存在することが想定されたため、発掘調査を実施することとした。調査対象面積は約800㎡である（第４・５図）。

発掘調査では、国土座標を基準に10ｍ四方のグリッドを設定し、北から南に算用数字、西から東にアルファベットを振りグリッド名とした（第６図）。

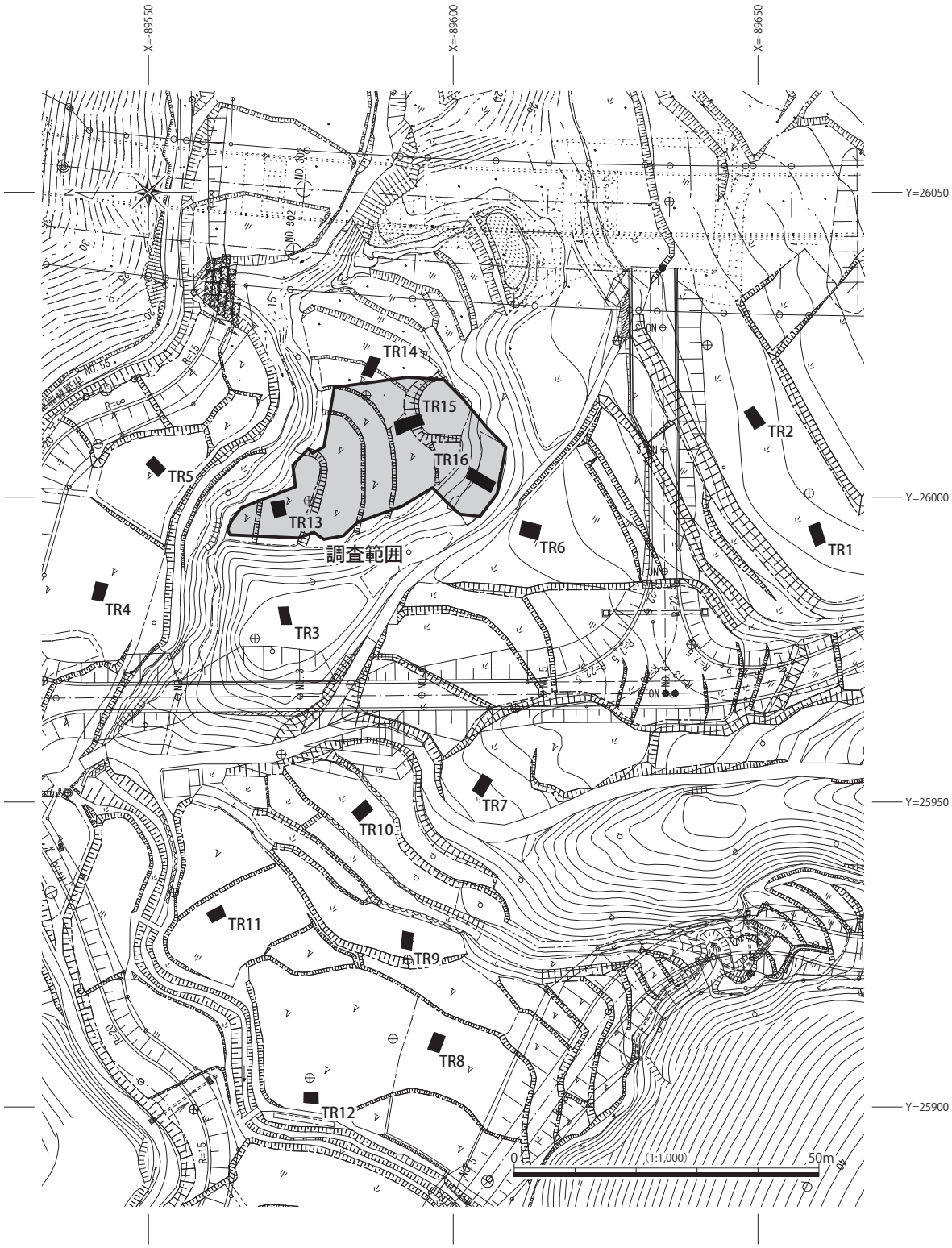
表土掘削はバケットに平爪を装着したバックホーを使用し、調査員の立会のもと少しずつ面的に掘り下げた。その後、ベルトコンベアを設置し、遺物包含層はスコップや鍬、ジョレンを用いて人力で掘削したが、出土遺物の粗密に合わせて適宜移植ゴテ等を併用した。包含層の遺物取り上げは基本的にグリッド名と層位の記録を行ったが、必要に応じ遺跡調査システムによる測量を実施した。遺構掘削は、移植ゴテ、草削りを使用して行った。基本的に土層観察用のベルトを設定するか、半截して埋土を掘削し、土層観察を行いつつ掘り下げた。土層は写真撮影後、必要に応じて断面図を作成した。

また、遺構内の出土遺物については、遺跡調査システムによる位置の実測または手測りによる実測図を作成し、出土位置を記録した後に取り上げた。遺構の平面図等は株式会社CUBICの遺跡調査システム「遺構くん」を用いて測量し、出力後補正を行った。遺構等の写真は、基本的に35㎜一眼レフのデジタルカメラによる撮影を行い、必要に応じて６×７版フィルムカメラ（モノクロネガ・カラーポジフィルム）による撮影を実施した。

整理作業は、現地調査と並行して出土遺物の水洗・注記を現地の事務所で実施し、現地調査終了後の９月中旬から埋蔵文化財調査センターにおいて本格的な報告書作成作業を開始した。遺物の接合・復元・実測図作成・写真撮影、遺構図の編集を行ったのち各図面のトレース、写真画質ほかの調整、原稿執筆・編集作業を実施した。図面トレース以降の作業は主にAdobe社製のCreative Cloud

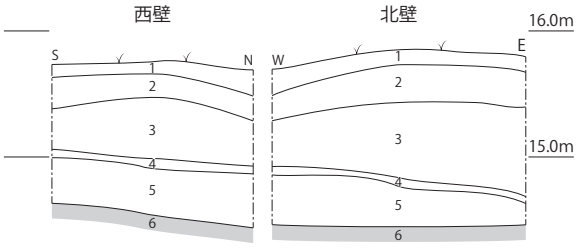
を用いてDTP方式で行った。

自然科学分析は、文化財調査コンサルタント株式会社に委託し、遺跡の堆積土についての花粉・植物珪酸体分析と、出土した木炭のAMS年代測定を行った。花粉・植物珪酸体分析試料は現地で委託業者が採取、年代測定試料は埋蔵文化財調査センターが採取して提供した。



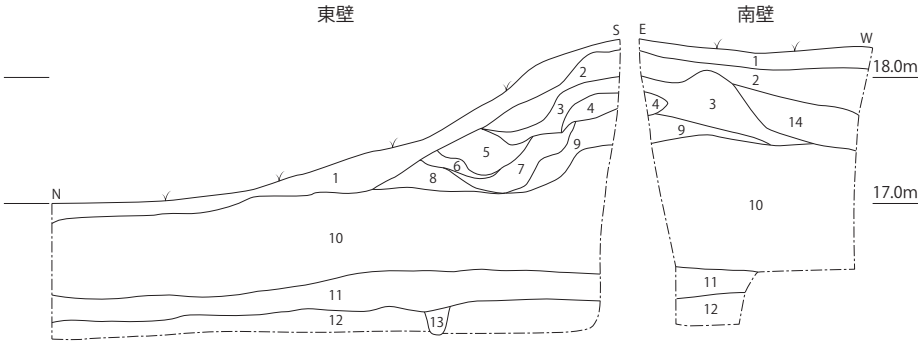
第４図　試掘トレンチ位置図・本発掘調査範囲図

TR13



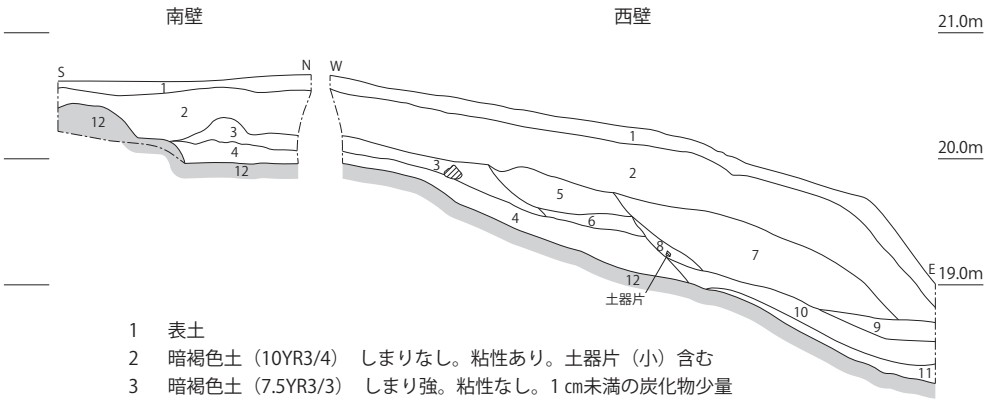
1　表土
2　褐色土（7.5YR4/6）　しまりあり。粘性強
3　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　しまりなし。粘性強
4　橙色土（7.5YR6/8）　しまり強。粘性あり。直上土器片含む
5　黄灰色土（2.5Y4/1）　しまり弱。粘性強。5 ㎝程度の礫少量
6　黄灰色土（2.5Y4/1）　しまり弱。粘性強。30 ㎝以内の礫多量
　　地山
※4 より上層から土器片出土。5 以下からは遺物の出土なし

TR15



1　表土
2　褐色土（10YR4/4）　しまりあり。粘性あり。3 ㎝程の黄色土ブロック少量
3　黄褐色土（10YR5/6）　しまり強。粘性あり。3 ～ 10 ㎝の黄色土ブロック多量
4　暗褐色土（10YR3/4）　しまりあり。粘性なし。2 ㎝未満の礫少量
5　暗褐色土（10YR3/4）　しまりあり。粘性なし
6　暗褐色土（10YR3/4）　しまりあり。粘性なし
7　褐色土（10YR4/4）　しまりあり。粘性なし
8　褐色土（10YR4/6）　しまりなし。粘性あり
9　橙色土（7.5YR6/8）　しまり強。粘性弱。5 ㎝未満のブロック少量
10　褐灰色土（10YR4/1）　しまり強。粘性強。土師器片含む
11　オリーブ黒色土（5Y3/1）　しまりあり。粘性強。土師器片含む
12　灰色土（5Y4/1）　しまりあり。粘性強。基盤層
13　黒色土（10YR1.7/1）　しまりあり。粘性あり。ピット
14　黄褐色土（10YR5/6）　しまりあり。粘性あり。5 ㎝程の腐れ礫中量。

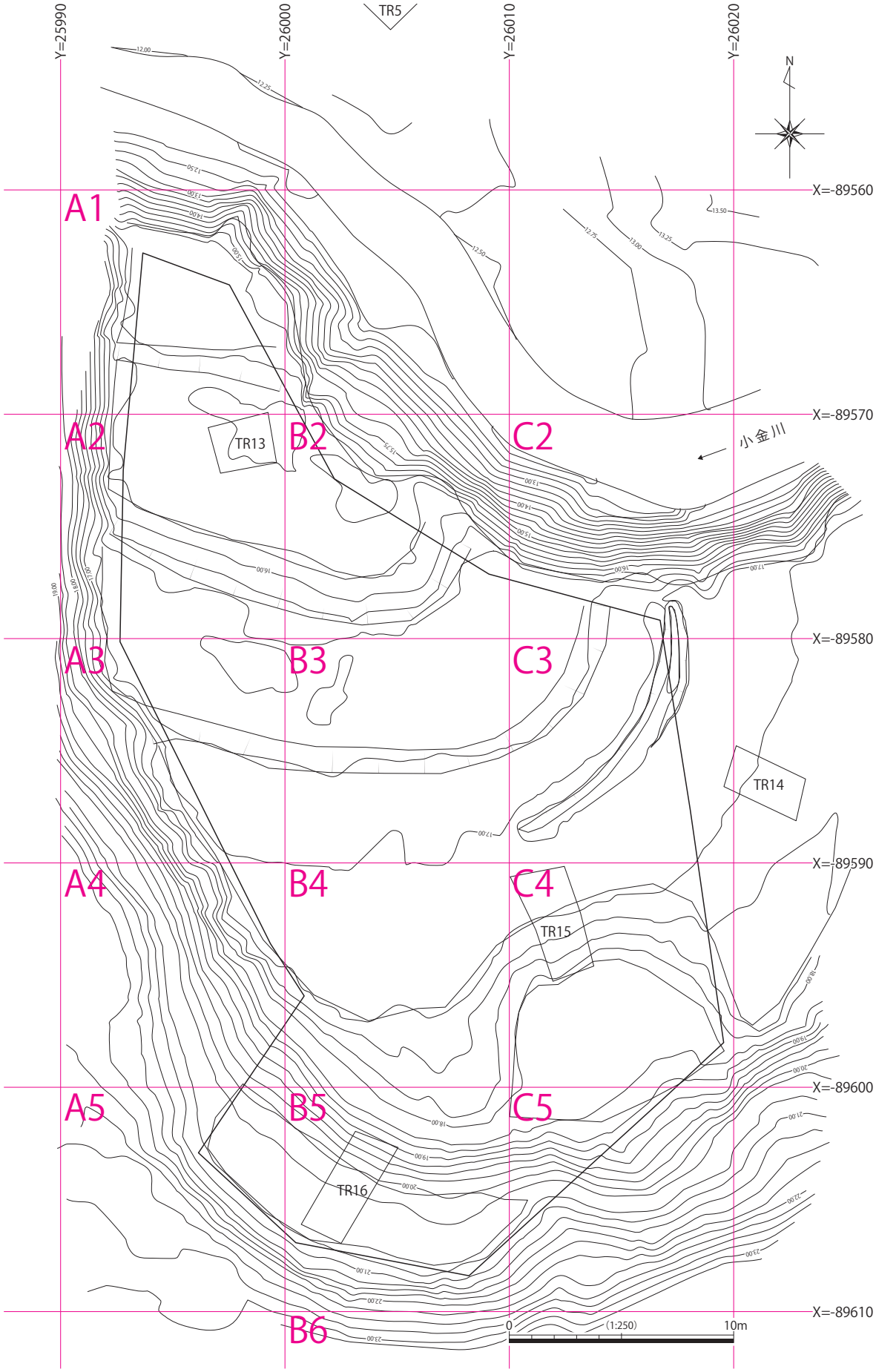
TR16



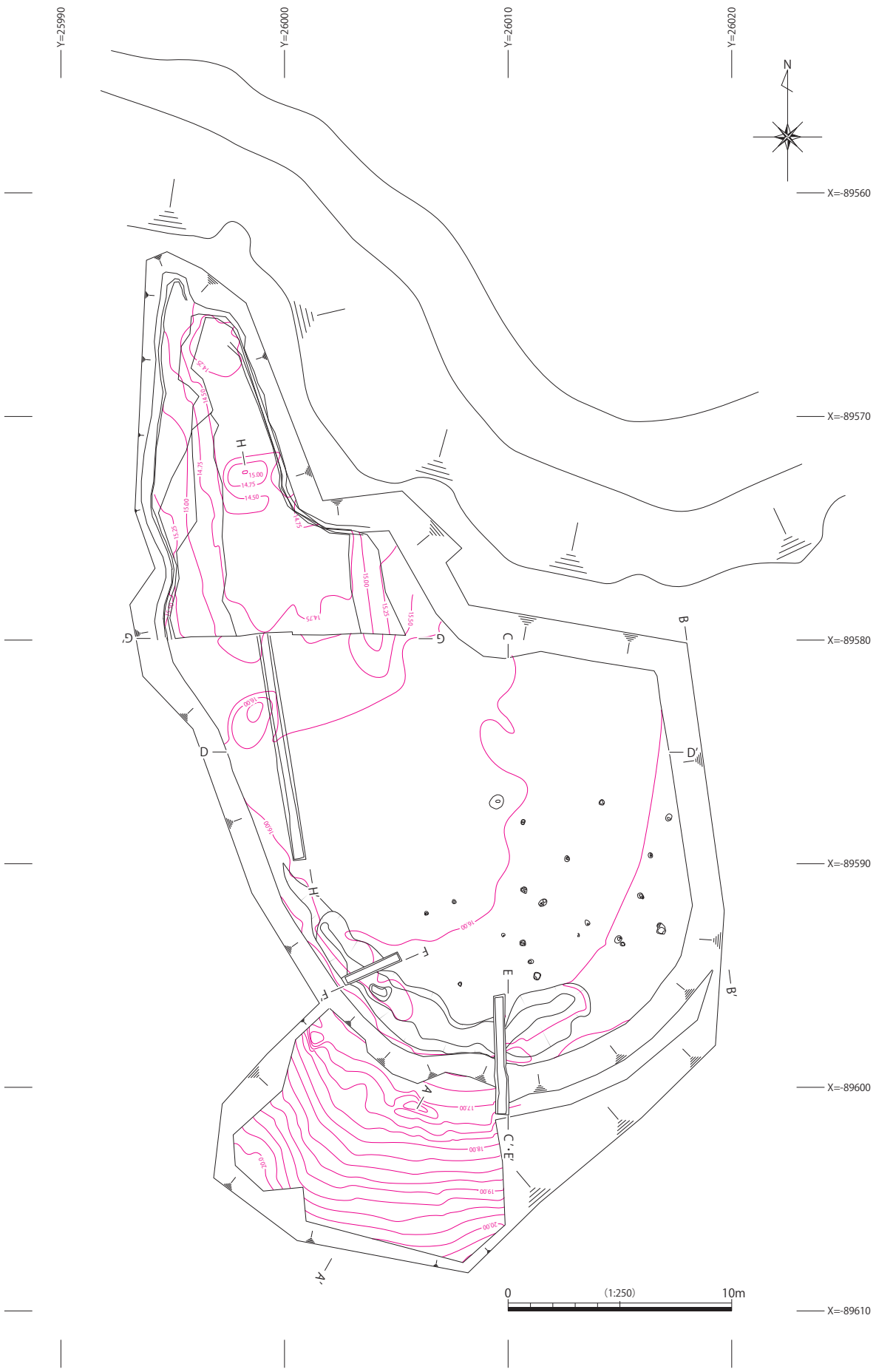
1　表土
2　暗褐色土（10YR3/4）　しまりなし。粘性あり。土器片（小）含む
3　暗褐色土（7.5YR3/3）　しまり強。粘性なし。1 ㎝未満の炭化物少量
4　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　しまり強。粘性あり。土器片を多く含む
5　褐色土（10YR4/6）　しまりあり。粘性なし。1 ㎜の黄白色砂粒多量。砂層
6　暗赤褐色土（5YR3/3）　しまり強。粘性あり
7　褐色土（10YR4/4）　しまりあり。粘性あり。土器片を多く含む
8　褐色土（7.5YR4/4）　しまりあり。粘性あり。土器片を含む
9　にぶい黄褐色土（10YR5/4）　しまりあり。粘性あり。1 ㎜の黄白色砂粒多量。砂層
10　暗赤褐色土（5YR3/3）　しまりあり。粘性あり。土器片少量含む
11　褐色土（10YR4/4）　しまり強。粘性あり
12　褐色土（10YR4/4）　しまり強。粘性あり。15 ㎝未満の腐れ礫多量。地山

0　(1:60)　2m

第5図　試掘トレンチ土層実測図



第６図　調査区配置図・調査前地形測量図



第7図　調査終了後地形測量図

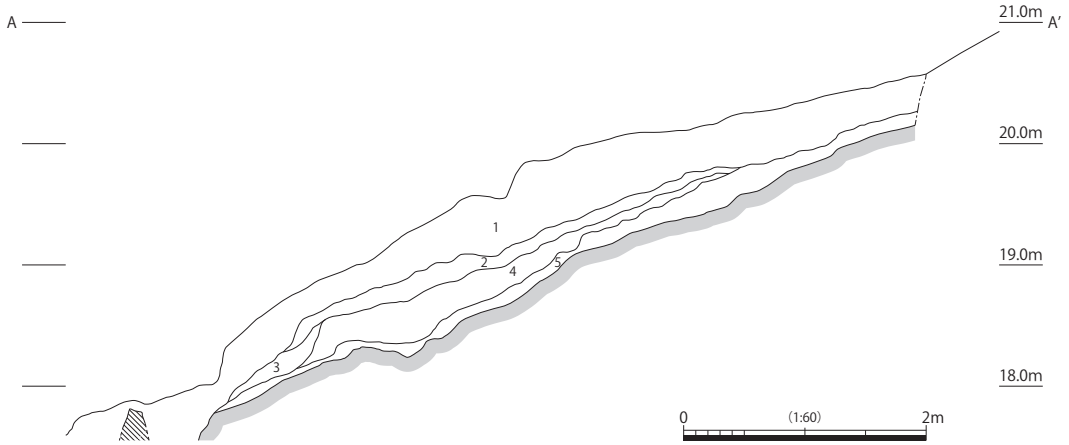
第２節　基本層序

調査区南端に位置する斜面と、調査区の大部分を占める段丘面では土層堆積が大きく異なる。斜面の土砂が段丘面に流入しているのは確実だが、斜面での地滑りと段丘面の水田化により、土層の対応関係の把握は困難である。

斜面は上層から表土・１層：灰褐色土・２層：にぶい赤褐色粘質土・４層：褐色粘質土・５層：にぶい褐色粘質土となる（第８図）。４層以外は遺物包含層である。段丘面の層序は表土・１層：灰オリーブ色粘質土・２層：黄色系粘質土・４層：褐灰色粘質土・５層：黒褐色土・６層：黒色粘質土（第12～14図）・７～10層：黄灰色粘質土とした（第23図）。1･2層は水田耕作土で、３層以下が遺物包含層である。これら遺物包含層は、南から北に緩やかに下るとともに、東から西へも同様に下って行くが、西側では７層上面がほぼ水平になる。５層については段丘面南部にのみ堆積する。５層が存在する範囲の下層は基本的に７層となり、６層はほとんど存在しない。なお、５層は調査区中央付近のB3グリッドを中心に焼土と木炭を大量に含んでおり、ここから年代測定用の試料を採取した。一方、調査区東端・西端では焼土・木炭をほとんど含まない。

また、試掘調査の結果から、発掘調査終盤まで６層の下は無遺物層と考えていたが、後述するNR01に設けたトレンチ及び南北トレンチ２で、６層より下位に存在する層で遺物が出土したため、認識を改めて遺物包含層とした。第13図の朱線部分は、NR01トレンチ１の土層を重ねたものである。南北トレンチ２の土層堆積も合わせて考えると、17層が南北トレンチ２の７層、18層が同８層に対応する可能性がある。なお、７層～10層は、土質は基本的に差異が認められず、混入する粒子の違いにより分層した。

これを受けて調査区北西部（A1・A2・B2グリッド）で、７層以下を面的に掘り下げたところ、弥生土器や須恵器などが出土したが、少量であったため７層以下の掘削はこの範囲のみ行った。

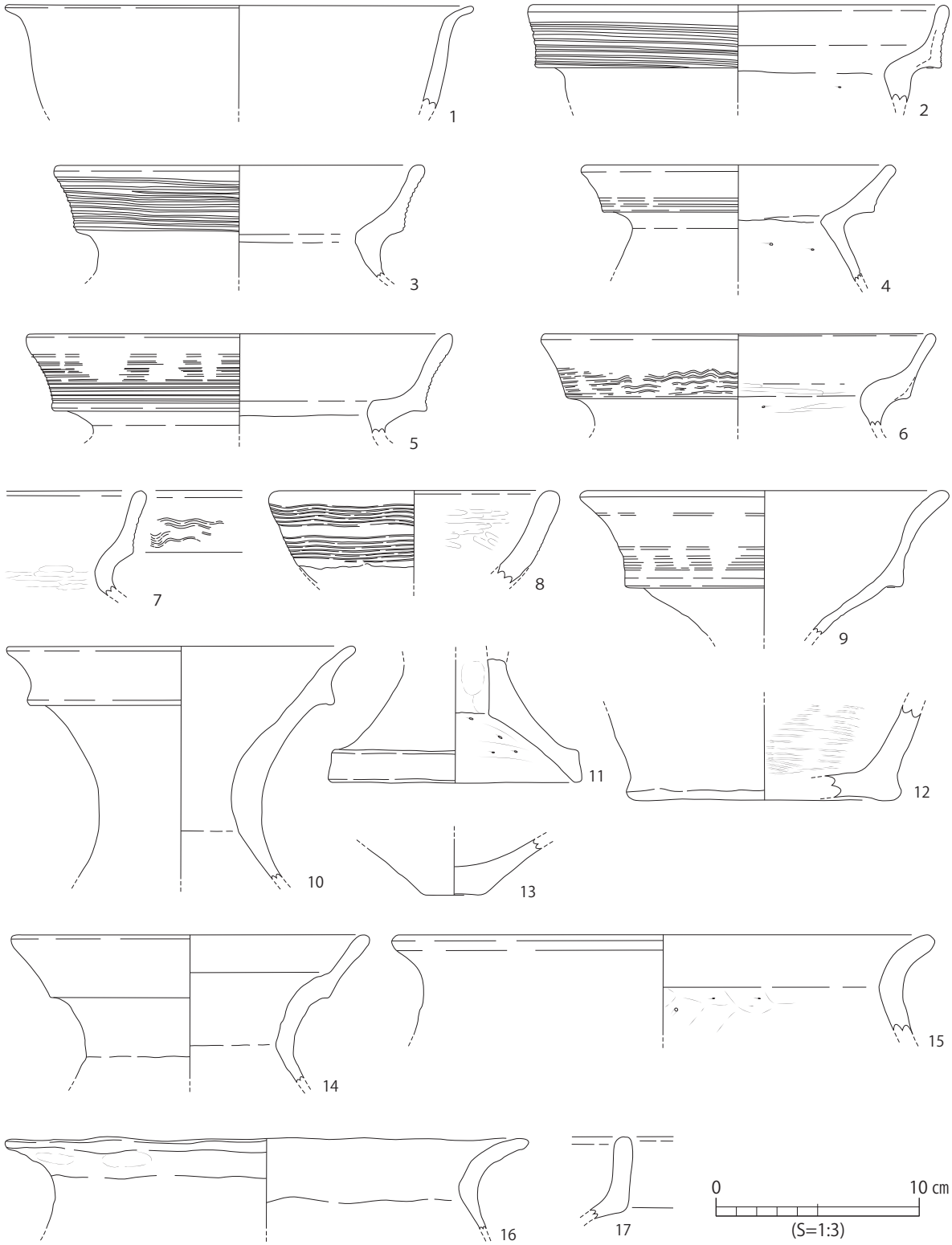


1　灰褐色土（7.5/YR5/2）木根・小さな礫を含みしまりがない　遺物包含層
2　にぶい赤褐色粘質土（5YR4/3）ある時期の地山崩落か　遺物包含層
3　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）　土質的には５層と同じか
4　褐色粘質土（10YR4/4）
5　にぶい褐色粘質土（7.5YR5/4）しまりがあり地山の礫を多く含む　遺物包含層

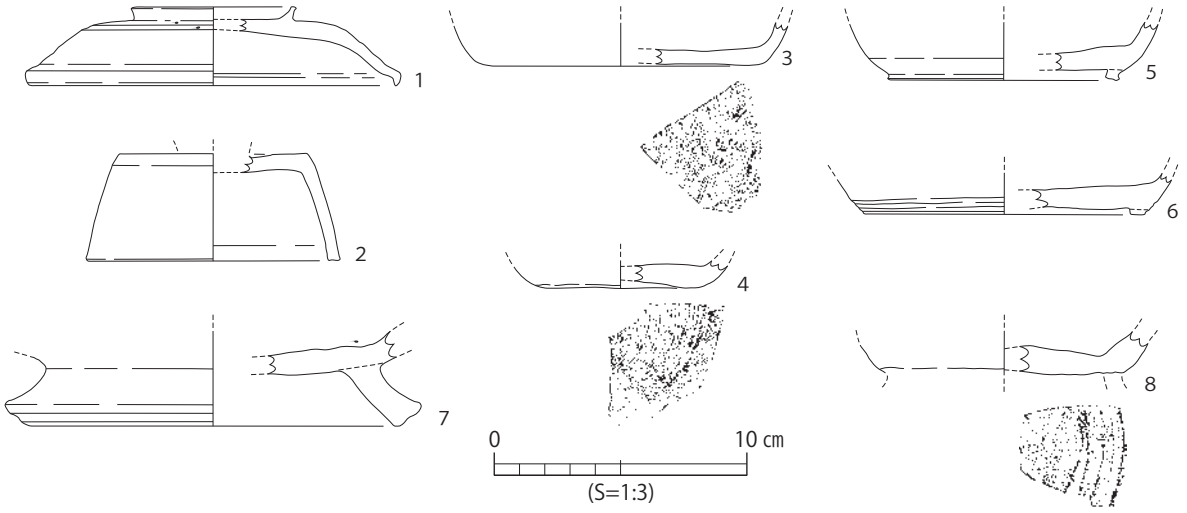
第８図　斜面土層実測図

第３節　斜面の調査

斜面は調査区の南部に位置し、最高所の標高は約21ｍで、段丘面との比高差は４ｍほどであるが傾斜は比較的急である。調査前の地形測量では、調査区南端付近に傾斜の緩やかな箇所が認められ、遺構の存在も想定されたが、調査の結果、遺構は確認できなかった。



第９図　斜面出土遺物実測図１



第10図　斜面出土遺物実測図2

層位的に下位ほど出土遺物の時期が古いが、５層では弥生土器が多いものの土師器もわずかに出土している。また出土遺物は風化が著しく、土層堆積・遺物出土状況と併せて考えると、遺物は斜面上方からの流入土に包含されたものと考えられる。

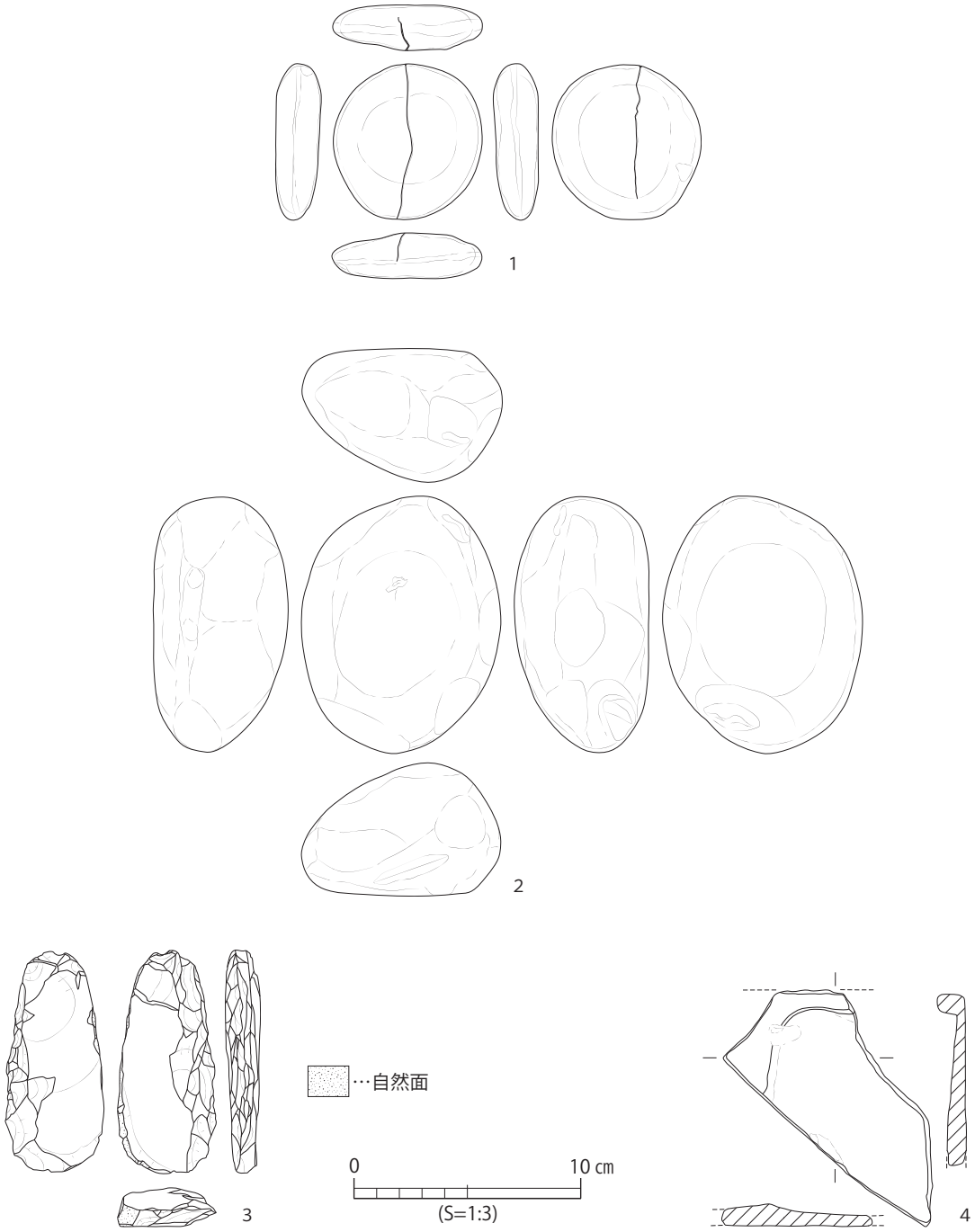
斜面出土遺物（第９図～第11図）

第９図は弥生土器と土師器である。風化が進み、弥生土器・土師器では調整・施文が判別しにくいものが多い。また小片がほとんどで、器形全体が窺えるものはない。

１は弥生時代前期の甕とした。２～７は複合口縁の甕で口縁端部外面には擬凹線・平行沈線が施され、６・７は波状文となる。２は高坏の口縁部の可能性もある。８は高坏の坏部か。外面に平行沈線が施される。９・10は器台である。10の口縁端部の文様は、風化のため有無を含めて不明である。11は器台の脚部か。12・13は底部である。12はしっかりした平底で、内面はハケメ調整である。14は複合口縁の土師器の壺、15～17は奈良時代以降の土師器と見られる。16は薄手で緻密な胎土、17も緻密な胎土で口縁端部が直立する。

第10図は須恵器である。この遺跡で出土する須恵器には、色調が赤褐色のものや焼成が悪く土師質のものが認められる。1･2は蓋で、２は壺などの蓋と見られる。器高が高く、単純な口縁端部をもつ。つまみの形状は不明で、酸化色を呈す。３～５は坏で、3･4は回転糸切り、6はヘラで切り離す。５は、灰白色の砂粒を多く含む特徴的な胎土で、６は内面が紫がかった色調を呈す。７・８は壺の脚部か。７は外面が磨滅し、黒色の付着物も認められることから転用硯の可能性がある。８は剥離した脚と坏部の接合面に、浅い凹みが認められる。

第11図は石製品である。1･2は斜面の最下端から出土したものである。1は全面が磨滅し、表から裏面にかけて浅い亀裂が認められる。亀裂は自然のものであるが、祭祀具として利用された可能性がある。2は磨石で、全面磨滅している。3は石斧などの未成品の可能性もあるが、石核か。左側面のほとんどは自然面で、右側面に細かな剥離がある。風化のためか、剥離は不明瞭である。4は硯の可能性がある。石材は１・２が安山岩、３も安山岩で、サヌカイトである。この遺跡で確認されたサヌカイトはこの１点のみである。４は火山岩で、安山岩とみられるが、風化が著しく詳細は不明である。なお、掲載しなかったが、斜面からは黒曜石の剥片が８点出土している。

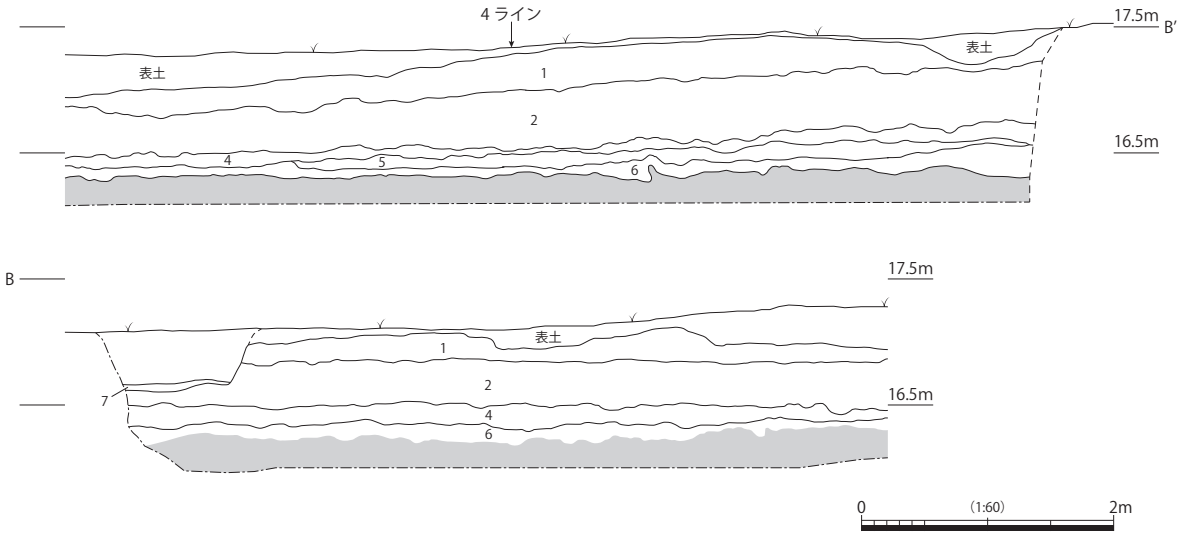


第11図　斜面出土遺物実測図３

第４節　段丘面の調査

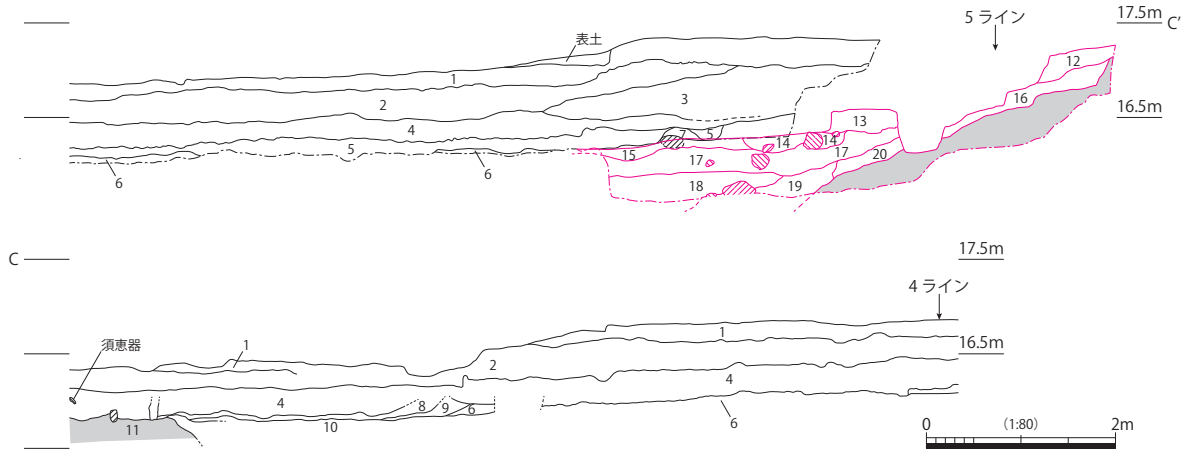
１．検出遺構とその遺物

段丘面は、南端が標高17ｍ、北端が15ｍとごく緩やかな緩斜面となっている。層序は第２節で述べたが、３層～６層が須恵器・土師器を多く出土する遺物包含層で、弥生土器もわずかに認められる。７層は須恵器と灰釉陶器、８層は須恵器と灰釉陶器が混在する。９層は弥生土器のみが出土しているが、量的にはわずかである。なお、５層から採取した木炭を試料としてAMS年代測定を行ったところ、11世紀前半～12世紀後半の値を得ている（第４章参照）。



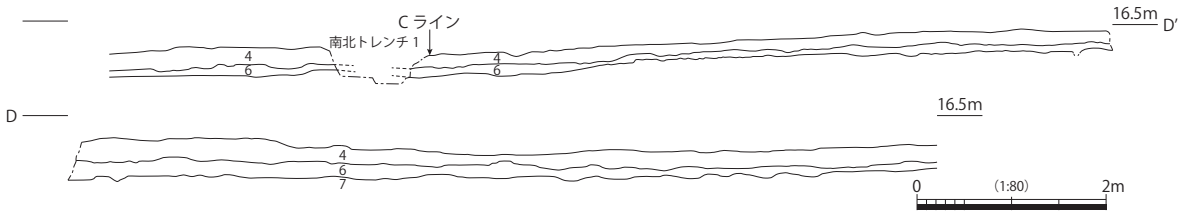
表土
1　灰色粘質土（N5/）水田耕作土
2　にぶい黄橙色粘質土（10YR6/3）水田耕作土か
4　黒褐色粘質土（10YR3/2）黄・白色の砂粒・小礫混入
5　オリーブ黒色粘質土（7.5Y3/2）黄・白色の砂粒（地山由来）、黒色粒（マンガンか）を含む
6　黒色粘質土（5Y2/1）炭化物をわずかに含む
7　黒褐色粘質土（2.5Y3/1）旧表土か

第12図　段丘面東壁土層実測図



1　灰オリーブ色粘質土（5Y4/2）　白・茶（酸化物か）の砂粒多く含み、炭化物粒わずかに含む　水田耕作土とみられる
2　黄灰色粘質土（2.5Y5/1）　白・茶（酸化物か）の砂粒、炭化物粒含む　水田耕作土とみられる
3　灰色粘質土（5Y5/1）　2 層に似るが白色砂粒が少なく、1 ～ 2 ㎝大の褐色の酸化物を多く含む
4　褐灰色粘質土（10YR4/1）　白・茶（酸化物か）の砂粒、1 ㎝大の炭化物、1 ～ 2 ㎝の黄色土ブロックを多く含む
5　黒褐色土（7.5YR3/1）　焼土ブロック、炭化物を大量に含む
6　黒色粘質土（5Y2/1）　炭化物をわずかに含む
7　灰色粘質土（N4/）　黄・茶のブロック・炭を含む
8　黒色粘質土（10YR2/1）
9　褐灰色粘質土（10YR4/1）　黄褐色の粒ブロックを含む　攪乱土か
10　基盤層（粘質土：地山の風化土か）
11　地山（礫を多く含む）
12　灰色粘土（N6/）（水田耕作土か）
13　灰白色粘質土（2.5Y7/1）　にぶい黄褐色土（酸化物：10YR4/3）を大量に含む
14　灰色粘質土（5Y5/1）　にぶい黄褐色土（酸化物：10YR4/3）を多く含む
15　灰色粘質土（5Y5/1）　酸化物が 14 より少ない
16　灰黄色土（2.5Y7/2）　2 ～ 3 ㎝大の黄・白など小礫を含む
17　褐灰色粘質土（10YR5/1）　にぶい黄褐色土（酸化物：10YR4/3）黄・白色砂粒を多く含む
18　青灰色粘土（5PB5/1）
19　灰色粘質土（7.5Y4/1）　白色砂粒を多く含む
20　灰黄色土（2.5Y7/2）　2 ～ 3 ㎝大の黄・白など小礫を含む

第13図　南北トレンチ１土層実測図



4　褐灰色粘質土（10YR4/1）白・茶（酸化物か）の砂粒、１㎝大の炭化物、１～２㎝の黄色土ブロックを多く含む
6　黒色粘質土（5Y2/1）炭化物をわずかに含む
7　灰色粘質土（N4/）黄・茶のブロック・炭化物を含む

第14図　東西トレンチ土層実測図（S=1:80）

遺構は、７層上面で確認した。斜面に近い位置にあるB3・C3グリッドの南部からB4・C4グリッドにかけて確認したピット20、土坑１である（第15図）。調査後の地形測量図（第７図）や南北トレンチ２や東西方向の土層図（第23図）などから、調査区北西部は南北方向の浅い谷状地形になっていることがわかるが、その南東側に存在する比較的高く安定した区域で、遺構が確認されたことになる。また、自然流路１（NR01）も検出したので合わせて記載する。

ピット・SK01（第15・16図）

ピットは平面が不整形のものがほとんどで、長径50㎝から20㎝を下回るものまで様々である。深さは30㎝以上のものも存在するが、多くは20㎝未満の浅いものである。埋土は５層または６層と見られる。平面的な位置に若干のばらつきはあるが、P02・03－P04－P05－P06とP02･03－P07－P13が約２m間隔で並ぶ可能性もある。平面的な位置のみを考えれば、P08－P09－P13－P12もあり得る。P02･03～P06とP08～P12 は等高線に平行、P02･03～P13は直交する並びとなる。小規模なピットであることから、杭列などが想定されよう。なお、いずれのピットからも遺物は出土していない。

SK01は、径約60㎝、深さ約20㎝で、底面はわずかに平坦になる。埋土は６層と見られ、ピットと同様である。遺物は出土していない。

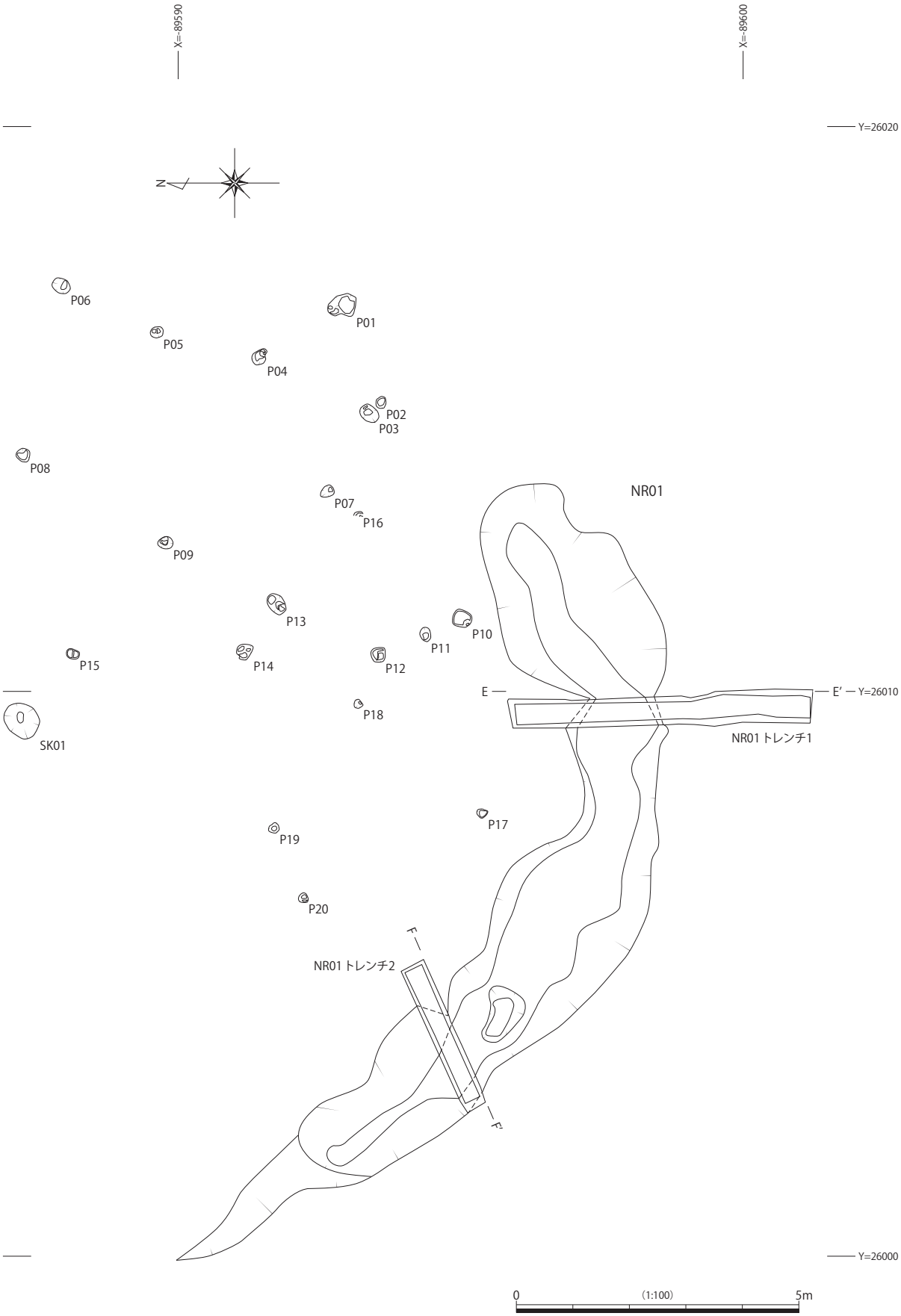
NR01（第15・17・18図）

NR01は段丘面の南端で検出した。平面形は斜面下端の地形に沿うように、緩やかな弧状を呈する。長さは約14m、幅は最大で2.5ｍ、深さは約10㎝である。下端のレベルは、NR01トレンチ１から東側はほぼ水平であるが、北西側へは約20㎝低くなっている。埋土はトレンチの土層図では、NR01トレンチ１で14層、同２で１層で、いずれも灰色の粘土層である。

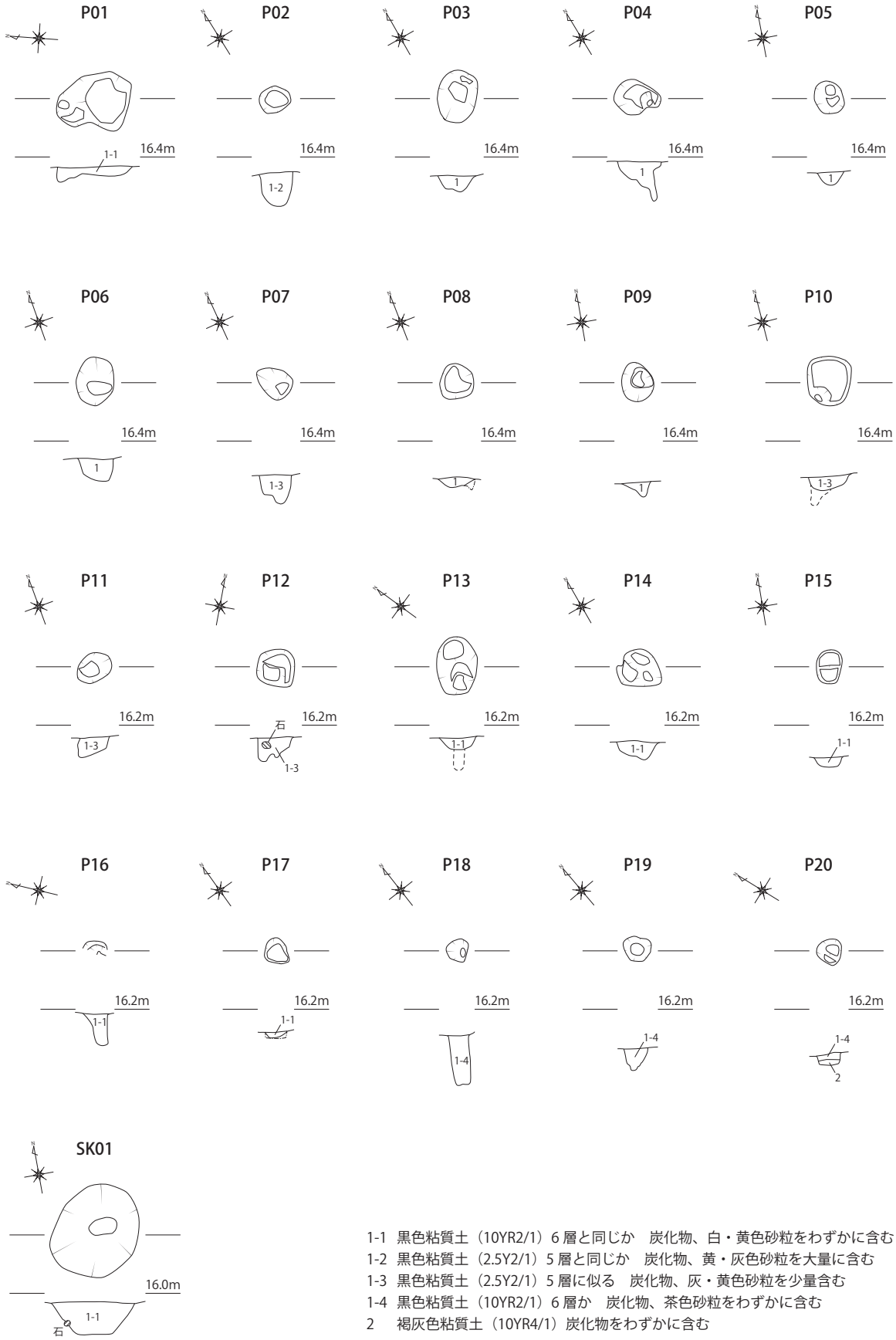
NR01からは、拳大から人頭大の礫が大量に確認された。礫は角がなく丸みを帯びたものばかりで、人為的な加工や被熱は認められない。礫は埋土の中のみでなく、NR01の肩付近にも存在するが、それより北側の５層･６層にはほとんど含まれない。トレンチ１でも17層・18層に礫が含まれるものの、その量はわずかであった。NR01周辺は湧水の影響を受けて軟弱だったため、礫がNR01底面や７層にはまり込んでいるものも多く見られた。

NR01出土遺物（第19図）

遺物は、埋土から土器類・土製品が出土している。１は甕の口縁部で、弥生時代前期のものと見られる。２は弥生時代後期～古墳時代初頭の脚部か。3･4は土師器の口縁部で、緻密な胎土である。5は須恵器で坏の口縁部か。６は土製支脚で、大きく欠損しているが、厚手で比較的緻密な胎土である。突起部下方には指頭圧による大きな凹みが認められ、全体に煤と見られる黒い付着物がある。



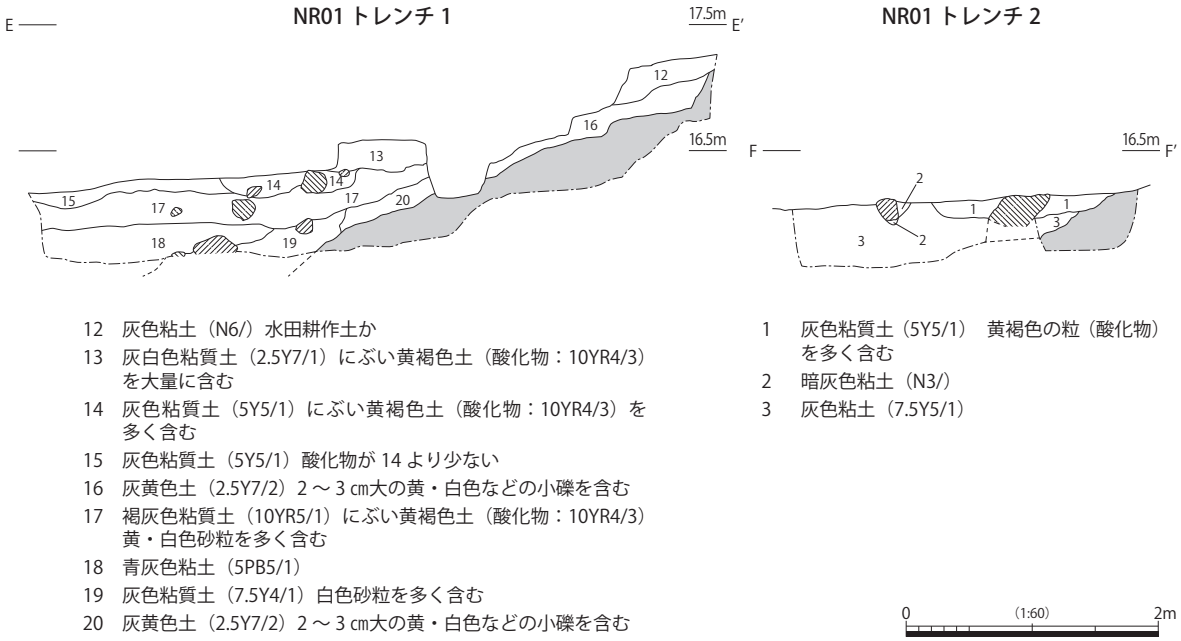
第15図　段丘面ピット・土坑・自然流路位置図



1-1　黒色粘質土（10YR2/1）6 層と同じか　炭化物、白・黄色砂粒をわずかに含む
1-2　黒色粘質土（2.5Y2/1）5 層と同じか　炭化物、黄・灰色砂粒を大量に含む
1-3　黒色粘質土（2.5Y2/1）5 層に似る　炭化物、灰・黄色砂粒を少量含む
1-4　黒色粘質土（10YR2/1）6 層か　炭化物、茶色砂粒をわずかに含む
2　　褐灰色粘質土（10YR4/1）炭化物をわずかに含む

0　(1:40)　1m

第16図　段丘面P01 ～ 20・SK01実測図



12　灰色粘土（N6/）水田耕作土か
13　灰白色粘質土（2.5Y7/1）にぶい黄褐色土（酸化物：10YR4/3）を大量に含む
14　灰色粘質土（5Y5/1）にぶい黄褐色土（酸化物：10YR4/3）を多く含む
15　灰色粘質土（5Y5/1）酸化物が 14 より少ない
16　灰黄色土（2.5Y7/2）2 ～ 3 ㎝大の黄・白色などの小礫を含む
17　褐灰色粘質土（10YR5/1）にぶい黄褐色土（酸化物：10YR4/3）黄・白色砂粒を多く含む
18　青灰色粘土（5PB5/1）
19　灰色粘質土（7.5Y4/1）白色砂粒を多く含む
20　灰黄色土（2.5Y7/2）2 ～ 3 ㎝大の黄・白色などの小礫を含む

1　灰色粘質土（5Y5/1）　黄褐色の粒（酸化物）を多く含む
2　暗灰色粘土（N3/）
3　灰色粘土（7.5Y5/1）

第17図　NR01土層実測図

２．遺構外出土遺物

段丘面の包含層出土遺物は基本的に斜面と同様で、弥生土器から奈良時代以降の土器であるが、須恵器の出土比率が高くなる。また、斜面では確認されなかった鉄鉢形土器、灰釉陶器、中世の陶磁器が加わる。また、黒曜石の石核や剥片もわずかに出土しており、石核のみ掲載した。

段丘面包含層出土遺物（第20図～ 22図・24図）

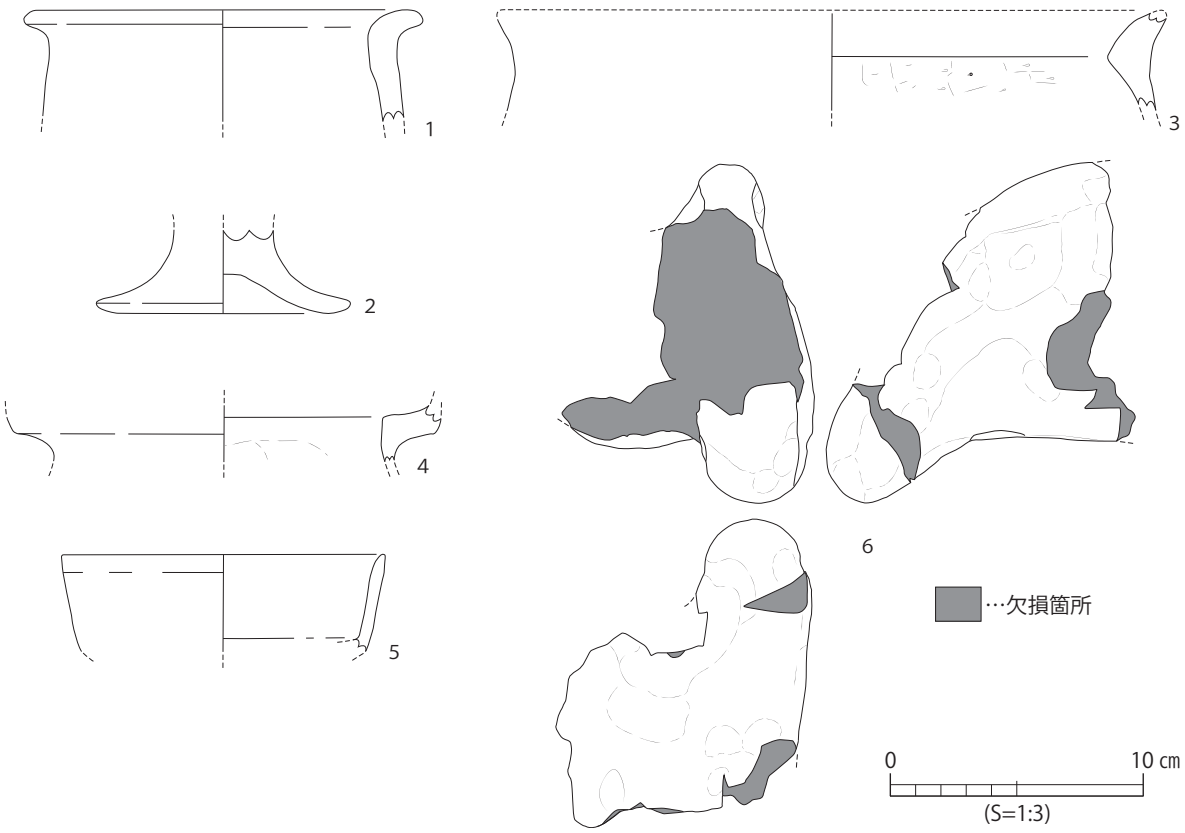
段丘面では調査区北西部で７層以下を面的に掘り下げたことから、包含層出土遺物は４層～６層と７層～９層に分けて記載する。なお、７層～９層の出土遺物には、南北トレンチ１やNR01トレンチにおいて７層以下相当の包含層で確認されたものを含む。

第20図～第22図は、４層～６層出土の遺物である。第20図１～５は弥生土器で、１は壺、２は甕でいずれも前期のものである。３は口縁が肥厚する鉢で中期のものと考えた。４は甕と見られるが、口縁部内面の屈曲が小さく、鼓形器台のような形状である。５の底部は、内面を指頭圧痕とナデで調整する。６～ 14は土師器の甕である。６は口縁端部がわずかに上方に屈曲しており、胴部の最大径は中央よりも下位にあると見られる。色調は内外面とも黒褐色、胎土も砂粒を多く含む特徴的なものである。７～ 14はいずれも口縁部の破片で、端部は外側に屈曲する。いずれもやや粗い胎土である。

第21図も土師器で、１～５は甕の口縁である。1･2は頸部が直角に近い角度で屈曲し、口縁端部がわずかに肥厚する。３は頸部が鋭角に屈曲し、口縁はほぼ水平に延びる。４は口縁部が短く肥厚する。５は口縁が大きく肥厚する。６は坏である。器壁が厚く、内面にわずかに屈曲があり、口縁は細くのびる。内・外面にハケメが認められる。

第22図１～ 20は須恵器である。１～３は坏蓋で、口縁端部が短く屈曲する。1･2は別個体であるが、２点とも外面に色調･質ともほぼ同様な自然釉がかかる。３は内外面とも橙色で、土師器のような焼成である。４・５は坏の口縁部、６は無高台で灰色を呈し、やや軟質な焼成である。回転糸切り痕が、明瞭に認められる。７～ 10は、高台の接地面付近に凹みをもつものである。７は胴部下位

第18図　NR01礫検出状況実測図



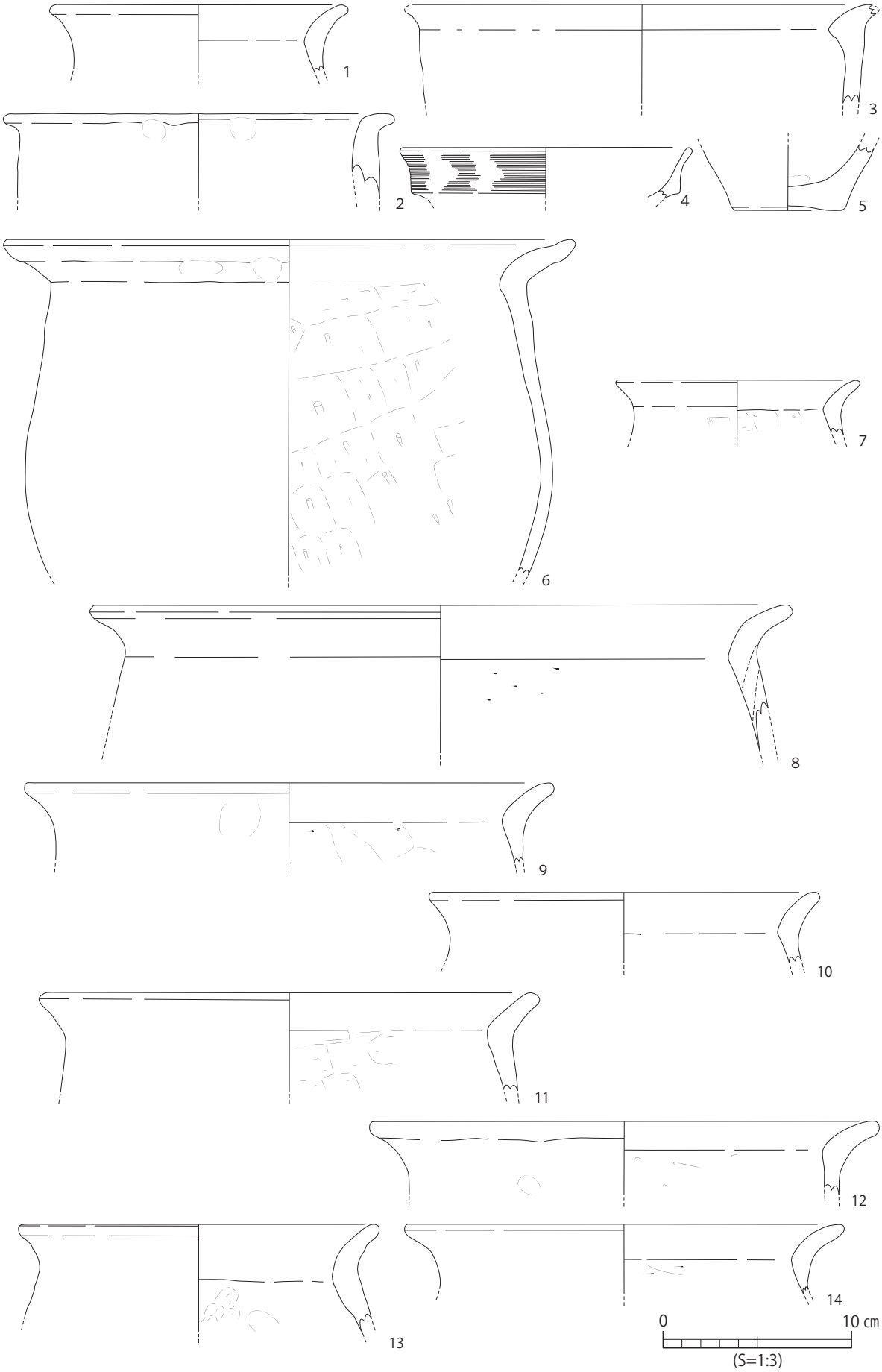
第19図　NR01出土遺物実測図

が屈曲し、外反しながら口縁部へ向かう。糸切り後ナデ調整と見られる。色調は褐灰色で、胎土は細かい砂粒を大量に含む。10も橙色を呈し、土師器と同様な焼成である。また、9はヘラ切りと見られる。11 ～ 16は単純な形の高台をもち、厚さ、高さは様々である。11は体部が深い坏で赤みがかった色調である。16は高台が底部の端に付き、浅い坏部を持つものであろう。そのほかの坏は高台の位置や坏部の形状が不明である。また、14は底部中央に糸切りの痕跡が認められる。17 ～ 20は器壁が厚く、高台がつく壺と見られる。17は内外面とも胴部の下端に指頭圧痕が残り、外面の一部が酸化色を呈す。20は球状の胴部をもつもので、他もこのような器形と考えられる。

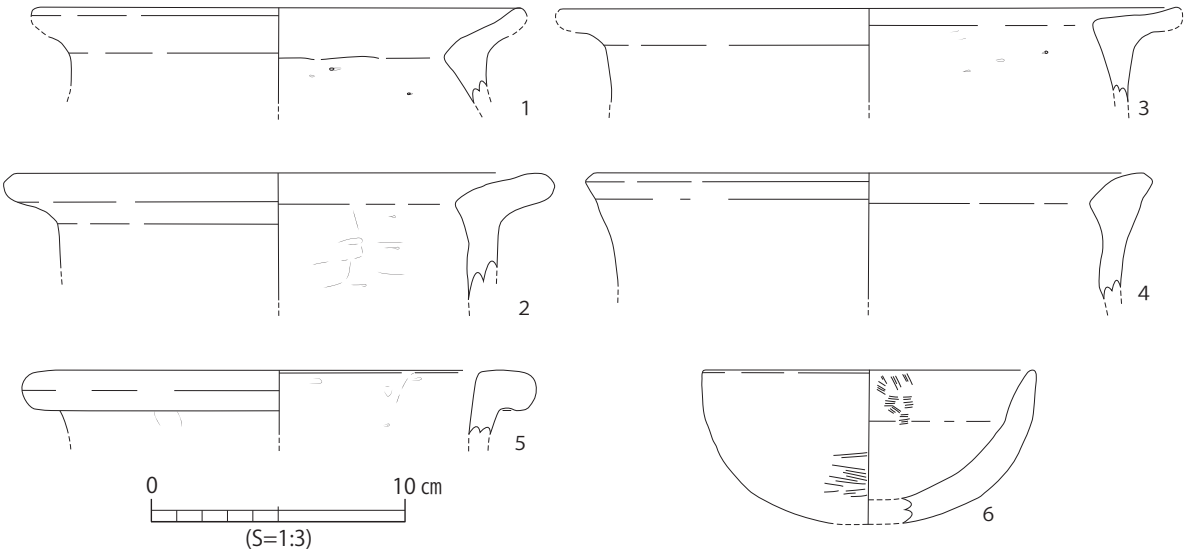
21・22は鉄鉢形土器である。小片であるが、いずれも外面に沈線が認められる。23は灰釉陶器で、外面と内面底部に釉が認められるが、外面の一部に釉がかからない箇所があるほか、底部全体に歪みがあり、他の土器の融着も認められる。器種は淨瓶または水瓶と見られ、猿投窯産のものでK-90窯式と考えられる[1)]。なお、接合できた破片が段丘面４層から、接合しなかったものの同一個体の可能性がある破片が同７層から出土している。24は青磁の椀である。底部の破片で、高台に沿って打ち欠かれており、残存する部分に文様は認められない。龍泉窯系青磁椀Ⅰ - １類である[2)]。26は土製支脚の突起部である。

なお、写真のみの掲載としたが、顔料が塗布された土器が６層から出土している。器壁の薄い土師器で、小片のため器種などは不明であるが、明赤褐色の顔料が内・外面に帯状に塗布され、断面にも付着している（図版18）。

第24図は７層～９層の出土遺物である。１ ～ 11は弥生土器で、８層または９層から出土している。１は壺で、口縁部外面に多条の平行沈線を施す。２ ～ ８は複合口縁の甕である。５や７など多条の擬凹線や平行沈線をもつものが認められ、風化のため調整や文様が確認できない個体も、同様な



第20図　段丘面包含層出土遺物実測図1



第21図　段丘面包含層出土遺物実測図2

文様をもつと考えられる。また、3･4のように肩部に刺突文が施されるものもある。9は高坏の脚部と見られる。調整は風化のため不明である。10は底面の大きい底部で、11は甕などの底部につく台か。出土した土器はほとんど弥生時代後期のものだが、10のように前～中期とみられるものも出土している。

12･13は土師器で単純口縁の甕である。12は南北トレンチ2、13はA2グリッドのいずれも7層から出土している。14 ～ 18は須恵器で、7層･8層から出土している。底部で糸切りが認められるものはない。17はNR01トレンチ2の3層から出土したもので、層位は段丘面7層相当と考えられる。壺の頸部で、赤灰色を呈し、胎土・色調とも第10図2及び第22図11に類似する。18は壺か。胴部が下端付近でわずかに屈曲し、わずかに外反しながら上方へのびる。

19・20は灰釉陶器である。19は淨瓶または水瓶と見られる。脚部外面のほか底部内面にも釉が認められる。20は唾壺と見られる。外面全体に釉が認められる。いずれも猿投窯産で、K-90窯式と考えられる[3)]。

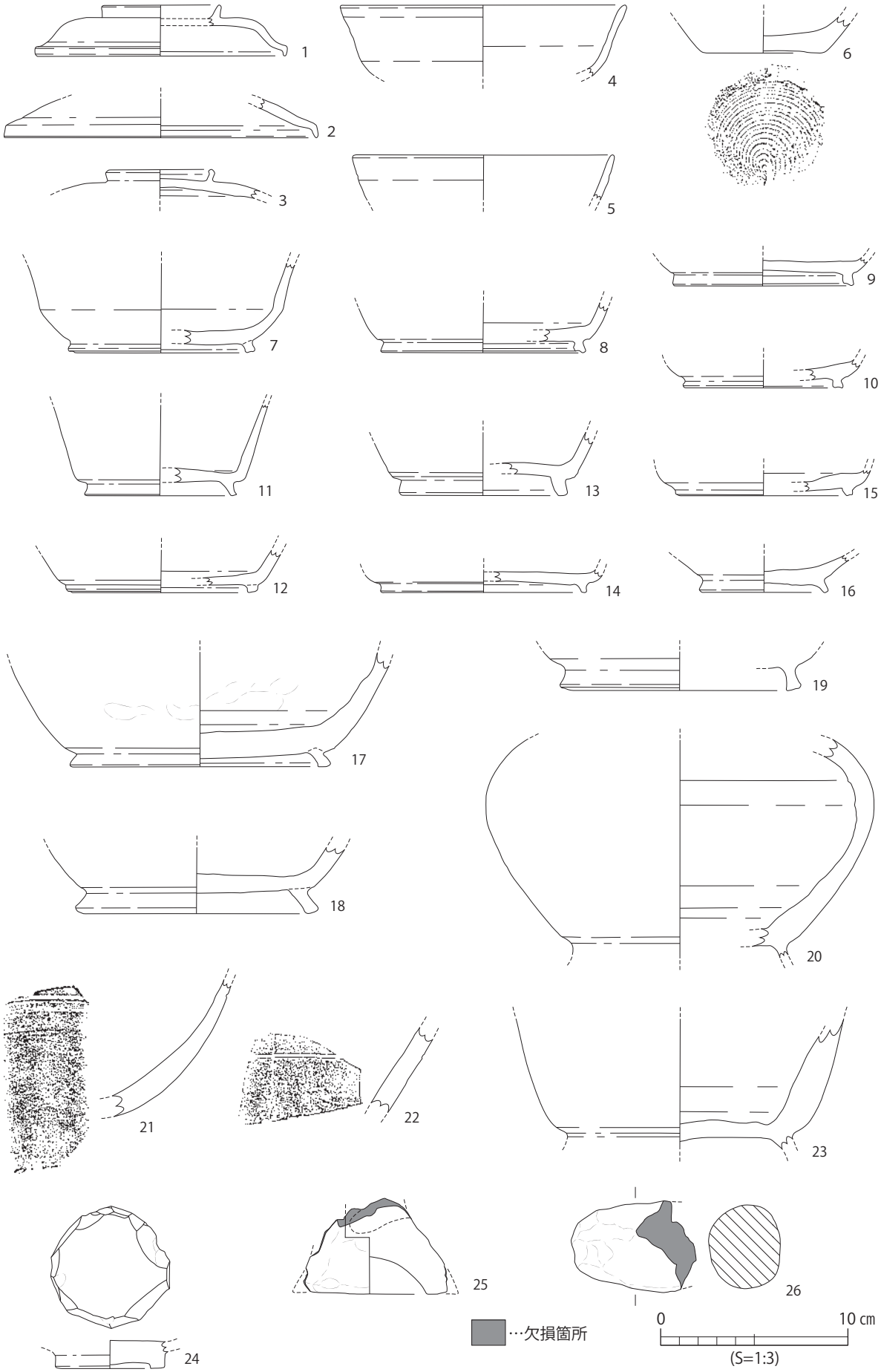
21は黒曜石の石核である。NR01トレンチ2の3層から出土したもので、層位は段丘面7層相当と考えた。表面と側面には大小の剥離が認められるが、一部に自然面が残る。裏面はほとんど自然面のままである。なお、黒曜石の剥片は、段丘面では5層･6層･8層から出土している。

註

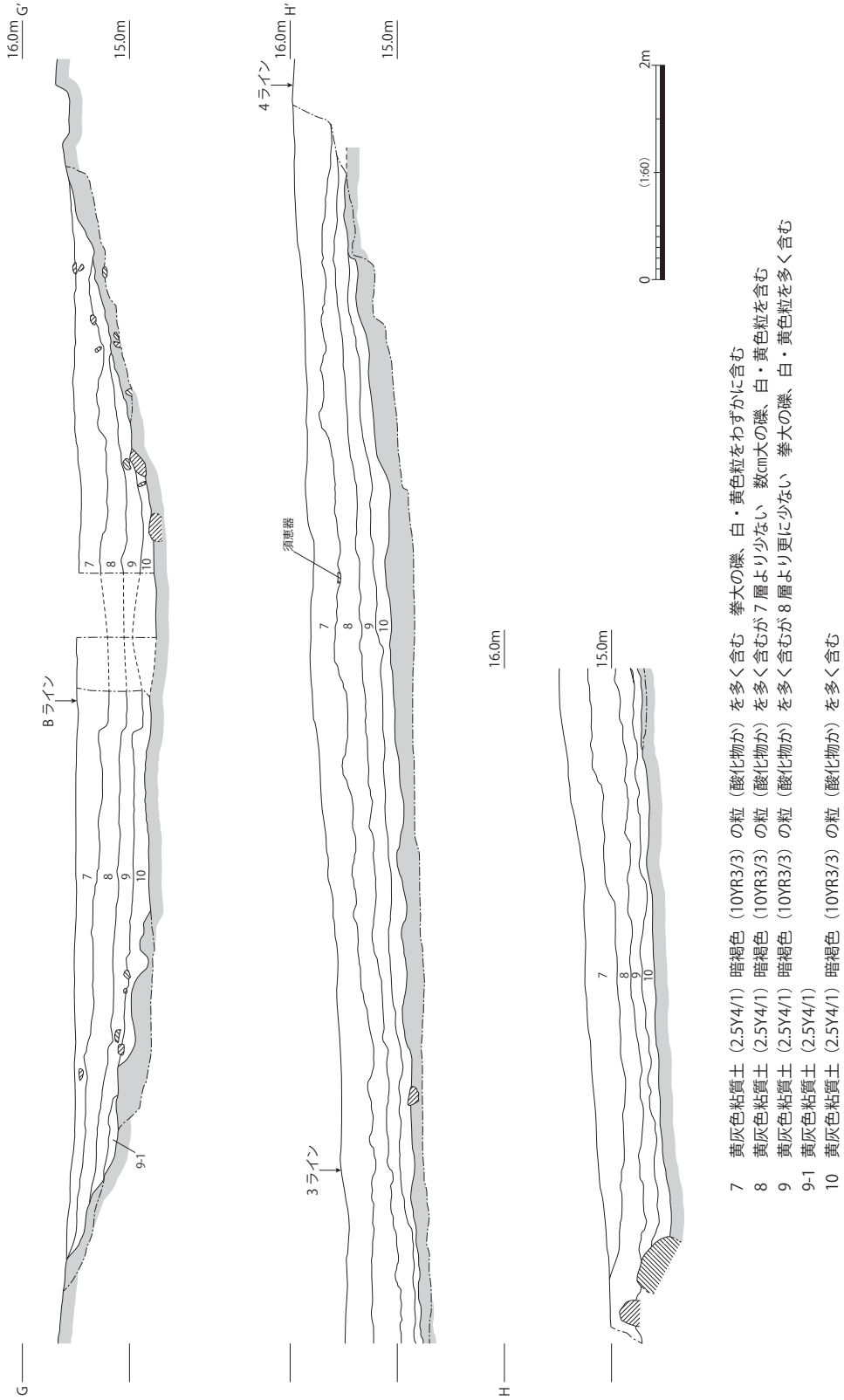
1）灰釉陶器の器種・産地・時期については、愛知学院大学藤澤良祐氏による御指導及び次の文献による。
山下峰司1995「4. 灰釉陶器・山茶碗」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

2）太宰府市教育委員会2000『大宰府条坊跡－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第49集

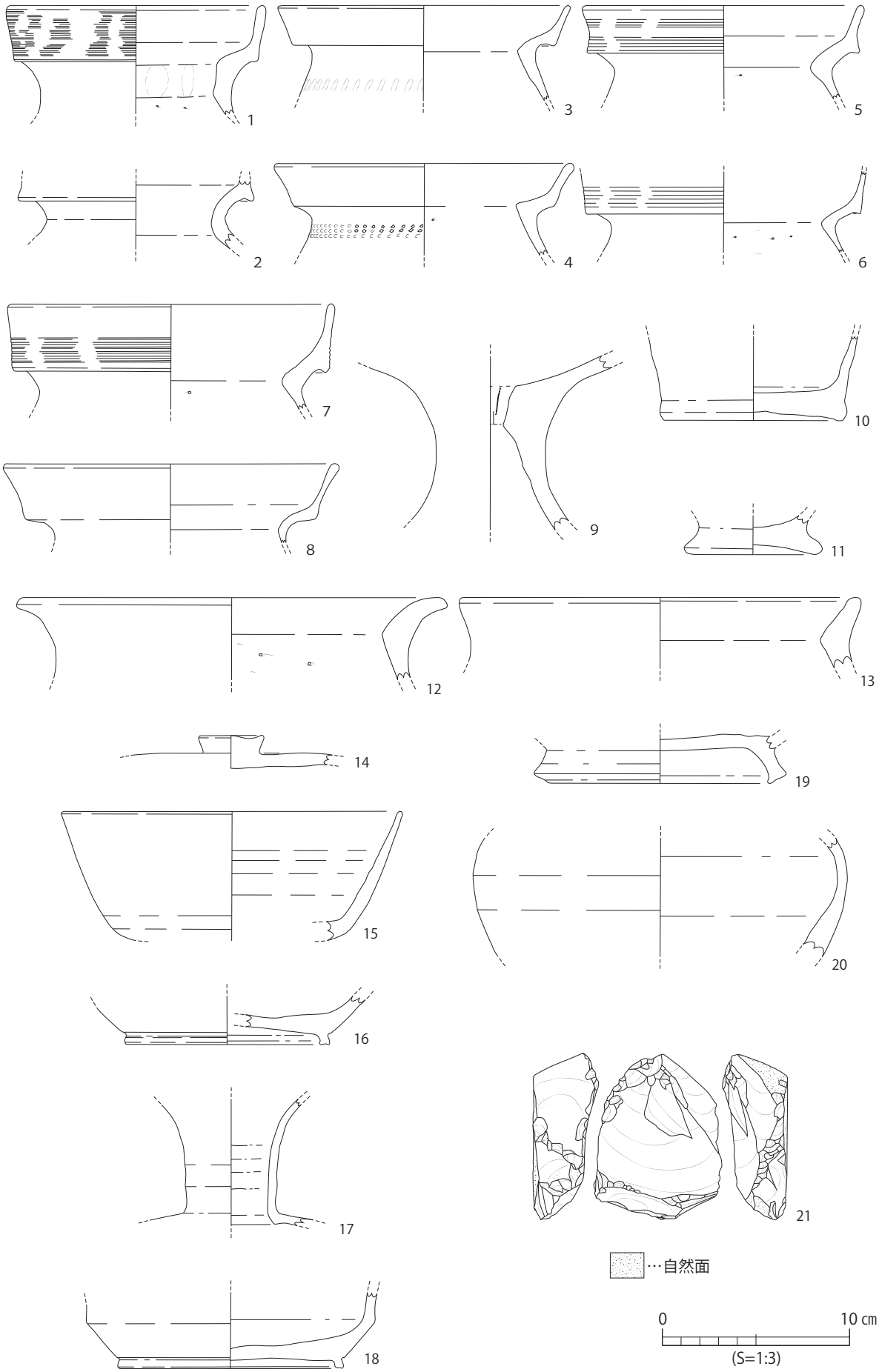
3）註1に同じ



第22図　段丘面包含層出土遺物実測図3



第23図　A2・B2グリッド南壁土層図・南北トレンチ２土層図



第24図　段丘面包含層出土遺物実測図４

第４章　自然科学分析

小金川Ｂ遺跡発掘調査に伴う自然科学分析

渡辺正巳：文化財調査コンサルタント（株）

はじめに

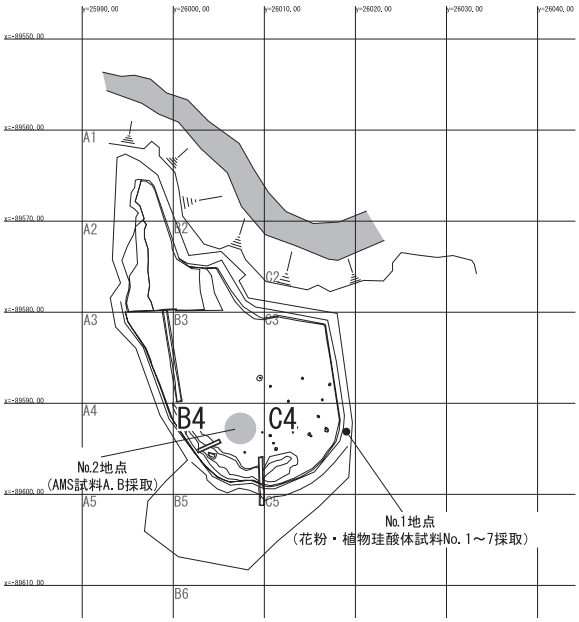
小金川Ｂ遺跡は島根県中部大田市静間町地内に位置し、日本海に直接流入する小河川中流域の河岸段丘～段丘斜面上に立地し、海岸線までは、0.8kmほどの距離に位置する。

本報は遺跡内及び遺跡周辺での植生変遷を明らかにするとともに、遺構の時期を明らかにする目的で、文化財調査コンサルタント株式会社が、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターからの委託を受け、実施・報告した調査報告書を再編したものである。

分析試料について

分析試料のうち花粉分析、植物珪酸体分析用試料は、島根県教育庁埋蔵文化財センターと協議の上、文化財調査コンサルタント株式会社が採取した。AMS年代測定用試料は島根県教育庁埋蔵文化財センターにより採取・保管されていた試料から分取していただいた。また、以下に示す平面図及び断面図は、島根県教育庁埋蔵文化財センターより御提供を受けた原図をもとに、作成した。

調査区平面図（第１図）中に試料採取地点を示す。№1地点（C4区：第２図中①～⑦）にて花粉・植物珪酸体分析試料を採取したほか、Ｂ４区内５層（第３図）から年代測定試料Ａ、Ｂが採取されていた。



第１図　調査区平面図（試料採取地点）

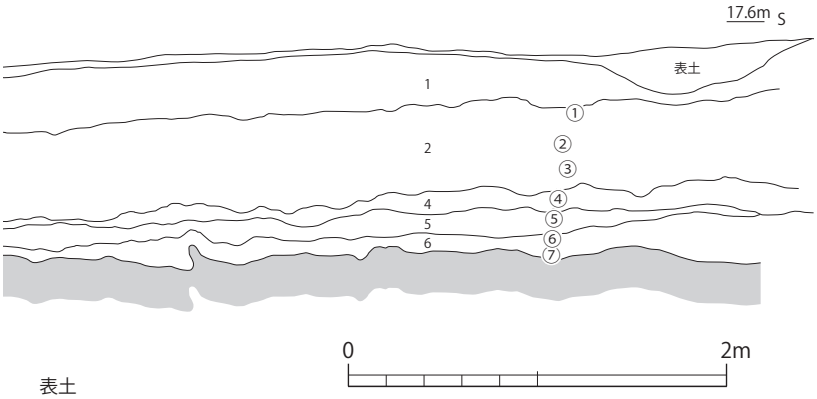
分析方法

(1) 微化石概査方法

花粉分析用プレパラート及び花粉分析処理残渣を顕微鏡下で観察し、花粉（胞子）、植物片、微粒炭、珪藻、植物珪酸体、火山ガラスの含有状況を５段階で示した。

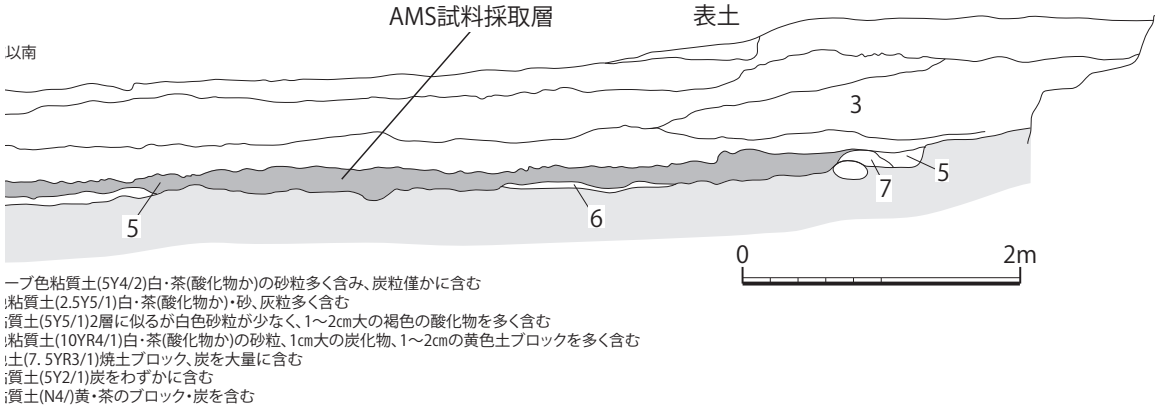
(2) 花粉分析方法

渡辺（2010）に従って実施した。花粉化石の観察・同定



表土
1　灰色粘質土（N5/）　水田耕作土
2　にぶい黄橙色粘質土（10YR6/3）　同上か
4　黒褐色粘質土（10YR3/2）　黄・白色の砂粒・小礫混入
5　オリーブ黒色粘質（7.5Y3/2）　黄・白色の砂粒（地山由来）、黒色粒（マンガンか）を含む
6　黒色粘質土（5Y2/1）　炭をわずかに含む

第２図　№1地点：C4区断面図（花粉・植物珪酸体試料採取位置）



第 3 図　№ 2 地点：B4 区断面図（AMS 試料採取層）

は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が200粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村（1974）に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科（40ﾐｸﾛﾝ以上）と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科（40ﾐｸﾛﾝ未満）に細分した。

第 1 表　同定対象分類群

同定レベル	コード	分類群	対応する栽培植物
1	1	イネ	イネ
3	3	イネ籾殻（穎の表皮細胞）	イネ
	21	ムギ類（穎の表皮細胞）	コムギ・オオムギ
	41	オヒシバ属（シコクビエ型）	シコクビエ
栽培植物との対応が明らかな分類群	61	キビ族型	ヒエ・アワ・キビ
	62	キビ属型	キビ
	64	ヒエ属型	ヒエ
	66	エノコログサ属型	アワ
	84	ウシクサ族Ｂ	サトウキビ
	91	モロコシ属型	モロコシ
	93	ジュズダマ属型	ハトムギ
4	11	サヤヌカグサ属	サヤヌカグサ・アシカキ
	13	マコモ属	マコモ
	31	ヨシ属	ヨシ
	33	ダンチク属	ダンチク
	35	ヌマガヤ属型	ヌマガヤ
	51	シバ属型	シバ属
	71	トダシバ属	トダシバ属
	81	ススキ属型	ススキ属
	83	ウシクサ族Ａ	チガヤ属など
	201	メダケ節型	メダケ節
	203	ネザサ節型	ネザサ節
母植物との対応が明らかな分類群	205	チマキザサ節型	チマキザサ節・チシマザサ節
	207	ミヤコザサ節型	ミヤコザサ節
	209	マダケ属型	マダケ属
	350	カヤツリグサ科（スゲ属など）	スゲ属
	390	シダ類	シダ類
	501	ブナ科（シイ属）	シイ類
	503	ブナ科（アカガシ亜属）	カシ類
	510	クスノキ科	パリパリノキなど（クスノキ以外）
	520	マンサク科（イスノキ属）	イスノキ属
	530	アワブキ科	アワブキ科
	540	モクレン属型	モクレン属
	570	マツ科型	マツ科
	580	マツ属型	マツ属

(3) 植物珪酸体分析方法

藤原（1976）のグラスビーズ法に従って実施した。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡により常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。同定に際して、母植物との対応が明らかな、イネ亜科の機動細胞を中心とした分類群（第1表）を対象とした。また、植物珪酸体と同時に計数したグラスビーズの個数が300を超えるまで、計数を行った。

(4) AMS 年代測定方法

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行った。この後、二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。^{14}C 濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期：5568年で年代計算を行った。暦年代較正にはOxCal ver. 4.4（Bronk Ramsey, 2009）を利用し、INTCAL20（ Reymer et al., 2020 ）を用いた。

分析結果

(1) 微化石概査結果

概査結果を第２表に示す。

花粉化石は全ての試料で、統計処理に十分な量が検出できた。微粒炭、植物珪酸体は上部で検出量がやや少ない傾向があった。植物片、珪藻、火山ガラスはやや少なかった。

第２表　微化石概査結果

地点	試料No.	花粉	微粒炭	植物片	珪藻	植物珪酸体	火山ガラス
No.1	1	◎	△	○	×	△	△
	2	○	△	△	×	△	△
	3	○	△	△	△×	△	△
	4	◎	◎	△	△×	△	△
	5	○	◎	△	×	○	△
	6	◎	◎	△	×	◎	△
	7	○	◎	△	×	◎	△

凡例 ◎ ：十分な数量が検出できる　○ ：少ないが検出できる　△ ：非常に少ない
△× ：極めてまれに検出できる　× ：検出できない

(2) 花粉分析結果

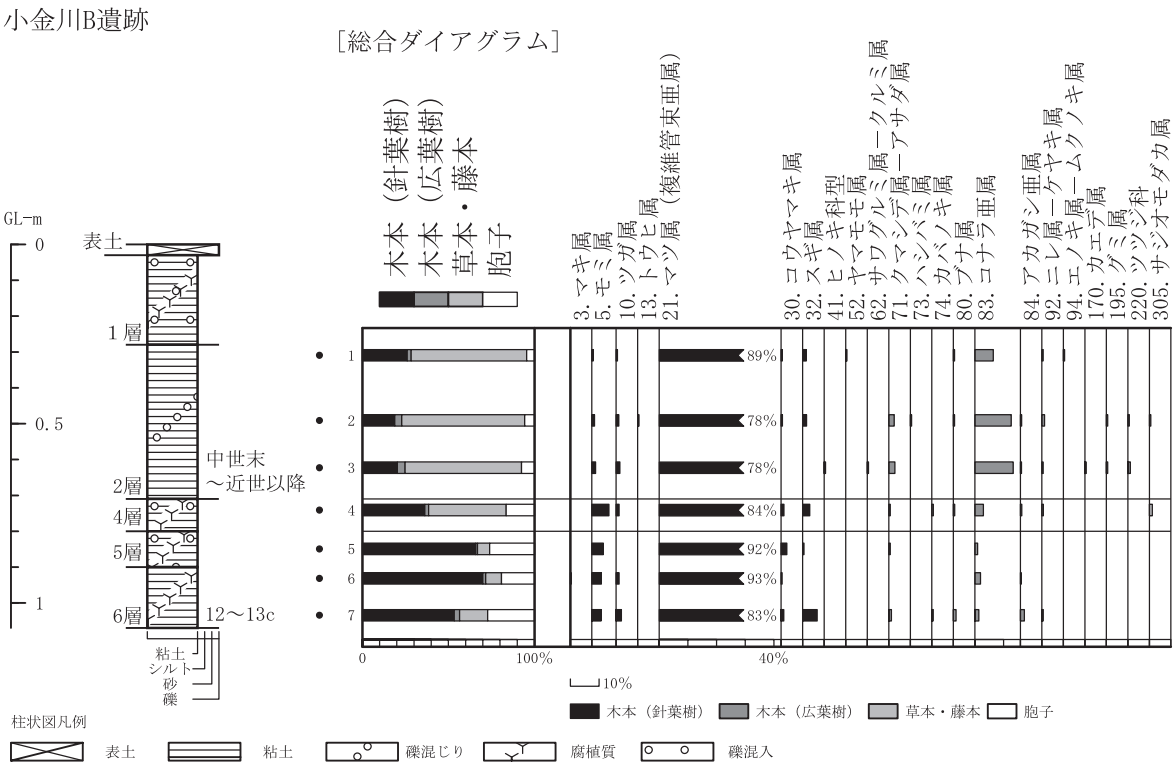
分析結果を第４図の花粉ダイアグラム、第３表の花粉組成表に示す。

花粉ダイアグラムでは、分類ごとに百分率（百分率の算出には、木本花粉総数を基数にしている）を、分類群ごとに異なるハッチのスペクトルで表している。このほか、[総合ダイアグラム] として分類群ごとの割合を示したほか、[含有量ダイアグラム] として分類群ごとに含有量（湿潤試料1g中の粒数）を算出し、変化を示している。また花粉・胞子化石含有量が少なく、木本花粉がほとんど検出できなかった試料№８～６については検出できた分類群を「＊」で示した。

(3) 植物珪酸体分析結果

分析結果を第５図の植物珪酸体ダイアグラム、第４表の植物珪酸体分析組成表に示す。

植物珪酸体ダイアグラムでは、検出密度を分類群ごとにスペクトルで表している（イネ科（機動細胞）は黒、樹木起源は白のスペクトルで表した）。また、寒暖の指標である「メダケ率」と、関東地方での積雪量の指標である「チマキザサ節型/ミヤコザサ節型」をグラフで示した。

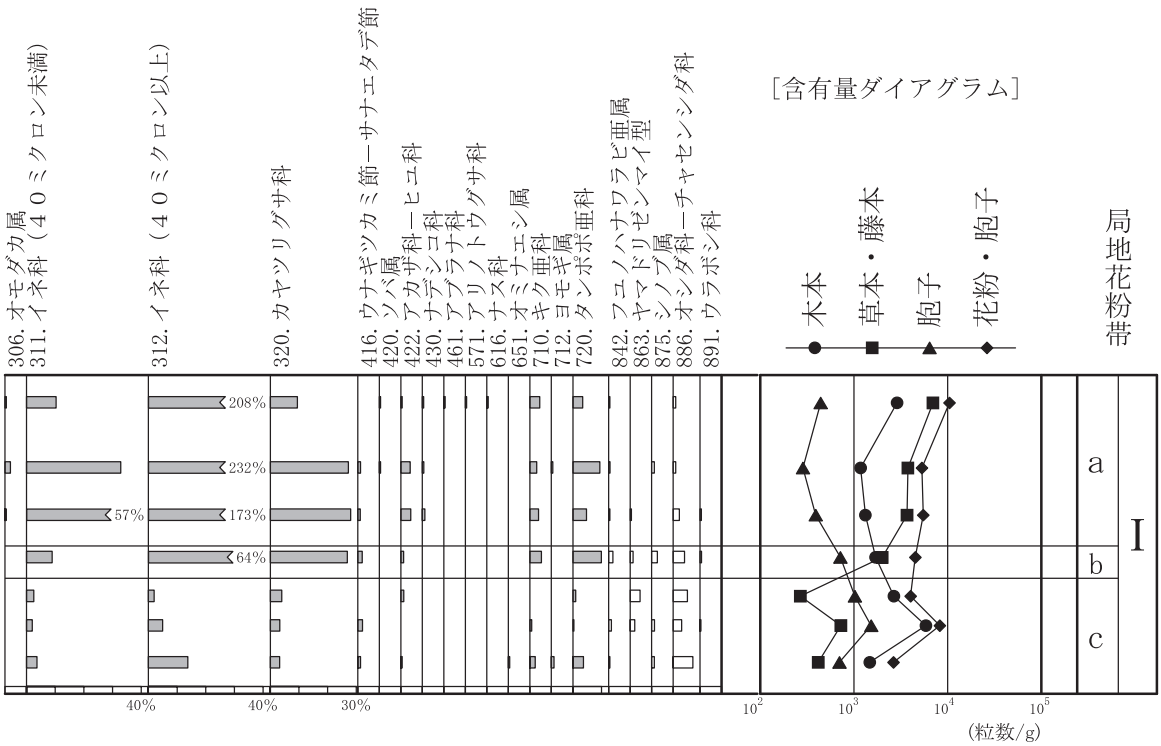


第４図　植物珪酸体

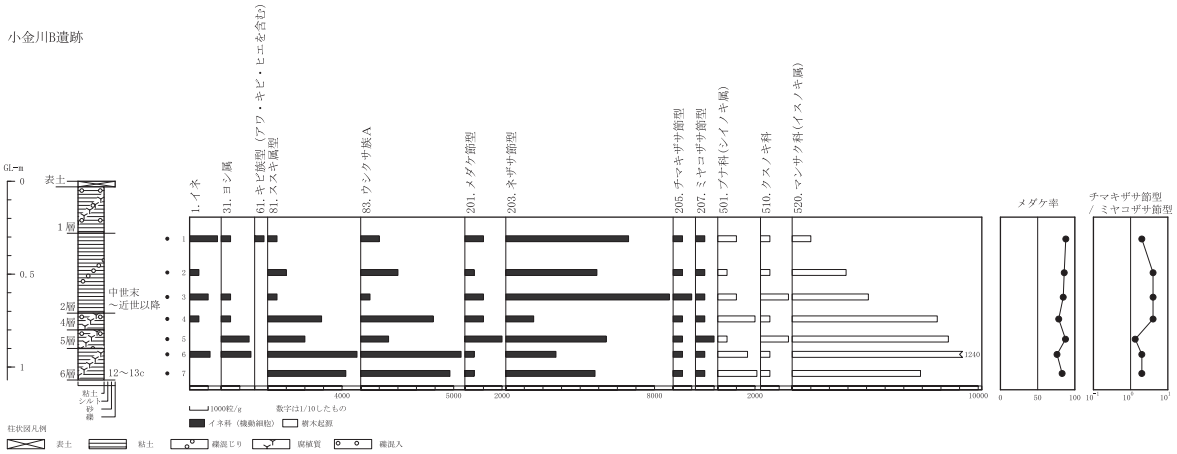
第３表　花粉化石組成表

地点		No.1													
地層		2層						4層		5層		6層			
試料No.		1		2		3		4		5		6		7	
3 *Podocarpus*	マキ属											1	0.3%		
5 *Abies*	モミ属	1	0.4%	2	0.9%	3	1.3%	12	6.0%	8	4.0%	10	3.3%	7	3.2%
10 *Tsuga*	ツガ属	1	0.4%	2	0.9%	3	1.3%	2	1.0%			3	1.0%	4	1.8%
13 *Picea*	トウヒ属			1	0.5%										
21 *Pinus* (*Diploxylon*)	マツ属(複維管束亜属)	208	88.5%	166	77.9%	182	78.4%	169	84.1%	184	92.0%	281	92.7%	182	83.5%
30 *Sciadopitys*	コウヤマキ属	1	0.4%	1	0.5%			2	1.0%	4	2.0%	1	0.3%	2	0.9%
32 *Cryptomeria*	スギ属	3	1.3%	3	1.4%			5	2.5%	1	0.5%			11	5.0%
41 Cupressaceae type	ヒノキ科型					1	0.4%								
52 *Myrica*	ヤマモモ属	1	0.4%												
62 *Pterocarya-Juglans*	サワグルミ属－クルミ属					1	0.4%								
71 *Carpinus-Ostrya*	クマシデ属－アサダ属	1	0.4%	4	1.9%	5	2.2%	1	0.5%	1	0.5%			2	0.9%
73 *Corylus*	ハシバミ属			1	0.5%										
74 *Betula*	カバノキ属							1	0.5%					1	0.5%
80 *Fagus*	ブナ属	1	0.4%	1	0.5%			1	0.5%					2	0.9%
83 *Quercus*	コナラ亜属	15	6.4%	27	12.7%	31	13.4%	6	3.0%	2	1.0%	6	2.0%	3	1.4%
84 *Cyclobalanopsis*	アカガシ亜属			1	0.5%	1	0.4%	1	0.5%			1	0.3%	3	1.4%
92 *Ulmus-Zelkova*	ニレ属－ケヤキ属	1	0.4%	2	0.9%	1	0.4%	1	0.5%					1	0.5%
94 *Celtis-Aphananthe*	エノキ属－ムクノキ属	1	0.4%												
170 *Acer*	カエデ属					1	0.4%								
195 *Elaeagunus*	グミ属			1	0.5%	1	0.4%								
220 Ericaceae	ツツジ科	1	0.4%	1	0.5%	2	0.9%								
305 *Alisma*	サジオモダカ属			1	0.5%			2	1.0%						
306 *Sagittaria*	オモダカ属	1	0.4%	4	1.9%	1	0.4%								
311 Gramineae(<40)	イネ科(40ミクロン未満)	24	10.2%	70	32.9%	133	57.3%	18	9.0%	5	2.5%	6	2.0%	8	3.7%
312 Gramineae(>40)	イネ科(40ミクロン以上)	484	206.0%	495	232.4%	402	173.3%	129	64.2%	4	2.0%	15	5.0%	30	13.8%
320 Cyperaceae	カヤツリグサ科	22	9.4%	58	27.2%			54	26.9%	8	4.0%	10	3.3%	7	3.2%
411 *Rumex*	ギシギシ属					65	28.0%								
416 *Echinocaulon-Persicaria*	ウナギツカミ節－サナエタデ節			2	0.9%	2	0.9%	3	1.5%			5	1.7%	2	0.9%
420 *Fagopyrum*	ソバ属	1	0.4%	1	0.5%										
422 Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	1	0.4%	7	3.3%	8	3.4%	2	1.0%	2	1.0%				
430 Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	0.4%	1	0.5%	2	0.9%							1	0.5%
450 Ranunculaceae	キンポウゲ科	1	0.4%												
461 Cruciferae	アブラナ科	1	0.4%												
571 Haloragaceae	アリノトウグサ科	1	0.4%												
611 Lamiaceae	シソ科	1	0.4%												
616 Solanaceae	ナス科	1	0.4%												
651 *Patrinia*	オミナエシ属	1	0.4%											1	0.5%
710 Carduoideae	キク亜科	8	3.4%	5	2.3%	7	3.0%	8	4.0%			2	0.7%	4	1.8%
712 *Artemisia*	ヨモギ属	1	0.4%	1	0.5%									2	0.9%
720 Cichorioideae	タンポポ亜科	8	3.4%	20	9.4%	11	4.7%	20	10.0%	2	1.0%	1	0.3%	8	3.7%
842 Subgenus Sceptridium	フユノハナワラビ亜属	1	0.4%	1	0.5%	1	0.4%	3	1.5%			3	1.0%	1	0.5%
863 *Osmunda Cinnamomea type*	ヤマドリゼンマイ型					1	0.4%	2	1.0%	7	3.5%	5	1.7%		
875 *Davallia*	シノブ属			2	0.9%			4	2.0%			3	1.0%	2	0.9%
886 Aspid.-Asple.	オシダ科－チャセンシダ科	2	0.9%	2	0.9%	5	2.2%	8	4.0%	10	5.0%	9	3.0%	15	6.9%
891 Polypodiaceae	ウラボシ科					1	0.4%	1	0.5%			1	0.3%		
898 MONOLATE-TYPE-SPORE	単条溝胞子	5	2.1%	10	4.7%	10	4.3%	5	2.5%	1	0.5%	3	1.0%	8	3.7%
899 TRILATE-TYPE-SPORE	三条溝胞子	29	12.3%	38	17.8%	52	22.4%	63	31.3%	60	30.0%	57	18.8%	79	36.2%
木本(針葉樹)		214	25.8%	175	18.8%	189	20.3%	190	36.3%	197	65.9%	296	70.0%	206	53.4%
木本(広葉樹)		21	2.5%	38	4.1%	43	4.6%	11	2.1%	3	1.0%	7	1.7%	12	3.1%
草本・藤本		557	67.2%	665	71.4%	631	67.6%	236	45.1%	21	7.0%	39	9.2%	63	16.3%
胞子		37	4.5%	53	5.7%	70	7.5%	86	16.4%	78	26.1%	81	19.1%	105	27.2%
総数		829		931		933		523		299		423		386	
含有量(粒数/g)		10,196		5,249		5,421		4,478		4,002		8,079		2,646	

左よりカウント粒数、百分率



ダイアグラム



第５図　植物珪酸体ダイアグラム

第４表　植物珪酸体化石組成表

調査区		C4						
地点		No.1地点						
地層		2層			4層	5層	6層	
試料No.		1	2	3	4	5	6	7
1	イネ	3	1	2	1	–	2	–
		15	5	10	5	–	11	–
		0.44	0.14	0.30	0.14	–	0.32	–
31	ヨシ属	1	–	1	1	3	3	–
		5	–	5	5	15	16	–
		0.32	–	0.32	0.31	0.93	1.02	–
61	キビ族型	1	–	–	–	–	–	–
		5	–	–	–	–	–	–
		–	–	–	–	–	–	–
81	ススキ属型	1	2	1	6	4	9	8
		5	10	5	29	20	48	42
		0.06	0.12	0.06	0.36	0.24	0.60	0.52
83	ウシクサ族A	2	4	1	8	3	10	9
		10	20	5	39	15	54	48
		–	–	–	–	–	–	–
201	メダケ節型	2	1	2	2	4	1	1
		10	5	10	10	20	5	5
		0.12	0.06	0.12	0.11	0.23	0.06	0.06
203	ネザサ節型	13	10	17	3	11	5	9
		66	49	88	15	54	27	48
		0.31	0.24	0.42	0.07	0.26	0.13	0.23
205	チマキザサ節型	1	1	2	1	1	1	1
		5	5	10	5	5	5	5
		0.04	0.04	0.08	0.04	0.04	0.04	0.04
207	ミヤコザサ節型	1	1	1	1	2	1	1
		5	5	5	5	10	5	5
		0.02	0.01	0.02	0.01	0.03	0.02	0.02
501	ブナ科（シイノキ属）	2	1	2	4	1	3	4
		10	5	10	20	5	16	21
		–	–	–	–	–	–	–
510	クスノキ科	1	1	3	1	3	1	1
		5	5	15	5	15	5	5
		–	–	–	–	–	–	–
520	マンサク科（イスノキ属）	2	6	8	16	17	23	13
		10	29	41	78	84	124	69
		–	–	–	–	–	–	–
プラント・オパール総数		197	191	263	239	310	355	301
カウントガラスビーズ数		475	494	475	490	510	466	463
カウント総数		672	685	738	729	820	821	764
試料重量（×0.0001g）		8920	8820	8850	8820	8670	8640	8820
ガラスビーズ重量（×0.0001g）		234	234	237	231	238	237	236
メダケ率（%）		87.8	85.7	84.4	78.3	87.5	76.0	82.9
チマキザサ節型／ミヤコザサ節型		2.00	4.00	4.00	4.00	1.33	2.00	2.00

上段　検出粒数
中段　検出密度（単位；×100粒/g）
下段　推定生産量（単位；kg/㎡・cm）

(4) AMS 年代測定結果

年代測定結果を第５表、第６図に示す。

第５表には、試料の詳細、前処理方法、δ^{13}C 値と４種類の測定年代を示している。第６図には INTCAL20（Reymer et al., 2020）を用いた暦年較正結果を示した。また、確率分布とσ、２σの構成範囲を示している。

年代測定値について

年代測定値として試料Ａから 970±20yrBP（暦年較正年代：1,025 ～ 1,156 calAD：２σ）、試料Ｂから965±20yrBP（暦年較正年代:1,025 ～ 1,157 calAD:２σ）とほぼ同じ年代値が得られた（第７図）。

一方、試料が採取された５層及び下位の６層からは奈良時代の遺物が多く検出されるものの、６層からは１点だけ12 ～ 13世紀の遺物が出土していた（担当者談）。したがって６層､５層が鎌倉時代以降の堆積物で、堆積時に古い時期の遺物、焼土ブロックや炭片が大量に混入した可能性が指摘できる。

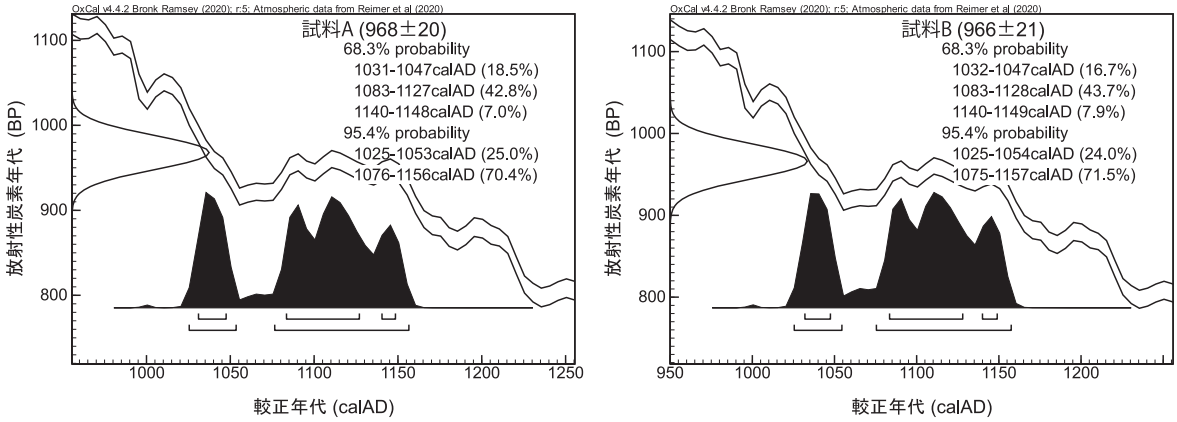
花粉分帯

下位から連続してマツ属（複維管束亜属）が高率を示すことから、全体を局地花粉帯のＩ帯とした。更に試料№.７ ～ ５ではモミ属が数％であるが連続して検出され、草本・藤本花粉が低率であること

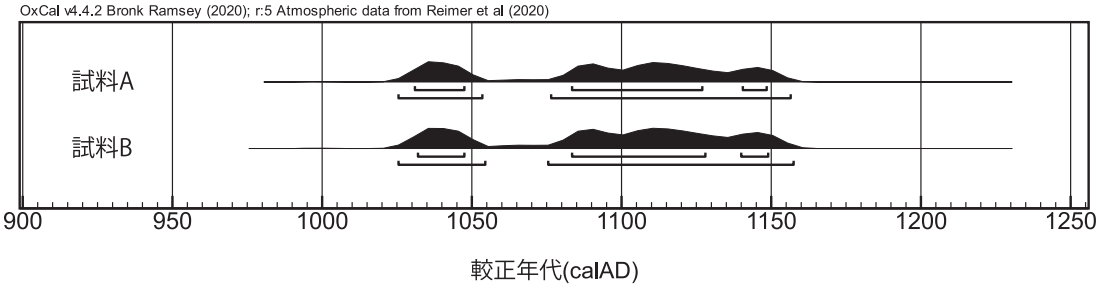
第５表　年代測定結果

試料						前処理	δ^{13}C (‰)	δ^{13}C補正無年代 (yrBP±１σ)	暦年較正用年代 (yrBP±１σ)	^{14}C 年代 (yrBP±１σ)
試料No.	地区	出土地点（遺構ほか）	状況	重量(g)	推定時期					
A	Ｂ４区	No.２地点 ５層	炭片	21.166	平安時代	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)	-27.61±0.29	1037±23	968±20	970±20
B			炭片	3.206		超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)	-28.32±0.30	1047±24	966±21	965±20

試料No.	14C年代を暦年代に較正した年代範囲		測定番号
		２σ暦年代範囲	
A	1031-1047 cal AD (18.5%) 1083-1127 cal AD (42.8%) 1140-1148 cal AD (7.0%)	1025-1053 cal AD (25.0%) 1076-1156 cal AD (70.4%)	PLD-41789
B	1031-1047 cal AD (18.5%) 1083-1127 cal AD (42.8%) 1140-1148 cal AD (7.0%)	1025-1054 cal AD (24.0%) 1075-1157 cal AD (71.5%)	PLD-41790



第６図　暦年較正結果



第７図　暦年較正結果一覧

からｃ亜帯とした。試料№４ではモミ属が数％の出現率を示す上に、草本・藤本花粉の割合が急増することからｂ亜帯とした。また、試料№３～１ではコナラ亜属が10％程度の出現率を示す上に、イネ科（40ﾐｸﾛﾝ以上）の増加が顕著であることからａ亜帯とした。

従来の分析結果との比較

大田市街地を挟んで東部と西部では全く異なる完新世の花粉化石群集が得られることが知られている。東部の波根干拓地で得られたデータ（廉・渡辺，1996）では、スギ属が数～10％程度の出現率にとどまることに対し、西部の仁摩平野ではスギ属が8000年前頃以前から中世頃まで高率を示している（渡辺・山田，2010など）。これら、更に東西の地域の結果と比べると、今回の結果のようにマツ属（複維管束亜属）が高率を示すのは、おおよそ中世末から近世以降のことと考えられる。

前述のように6、5層（ｃ亜帯）は12～13世紀頃の堆積物と考えられ、花粉化石群集の比較結果（中世末から近世以降）とは異なる。したがってマツ属（複維管束亜属）が高率を示すのは、当該地域での局地的な植生を示していると考えられる。また､ｃ亜帯と上位のｂ亜帯ではマツ属（複維管束亜属）に加えモミ属が特徴的に検出され、スギ属も試料によってモミ属と同程度検出されるなど、大田平野東西地域での中世頃までの特徴を併せ持つ。

一方、上位のａ亜帯ではモミ属、スギ属はほとんど検出されなくなり、中世末から近世の植生を示していると考えられる。

古植生について

植物珪酸体分析結果・花粉分析結果を基に、調査地周辺の古植生変遷について、設定した局地花粉帯ごとに考察する。

（1）Ⅰ帯ｃ亜帯期（6、5層、試料№７～５）：古代～中世頃

① 近辺の植生

有機質に富む堆積物で、湿地環境で堆積したと考えられる。花粉分析ではイネ科が少なからず検出され、植物珪酸体分析ではヨシ属が検出される。このことから湿地内ではヨシ類が繁茂していたと考えられる。このほか、カヤツリグサ科の花粉やヤマドリゼンマイ型の胞子も検出され、湿地内での生育が示唆される。

一方、6、5層には流れ込みと考えられる遺物等が含まれており、多量に検出されるススキ属型、ウシクサ族Ａ、ササ類や樹木起源の珪酸体は、調査地周囲の周辺の丘陵上から遺物等とともに流れ込んだものと考えられる。

丘陵上には植物珪酸体の検出されたススキ類やチガヤ類、ササ類、花粉の検出されたキク科やアカザ科-ヒユ科、ウナギツカミ類の生育する草地が広がっていたほか、シイノキ類やクスノキ類、イスノキ類を主要素とする常緑広葉樹も生育していた。

一方、花粉分析ではマツ属（複維管束亜属）が高率を示し、照葉樹林要素の花粉はほとんど検出できなかった。植物珪酸体の検出されたシイノキ類やクスノキ類、イスノキ類の花粉散布域が狭かったり、分析処理の途中で溶けたりすることが知られており、このことが原因の一つと考えられる。しかし、同じ常緑広葉樹で散布域も広く処理により溶けることもないアカガシ亜属花粉がほとんど検出されないことは、不思議な現象である。したがって近辺の林分としてはアカマツ林の占める割合が広く、常緑広葉樹からなる照葉樹林は、限られた範囲に分布していたものと考えられる。

また、メダケ率（メダケ属：メダケ節型・ネザサ節型とクマザサ属：チマキザサ節型・ミヤコザサ節の生産量の比）が高く、この時期以降温暖な気候が続いていたと推定される（チマキザサ節型、ミヤコザサ節型の検出量が少ないことから、積雪量については割愛する）。

② 周囲の山地植生

マツ属（複維管束亜属）の花粉化石が多量に検出されることから、アカマツ林が背後の山地にも広く分布していたものと考えられる。また調査地は海岸線からさほど離れていないことから、クロマツ海岸林の影響も考えられる。このほかマツ属（複維管束亜属）を除く、モミ属などの針葉樹花粉の検出量がやや多く、アカマツ林や照葉樹林などに混交していたか、やや離れた山地高所に温帯針葉樹林を形成していた可能性も指摘できる。

（2）Ⅰ帯 b 亜帯期（4 層、試料№. 4）：古代～中世頃

① 近辺の植生

イネ科（40ミクロン以上）花粉のほかイネ科（40ミクロン未満）、カヤツリグサ科の花粉が急増し、キク科花粉も増加する。また、ヨシ属の植物珪酸体が急減するなど、調査地内で水田耕作が始まった可能性が指摘できる。ただし、上位の２層（a亜帯）ではイネ科（40ミクロン以上）花粉は100％を超える高率で検出され、ここからの混入の可能性があること、木本花粉化石群集の変化に乏しいことから、断定には至らない。

② 周囲の山地植生

前述のように、c亜帯から木本花粉化石群集の変化に乏しく、樹木起源の植物珪酸体にも変化が乏しいことから、遺跡周囲の丘陵から背後の山地にかけての植生に大きな変化は考えにくい。

（3）Ⅰ帯 a 亜帯期（2 層、試料№. 3 ～ 1）：中世末から近世

① 近辺の植生

花粉分析でイネ科（40ミクロン以上）が100％を超える出現率を示すほか、栽培種のソバ属、水田雑草のサジオモダカ属、オモダカ属、イネ科（40ミクロン未満）、カヤツリグサ科などが検出され、調査地は水田となり、裏作や畦を利用したソバ栽培が行われていたと考えられる。また、植物珪酸体が多く検出されるササ類は、林縁や丘陵斜面に生育していたと考えられる。

② 周囲の山地植生

樹木由来の植物珪酸体が減少し、コナラ亜属が特徴的に検出されることから、近辺に生育していた常緑広葉樹は伐採され、コナラ類やアカマツを主要素とする薪炭林に変わっていったと考えられる。さらに、背後の山地でもアカマツ林が広く分布しており、クロマツ海岸林の影響も考えられる。

また開発は山地高所に及び、混交していた針葉樹や温帯針葉樹林も伐採されたものと考えられる。

まとめ

小金川Ｂ遺跡において、AMS年代測定、花粉分析、植物珪酸体分析を実施した。この結果、以下の事柄が明らかになった。

1）AMS年代測定値として、1970±20yrBP（暦年較正年代：1,025 ～ 1,156 calAD：2σ）965±21yrBP（暦年較正年代：1,025 ～ 1,157 calAD：2σ）のほぼ一致する値が得られたが、遺物の検出状況等を鑑みるとこれらは混入したもので、４層より下位は古代ら中世にかけて堆積したものと考えられた。

2）花粉分析結果を基に、局地花粉帯のⅠ帯を設定し、更にａ～ｃ亜帯に細分した。

3）花粉分析、植物珪酸体分析を基に遺跡周辺の古環境を推定した。特筆すべき事柄を以下に示す。

① 中世末から近世の時期に周辺地域の開発が一挙に進み、周囲の丘陵や山地には薪炭林が広がった。

② 調査地の開墾（水田化）は、古代から中世の時期に始まった可能性が指摘できる。ただし明らかに水田耕作が認められるのは、中世末から近世の時期である。

③ 古代から中世にかけて、局地的なアカマツ林の広がりが推定できた。

引用文献

中村　純（1974）イネ科花粉について、特にイネを中心として. 第四紀研究, 13,187-197.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，15-29

Bronk Ramsey, C.（2009）. Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51（1）, 337-360.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.（2013）IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55（4）, 1869-1887.

廉　鍾權・渡辺正巳（1996）羽根湖におけるOH94ボーリング試料の花粉分析．島根大学地球資源環境学研究報告，15，41-46.

渡辺正巳（2010）花粉分析法．必携 考古資料の自然科学調査法，174-177. ニュー・サイエンス社.

渡辺正巳・山田和芳（2010）五丁遺跡・庵寺遺跡発掘調査に伴う自然科学分析．梨ノ木坂遺跡 庵寺古墳群 庵寺遺跡Ⅱ，一般国道９号仁摩温泉津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書，3，93-130，国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会.

第５章　総括

第１節　遺跡の立地と遺構

１．遺跡の立地

小金川Ｂ遺跡は、南側の山塊から続く丘陵の斜面および小金川が形成した段丘面に位置する。海岸までの距離は0.8㎞で標高も約20ｍと高くはないが、南側には標高100ｍを超える山塊があり、これが海岸近くまで迫る地形と狭い谷が相まってかなり谷奥に位置する印象を受ける。段丘面はごく緩やかな斜面となっているが、その南側にある丘陵斜面からの湧水が絶えず、現在でも地滑りに注意が必要な場所である。また、湧水の影響で段丘面は常に湿った状態にあり、斜面とともに生活の場に適しているとはいい難い環境である。

２．検出された遺構

遺構の性格

遺構は、土坑１、ピット20を７層上面で検出したが、これらに伴う遺物は出土しなかった。遺構面の上位にある5･6層の出土遺物は８世紀後半～９世紀代の須恵器が主体である。しかし７層から灰釉陶器、６層からは青磁椀が出土しており、これらから遺構の時期は上限が９世紀後半、下限は12世紀後半と判断できる。

土坑は単独で存在し、伴う遺物もないことから時期・性格とも不明である。ピットは、調査区東側のC3・C4グリッドで等高線に平行または直行する列をなすとみられるものもある。ただ、ピットそのものの規模が小さく、ピット間の距離や平面的な位置関係も建物を想定させるほどの規則性はない。ピットの埋土は上層に存在する５層または６層と考えられるものがほとんどで、ピットが浅いことから、構造物として機能するためには５層及び６層堆積後に設けられた可能性もある。しかし自然科学分析によれば、5･6層は湿地環境での堆積であり、水稲耕作は行われていない。何らかの土地利用を意図したものであろうが、詳細は不明である。

なお、自然流路としたNR01及び周辺でまとまって確認された礫については、斜面の基盤層にも含まれていることから、斜面の地滑りに伴い流れ込んだものであることがわかる。一方、NR01の位置する段丘面南端で礫が集中して出土したのは、自然堆積に加えて人為的な礫の移動・集積も行われたためではないだろうか。その理由としては、湿地状態にあったNR01付近の地盤強化、水田耕作など後世の土地利用に支障を来す礫の廃棄などが考えられるが、推測の域を出ない。

第２節　出土遺物

出土遺物は、出土状況や残存状況などから考えて、調査区外にある南側丘陵からの流入と見られる。遺跡周辺は軟弱な地盤による地滑りや後世の開墾を受け、調査区内も後世の水田造成によって、地形が大きく改変されている。遺物の全形を窺えるものはほとんどなく、弥生土器・土師器においては、風化のため調整が確認できないものも多い。種別ごとの概要は以下のとおりである。

弥生土器・土師器

斜面・段丘面とも少量であるが弥生土器が出土している。時期は前期と後期のほか、図化できなかったが中期の壺と見られるものもある。段丘面9層からは弥生時代後期の土器のみが確認されたが、それ以外の包含層では須恵器など後世の遺物とともに出土した。

土師器は古墳時代前期のものもわずかに出土しているが、須恵器の時期から奈良時代後半以降と考えられるものがほとんどである。このうち第20図6は、胎土が粗く、黒い色調を特徴的な甕である。また、第21図1～5など、頸部が直角に近く屈曲する土器が出土している。いずれも甕と考えたが、詳細は不明である。

須恵器

斜面・段丘面ともほぼ全ての遺物包含層から出土しているが、特に段丘面5･6層からまとまって出土している。器種では坏の底部で高台をもつものが多く、時期は底部の糸切り痕が残るものとそうでないものの両方があることから、石見9A～10期[1]に属すると考えられる。高台のつく坏底部が多く認められたのは、包含層が2次堆積であることの影響を受けたものとみられる。また、第22図3・11など、赤褐色～暗紫色の色調で焼成が不良な須恵器や、土師器に近い焼成のものも出土している。このほか、鉄鉢形土器と転用硯が出土している点が注目される。

陶磁器

段丘面6～8層から、灰釉陶器が出土している。いずれも猿投窯産で、K-90窯式と見られる[2]ことから時期は9世紀後半と考えられ、5･6層から出土した須恵器の年代幅の中に収まる。また、このうち2点は仏器である淨瓶または水瓶と見られる[3]。また、龍泉窯系青磁椀Ⅰ-1類[4]が6層から出土しており、ピットなどの遺構及び5･6層の下限時期を示す。底部のみの破片で、高台周辺は意図的に打ち欠かれ、円盤状に成形される。

石製品

石器では、安山岩製の磨石がある。また、黒曜石とサヌカイトが出土している。黒曜石は石核と剥片が認められ、サヌカイトも石器の未成品または石核と考えられることから、弥生時代には遺跡周辺で、これらを用いた石器製作が行われていた可能性がある。

第3節　遺跡の評価

小金川B遺跡では、ピット・土坑を検出したが、遺構からの出土遺物はなく、その性格は明らかにできなかった。包含層から出土した遺物は南側斜面からの流れ込みと考えられ、弥生土器の一部を除き9世紀後半以降に堆積した層からの出土である。しかし、その中には淨瓶または水瓶と見られる灰釉陶器、須恵器の鉄鉢形土器、転用硯など特殊な遺物が含まれていることから、周辺に奈良時代後半～平安時代前半の仏教関連施設が存在すると想定される。石見地方の類例では、根ノ木田遺跡（益田市）がある。ここでも明確な遺構は確認されていないが、奈良時代～平安時代の須恵器･土師器とともに灰釉陶器・鉄鉢形土器が出土したことから、仏教関連の祭祀が推定されている[5]。

小金川B遺跡の立地は、先述したように標高はさほど高くなく、海岸沿いの平地からの距離も近いが、細い谷を入り込んでおり平地からは見通せない。このような立地の特徴は、「平安時代前半ころまでに全国で営まれた小規模な山寺に多く見られる傾向」[6]とされ、小金川B遺跡周辺に想定される仏教関連施設もこれに該当すると言えよう。

一方で、出雲地方で仏教関連遺跡の多くから出土する灯明皿形土器は確認されていない。当遺跡周辺では、８世紀後半以降の仏教関連施設を想定する御堂谷遺跡[7]や、約1㎞北東に位置し、集落遺跡と考えられる垂水遺跡[8]に出土例があるほか、石見地方西部でも石見国分寺跡（浜田市）で出土しており[9]、一概に分布範囲の問題とは言い切れない。流れ込みにより堆積した遺物が多く、灯明皿形土器と認定できなかった可能性もあるが、今後の事例の増加を待ちたい。また、御堂谷遺跡で施設を想定する平坦面は丘陵中腹に位置するが、小金川Ｂ遺跡と異なり、静間川下流域の平地が広がる南方向への眺望が開ける。御堂谷遺跡との比較でいえば、こういった立地も性格の差異と関連するものかも知れない。

今回の調査では、検出した遺構から遺跡の性格を考えることは困難であったが、出土した灰釉陶器や鉄鉢形土器などから、遺跡周辺に奈良時代後半～平安時代の仏教関連施設が存在すると想定した。石見国における同様の施設の事例を加えるとともに、この地域における当該期の仏教関連施設が全国的な傾向と同様なありかたを示す可能性を提示できた。小金川Ｂ遺跡が所在する静間川西岸から仁摩町の潮川東岸にかけての低山地地域では、古代～中世にかけて遺跡の様相は明らかではなかったが、奈良時代～平安時代の集落遺跡とされる垂水遺跡に加え、同時期の仏教関連施設が存在する可能性を示し、この地域の歴史に新たな資料を加えることができた。

註

1）榊原博英 2010「石見国の須恵器生産と出雲産須恵器」『出雲国の形成と国府成立の研究』－古代山陰地域の土器様相と領域性－　島根県古代文化センター

2）愛知学院大学藤澤良祐氏による御教示及び次の文献による。
山下峰司 1995「4. 灰釉陶器・山茶碗」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

3）註２に同じ

4）太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第 49 集

5）島根県教育委員会 1992 『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』

6）久保智康 2012「古代出雲の山寺と社」『大出雲展』京都国立博物館・島根県立古代出雲歴史博物館

7）島根県教育委員会 2019『御堂谷遺跡　諸友大師山横穴Ⅳ群１号穴』

8）島根県教育委員会 2019『垂水遺跡　松林寺遺跡　庵寺石塔群』

9）林　健亮 2020「出雲地方の灯火器出土遺跡－須恵器皿Ｅ出土地を中心に－」『灯明皿と官衙・集落・寺院』奈良文化財研究所

第1表　小金川B遺跡出土土器観察表

挿図番号	写真図版	取上番号	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	法量（）内復元値（cm）			胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	備考
								口径	器高	底径					
9-1	12		B5		5層	弥生土器	甕	(22.8)			密（5mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：褐色7.5YR4/4 内面：浅黄橙色7.5YR8/4	外面：不明 内面：不明	
9-2	12	22	B5		5層	弥生土器	甕	(20.2)			密（3mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：橙色5YR6/6 内面：にぶい黄橙色10YR7/4	外面：ヨコナデ、平行沈線 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ？	外・内面煤付着 高坏の可能性
9-3	12	20	B5		5層	弥生土器	甕	(13.6)			密（4mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：明赤褐色5YR5/6 内面：明赤褐色5YR5/6	外面：ヨコナデ？、疑凹線 内面：ヨコナデ？、ヘラケズリ？	
9-4	12	1 7	B5		5層	弥生土器	甕	(15.0)			密（2mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：橙色5YR6/6 内面：橙色5YR6/6	外面：ヨコナデ、平行沈線 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ、丁寧なナデ	
9-5	12		B5		2層	弥生土器	甕	(20.5)			密（1mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：にぶい橙色7.5YR6/6 内面：浅黄橙色7.5YR8/6	外面：ヨコナデ？、疑凹線 内面：ヘラケズリ？	
9-6	12	10	B4		5層	弥生土器	甕	(19.0)			密（3mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：明赤褐色5YR5/6 内面：にぶい赤褐色5YR4/4	外面：ヨコナデ、平行沈線 内面：ヨコナデ、ミガキ、ヘラケズリ？	波状文
9-7	12	17	B5		5層	弥生土器	甕				密（1mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：橙色7.5YR6/6 内面：明褐色7.5YR5/6	外面：ヨコナデ、平行沈線 内面：ヨコナデ、ヘラミガキ、ナデ（？）	6条（＋α）の波状文
9-8	12	18	B5		5層	弥生土器	高坏？	(13.4)			密（3mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：橙色7.5YR6/6 内面：橙色7.5YR6/6	外面：平行沈線（一部ナデ消し?） 内面：ミガキ	内面煤付着
9-9	12		B5		5層	弥生土器	器台	(17.4)			密（1mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：橙色7.5YR7/6 内面：にぶい橙色7.5YR7/4	外面：不明、疑凹線？ 内面：ナデ？、ヘラミガキ？	口縁部分に一部煤付着
9-10	12	4	B5		5層	弥生土器	器台	(17.0)			密（4mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：橙色2.5YR6/8 内面：黄橙色7.5YR7/8	外面：風化のため不明 内面：風化のため不明	
9-11	13	2	B5		5層	弥生土器	脚部			(12.2)	密（4mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：にぶい橙色705YR7/4 内面：浅黄橙色7.5YR8/4	外面：不明 内面：ナデ、指頭圧痕、ヘラケズリ	器台？
9-12	12	13	B5		5層	弥生土器	底部			(12.8)	やや粗（3mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：橙色5YR7/6 内面：黄灰色2.5YR5/1	外面：指頭圧痕 内面：ハケメ	
9-13	12		B5		5層	弥生土器	底部			3.1	やや粗（2mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：にぶい黄橙色10YR7/2 内面：にぶい黄橙色10YR6/3	外面：不明 内面：不明	
9-14	12		B5		1層	土師器	壺	(17.0)			密（1mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：にぶい橙色7.5YR7/3 内面：にぶい黄橙色10YR7/4	外面：不明（ナデ？） 内面：不明（ナデ？ヘラケズリ？）	
9-15	12		B5		5層	土師器	甕	(26.2)			密（2mm以下の砂粒を多く含む）		外面：明赤褐色2.5YR5/8 内面：明赤褐色2.5YR5/8	外面：ナデ 内面：ナデ、ヘラケズリ	
9-16	12		B5		1層	土師器	甕	(24.9)			密（3mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：赤褐色2.5YR4/8 内面：にぶい赤褐色2.5YR5/4	外面：指頭圧痕 内面：不明（ヘラケズリ？）	
9-17	12		B5		1層	土師器	甕				密（0.5mm以下の砂粒を若干含む）	良好	外面：橙色2.5YR7/6 内面：橙色7.5YR7/6	外面：ヨコ方向のナデ 内面：不明	外面煤付着
10-1	12		B4		3層	須恵器	坏蓋	(14.5)			密（1mm以下の砂粒を少し含む）	良好	外面：青灰色5PB6/1 内面：オリーブ灰色2.5GY6/1	外面：回転ヘラケズリ、回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	つまみ径（6.2）
10-2	13		B4		3層	須恵器	蓋	(19.8)			密（1mm以下の砂粒を若干含む）	良好	外面：にぶい橙色2.5YR6/3 内面：灰色N6/	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	外面酸化色
10-3	12		B5		1層	須恵器	坏			(10.4)	密（0.5mm以下の砂粒を若干含む）	良好	外面：灰白色N7/ 内面：灰白色N7/	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ、回転糸切り	
10-4	12		B4		3層	須恵器	坏			(6.0)	密（1mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：灰色N6/ 内面：灰白色N7/	外面：ナデ 内面：回転ナデ、回転糸切り	
10-5	12		B5		1層	須恵器	坏			(9.0)	密（1mm以下の砂粒を若干含む）	良好	外面：灰色N5/ 内面：黄灰色2.5Y6/1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
10-6	12		B4		3層	須恵器	坏			(10.0)	密（2.5mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：青灰色5PB5/1 内面：紫灰色5P5/1	外面：ナデ 内面：ヨコナデ、ヘラ切り	
10-7	13		A5		1層 2層	須恵器	壺？			(14.6)	密（1.5mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：灰白色5Y7/1 内面：青灰色5PB6/1	外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ	転用硯の可能性
10-8	12		B4		3層	須恵器	壺？				密（0.5mm以下の砂粒を若干含む）	良好	外面：灰色N6/ 内面：青灰色5PB6/1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	
19-1	13		B4	NR01		弥生土器	甕	(15.0)			やや粗（3mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：橙色5YR6/6 内面：にぶい褐色7.5YR6/3	外面：ナデ 内面：ナデ	
19-2	13	60	B4	NR01		土師器	脚部			(8.4)	密（1mm以下の砂粒を少し含む）	良好	外面：にぶい橙色7.5YR7/4 内面：にぶい橙色7.5YR7/4	外面：ナデ？ 内面：ナデ？	高坏？
19-3	13		B4	NR01		土師器	甕？				密（2mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：明赤褐色2.5YR5/8 内面：橙色5YR6/6	外面：ナデ 内面：ナデ	
19-4	13		B4	NR01		土師器	甕？				密（2mm以下の砂粒を少し含む）	良好	外面：橙色5YR6/6 内面：橙色5YR6/6	外面：ナデ？（風化のため不明） 内面：ナデ？、ヘラケズリ？（風化のため不明）	
19-5	13			NR01		須恵器	坏	(12.6)			密（2mm以下の砂粒を多く含む）		外面：灰色10Y5/1 内面：灰色N7/	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
20-1	14		A1		4層	弥生土器	壺	(15.2)			密（2mm以下の砂粒を少し含む）		外面：にぶい橙色7.5YR7/4 内面：黒褐色7.5YR3/2	外面：ナデ 内面：ナデ？	前期
20-2	14		A3		4層	弥生土器	甕	(20.0)			やや粗（3mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：褐色7.5YR4/3 内面：にぶい橙色7.5YR6/4	外面：ナデ 内面：ナデ	前期
20-3	14		C3		4層	弥生土器	鉢？	(23.9)			やや粗（3mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：赤褐色2.5YR4/6 内面：にぶい赤褐色5YR5/4	外面：ナデ？ 内面：ナデ、ヘラケズリ	
20-4	14		C4		6層	弥生土器	甕	(15.0)			密（3mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：橙色5YR6/6 内面：にぶい橙色5YR7/4	外面：口縁部平行沈線、ナデ 内面：ナデ	
20-5	14		B4		6層	弥生土器	底部			(5.7)	やや粗（5mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：灰黄褐色10YR5/2 内面：灰黄色2.5Y7/2	外面：ナデ 内面：ナデ、指頭圧痕	
20-6	14	35	B4		6層	土師器	甕	(30.0)			粗（5mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：黒褐色10YR2/2 内面：黒褐色10YR2/2	外面：ナデ、頸部指頭圧痕 内面：ナデ、ヘラケズリ	
20-7	14		C3		4層	土師器	甕	(12.5)			密（1mm以下の砂粒を少し含む）	良好	外面：赤褐色5YR4/6 内面：橙色5YR6/6	外面：ナデ 内面：ナデ、ヘラケズリ	
20-8	14	34 37	B4		6層	土師器	甕	(36.8)			密（1mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：明赤褐色2.5YR5/8 内面：にぶい橙色7.5YR6/4	外面：ナデ 内面：ナデ、ヘラケズリ？	
20-9	14		B4			土師器	甕	(27.8)			粗（5mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：明赤褐色5YR5/6 内面：にぶい橙色5YR6/4	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ、ヘラケズリ	
20-10	14		A2		4層	土師器	甕	(20.4)			密（1mm以下の砂粒を少し含む）	良好	外面：明赤褐色2.5YR5/8 内面：橙色5YR6/6	外面：ナデ 内面：ナデ、ヘラケズリ？	
20-11	14		B3		4層 6層	土師器	甕	(25.4)			密（2mm以下の砂粒を少し含む）	良好	外面：橙色2.5YR6/6 内面：にぶい赤褐色2.5YR5/4	外面：ナデ 内面：ナデ、ヘラケズリ	
20-12	14		A3		6層	土師器	甕	(26.6)			密（2mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：橙色2.5YR6/6 内面：にぶい橙色7.5YR7/4	外面：ナデ 内面：ナデ、ヘラケズリ	
20-13	14		B4		5層	土師器	甕	(18.8)			密（2mm以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：にぶい橙色7.5YR7/4 内面：にぶい黄橙色10YR7/3	外面：ナデ？（風化のため不明） 内面：ナデ？、ヘラケズリ？（風化のため不明）	
20-14	14		B4		4層	土師器	甕	(23.0)			密（3mm以下の砂粒を若干含む）	良好	外面：にぶい橙色7.5YR7/4 内面：にぶい橙色7.5YR7/3	外面：ナデ 内面：ナデ、ヘラケズリ	
21-1	15		A4		6層	土師器	甕	(19.0)			密（2mm以下の砂粒を少し含む）	良好	外面：赤褐色2.5YR4/6 内面：にぶい黄橙色10YR6/3	外面：ナデ 内面：ナデ、ヘラケズリ	

挿図番号	写真図版	取上番号	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	法量（）内復元値（cm）			胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	備考
								口径	器高	底径					
21-2	15		A3		4層	土師器	甕	（20.8）			密（3㎜以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：にぶい赤褐色5YR4/6 内面：にぶい赤褐色5YR4/6	外面：ナデ 内面：ナデ、ヘラケズリ	
21-3	15		A3		6層	土師器	甕	（24.4）			密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	良好	外面：明赤褐色5YR5/6 内面：明赤褐色5YR5/6	外面：ナデ 内面：ナデ、ヘラケズリ	
21-4	15		A3		6層	土師器	甕	（21.6）			密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	良好	外面：橙色5YR6/6 内面：にぶい橙色7.5YR7/4	外面：ナデ 内面：ナデ、ヘラケズリ？	
21-5	15		B3		5層	土師器	甕？	（16.3）			粗（2㎜以下の砂粒を非常に多く含む）	良好	外面：赤色10R4/8 内面：明赤褐色2.5YR5/8	外面：ナデ？、指頭圧痕 内面：ヘラケズリ？	
21-6	15		B4		5層	土師器	坏？	（13.0）	（6.1）		密（1㎜以下の砂粒をわずかに含む）	良好	外面：浅黄桃色10YR8/3 内面：灰白色10YR8/1	外面：ナデ、ハケメ 内面：ナデ、ハケメ	
22-1	16		A2 B3		4層	須恵器	坏蓋	（13.2）			密（1㎜以下の砂粒を極わずかに含む）	良好	外面：灰色N6/ 内面：灰白色N7/	外面：回転ナデ、全体に自然釉 内面：回転ナデ	つまみ径（7.9） 外面釉付着
22-2	16		A2		4層	須恵器	坏蓋	（16.6）			密（0.5㎜以下の砂粒を少し含む）	良好	外面：灰白色7.5Y7/1 内面：灰色N7/	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	外面釉付着
22-3	16		A3 B3		4層 6層	須恵器	坏蓋				密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	不良	外面：にぶい橙色5YR7/4 内面：橙色5YR6/6	外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	つまみ径（5.4） 内外面とも酸化色
22-4	16		A3		4層	須恵器	坏	（15.2）			密（1㎜以下の砂粒をわずかに含む）	良好	外面：青灰色5PB6/1 内面：オリーブ灰色2.5GY6/1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	高坏の坏部？
22-5	16		B3		4層	須恵器	坏	（13.8）			密（0.5㎜以下の砂粒をわずかに含む）	良好	外面：灰色10Y5/1 内面：灰色10Y5/1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
22-6	16	28	C4		4層	須恵器	坏			（6.4）	密（1㎜以下の砂粒をわずかに含む）	良好	外面：灰色N7/ 内面：灰色N7/	外面：回転ナデ、回転糸切り（未調整） 内面：回転ナデ	内面磨滅 やや軟質
22-7	16		B3 B4		6層 4層	須恵器	坏			（9.2）	粗（0.5㎜以下の砂粒を大量に含む）	良好	外面：褐灰色10YR5/1 内面：褐灰色5YR5/1	外面：糸切り？後ナデ、回転ナデ 内面：糸切り？後ナデ、回転ナデ	外部底面酸化色
22-8	16		B3		6層	須恵器	坏			（10.7）	密（1㎜以下の砂粒を極わずかに含む）	良好	外面：灰色N6/ 内面：灰色N6/	外面：ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	
22-9	16		A3		4層 6層	須恵器	坏			（9.4）	密（0.5㎜以下の砂粒をわずかに含む）	良好	外面：灰色N7/ 内面：灰色N7/	外面：回転ナデ後ナデ、ヘラ切り後ナデ 内面：回転ナデ後ナデ	
22-10	16		A2		4層	須恵器	坏			（8.4）	密（0.5㎜以下の砂粒を少し含む）	不良	外面：橙色5YR7/6 内面：橙色5YR7/6	外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ	土師質
22-11	15	33	B4		6層	須恵器	坏			（7.8）	密（1㎜以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：赤灰色5R5/1 内面：赤灰色5R5/1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外部底面酸化色
22-12	16		C3 C4		6層 4層	須恵器	坏			（9.4）	密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	良好	外面：灰白色N7/ 内面：灰白色N7/	外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ	
22-13	15		A3 B2 B3		4層 6層 6層	須恵器	坏			（8.6）	密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	良好	外面：灰白色N7/ 内面：灰白色N7/	外面：ナデ、回転ナデ後ナデ 内面：回転ナデ	
22-14	16		A2		4層 6層	須恵器	坏			（10.8）	密（1㎜以下の砂粒を若干含む）	良好	外面：灰色N5/ 内面：灰色N5/	外面：静止？糸切り、回転ナデ、 内面：ナデ	
22-15	16		A3		4層	須恵器	坏			（8.8）	密（1㎜以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：灰色N6/ 内面：灰白色N7/	外面：ナデ、回転ナデ後ナデ 内面：ナデ、回転ナデ後ナデ	
22-16	16		B3		6層	須恵器	坏			（16.4）	密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	良好	外面：灰色N6/ 内面：灰白色N7/	外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	
22-17	15	38	A3		6層	須恵器	壺？			（13.6）	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	良好	外面：褐灰色5YR5/1 内面：灰色N6/	外面：ナデ、回転ナデ（指頭圧痕） 内面：ナデ、回転ナデ（指頭圧痕）	外面の一部酸化色
22-18	16	30	A2		6層	須恵器	壺？			（11.9）	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	良好	外面：灰白色N7/ 内面：青灰色5B6/1	外面：切り離し後回転ナデ 内面：ナデ	
22-19	16		B4		5層	須恵器	壺？			（11.4）	密（0.5㎜以下の砂粒をわずかに含む）	良好	外面：灰白色N7/	外面：回転ナデ	22-20とは別個体と見られる
22-20	16		A3		6層	須恵器	壺				密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	良好	外面：灰白色N7/ 内面：灰白色N8/	外面：回転ナデ後ナデ、ナデ、（ヘラケズリ後？）回転ナデ 内面：回転ナデ後ナデ	
22-21	16		B4		6層	須恵器	鉢				密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	やや不良	外面：灰白色5Y7/1 内面：灰白色5Y7/1	外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ	鉄鉢形土器、やや軟質
22-22	16		A3		6層	須恵器	鉢				密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	良好	外面：灰白色N7/ 内面：灰白色N8/	外面：回転ナデ、沈線 内面：回転ナデ	鉄鉢形土器、内面全体に釉付着
22-23	16		B3		6層	灰釉陶器	淨瓶または水瓶				密（0.5㎜以下の砂粒を極わずかに含む）	良好	外面：灰白色5Y7/1 内面：灰白色N8/	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	焼成（?）時歪み、外面全体と内面底部に釉 猿投窯K-90窯式
22-24	16		A2		6層	陶磁器	椀			4.4	密（0.5㎜以下の砂粒をごくわずかに含む）	良好	外面：灰白色7.5Y7/1 内面：釉：灰オリーブ色7.5Y6/2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	龍泉窯系青磁椀Ⅰ-1類
	18		A3		6層	土師器？					密（0.5㎜以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：にぶい黄橙色10YR7/3 内面：にぶい黄橙色10YR7/3	外面：ナデ 内面：ヘラケズリ	内・外・断面に明赤褐色（2.5YR5/8）の顔料
24-1	17	56	B2		9層	弥生土器	壺	（13.4）			やや粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：灰白色2.5Y8/2 内面：にぶい黄橙色10YR7/2	外面：ヨコナデ？、平行沈線 内面：ヨコナデ？、ヘラケズリ？、指頭圧痕	
24-2	17		B2		9層	弥生土器	甕				粗（2㎜以下の砂粒を多量に含む）	良好	外面：灰白色10YR8/1 内面：灰黄褐色10YR6/2	外面：ヨコナデ？（風化のため不明） 内面：ヨコナデ？、ヘラケズリ？（風化のため不明）	
24-3	17	52	A2		8層	弥生土器	甕	（15.4）			密（1㎜以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：にぶい黄橙色10YR7/3 内面：灰白色10YR8/2	外面：ヨコナデ、肩部刺突文 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ（単位方向不明）	
24-4	17	54	A2		8層	弥生土器	甕	（15.8）			密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：浅黄橙色7.5YR8/4 内面：灰白色10YR8/1	外面：ヨコナデ？（風化のため不明）、頸部刺突文 内面：ヨコナデ？、ヘラケズリ？	
24-5	17	46	A2		8層	弥生土器	甕	（14.7）			密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：にぶい黄橙色10YR7/2 内面：灰白色10YR8/1	外面：ヨコナデ、口縁部平行沈線 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	
24-6	17	43	A2		8層	弥生土器	甕				密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：浅黄橙色10YR8/4 内面：浅黄橙色10YR8/3	外面：風化のため不明、口縁部平行沈線（5条以上） 内面：ヨコナデ？、ヘラケズリ	
24-7	17	46	A2		8層	弥生土器	甕	（17.2）			密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：灰白色10YR8/2 内面：灰白色10YR8/2	外面：風化のため不明、口縁部に平行沈線（6条以上） 内面：ヨコナデ？、ヘラケズリ	
24-8	17	47	A2		8層	弥生土器	甕	（17.5）			密（2㎜以下の砂粒を多く含む）		外面：灰白色10YR7/1 内面：灰白色10YR7/1	外面：風化のため不明（ヨコナデ？） 内面：風化のため不明（ヨコナデ？、ヘラケズリ？）	
24-9	18	49 50	B2 A2		8層	弥生土器	高坏？				密（2㎜以下の砂粒を少量含む）	良好	外面：浅黄橙色7.5YR8/6 内面：浅黄橙色7.5YR8/4	外面：風化のため不明 内面：風化のため不明	
24-10	17	58 59	A2		8層	弥生土器	底部			（9.6）	粗（5㎜以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：明赤褐色2.5YR5/8 内面：灰白色10YR8/1	外面：風化のため不明 内面：風化のため不明	前～中期？
24-11	18	61	A2		9層	弥生土器	底部			6.6	密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：灰白色10YR8/2 内面：灰白色10YR8/2	外面：ナデ？ 内面：ナデ？	

挿図番号	写真図版	取上番号	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	法量（）内復元値（cm）			胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	備考
								口径	器高	底径					
24-12	17	45	A3	南北T2	7層	土師器	甕	（21.8）			密（2㎜以下の砂粒を少量含む）	良好	外面：褐色7.5YR4/3 内面：にぶい橙色7.5YR6/4	外面：ナデ 内面：ナデ、ヘラケズリ	
24-13	17		A2		7層	土師器	甕	（21.2）			密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	良好	外面：灰白色2.5Y8/2 内面：にぶい黄橙色10YR7/2	外面：ナデ 内面：ナデ、ヘラケズリ？	
24-14	17	51	A2		8層	須恵器	坏蓋				密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	やや不良	外面：灰白色N8/ 内面：灰白色N8/	外面：回転ナデ？ 内面：回転ナデ？	つまみ径（3.5）
24-15	17	48	B2		8層	須恵器	坏	（18.0）			密（2㎜以下の砂粒を若干含む）	良好	外面：青灰色5PB5/1 内面：灰色N5/	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ後ナデ 内面：回転ナデ	
24-16	16		A2		7層	須恵器	坏			（10.8）	粗（0.5㎜以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：灰色N6/ 内面：灰白色N7/	外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	
24-17	18	62	B4		7層	須恵器	壺				密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	良好	外面：赤灰色5R5/1 内面：赤灰色5R6/1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ、	粘土紐接合痕 内・外面酸化色
24-18	17		A2		7層	須恵器	壺？			（11.9）	密（0.5㎜以下の砂粒を少し含む）	良好	外面：灰白色N7/ 内面：灰白色N7/	外面：回転ナデ後ナデ 内面：回転ナデ後ナデ	
24-19	17 18		A2		7層 8？層	灰釉陶器	淨瓶または水瓶	（11.8）			密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	良好	外面：灰白色N8/ 内面：灰白色N8/	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面脚部、内面底部に釉 猿投窯 K-90窯式
24-20	17	44	A2-A3		8層	灰釉陶器	唾壺				密（0.5㎜以下の砂粒をわずかに含む）	良好	外面：明オリーブ灰色2.5GY7/1 内面：灰白色N8/	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面全体に釉 猿投窯 K-90窯式

第2表　小金川B遺跡出土土製品観察表

挿図番号	写真図版	取上番号	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	法量（）内復元値（cm）			胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	備考
								口径	器高	底径					
19-6	13		C4	NR01		土製品	土製支脚				密（6㎜以下の砂粒を若干含む）	良好	外面：明赤褐色2.5YR5/6 内面：不明	外面：指頭圧痕 内面：不明	
22-25	15		B3		5層	土製品	土製支脚			（9.0）	粗（3㎜以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：赤褐色2.5YR4/6 内面：赤褐色2.5YR4/6	外面；指頭圧痕、ナデ、背面に非貫通孔	
22-26	16	26	B3		4層	土製品	土製支脚？				粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	良好	外面：橙色5YR6/6 内面：橙色5YR6/6	外面：ナデ	

第3表　小金川B遺跡出土石製品観察表

挿図番号	写真図版	取上番号	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
11-1	19		B5	南北T1	12層？	石製品	線刻石？	6.9	6.6	2.0	138.7	石材：安山岩	祭祀具の可能性
11-2	19		B5	南北T1	12層？	石器	磨石	11.3	8.8	5.9	839.1	石材：安山岩	
11-3	19		B4		3層	石器	石核？	9.8	4.3	1.5	80.1	石材：サヌカイト（安山岩）	石器未成品の可能性
11-4	19	16	B5		5層	石製品	硯？			0.5~1.0	74.9	石材：火山岩（安山岩か？詳細不明）	
24-21	18	39	B4	NR01T2	3層（段丘面7層？）	石製品	石核	8.9	6.3	3.5	196.9	石材：黒曜石	

写真図版

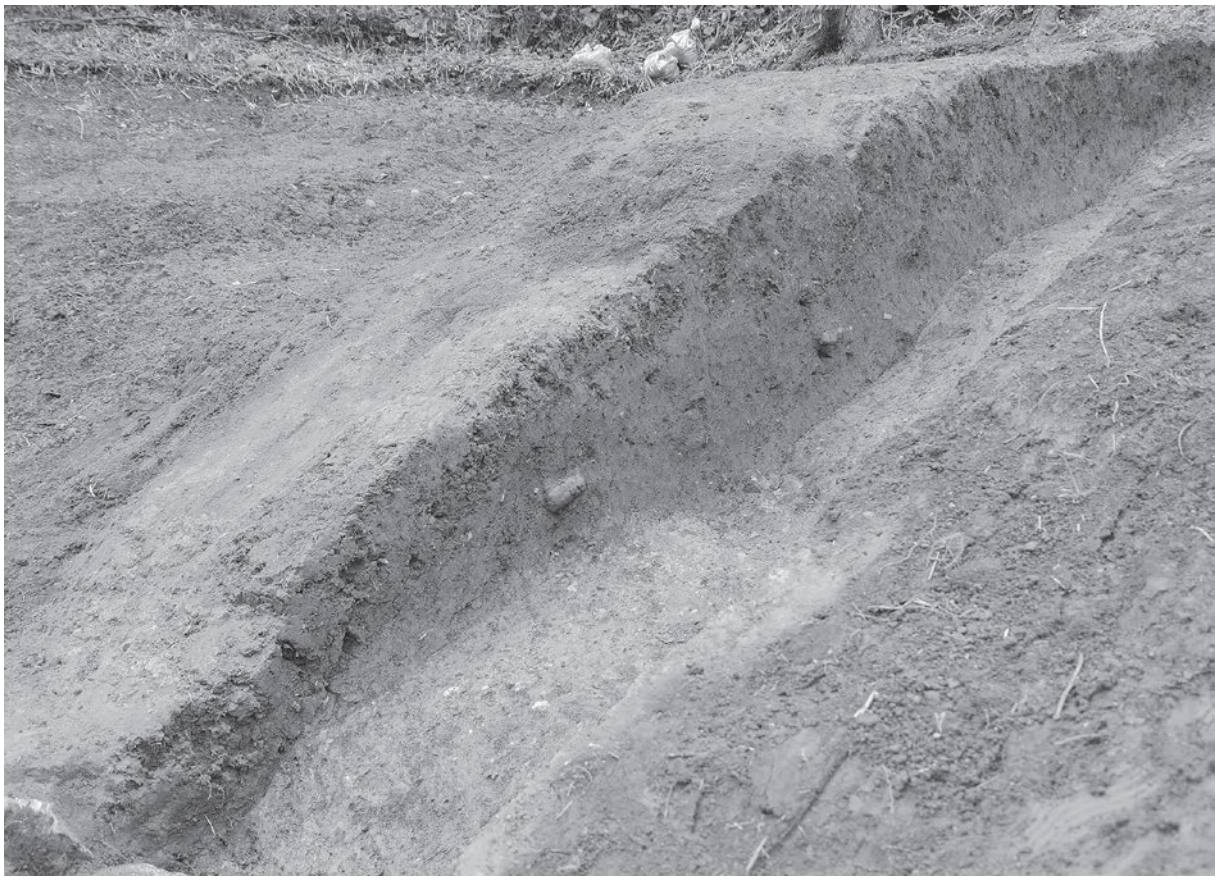
調査前全景

遺跡の立地

図版 2

完掘全景（南から）

完掘全景（上空から）



斜面土層

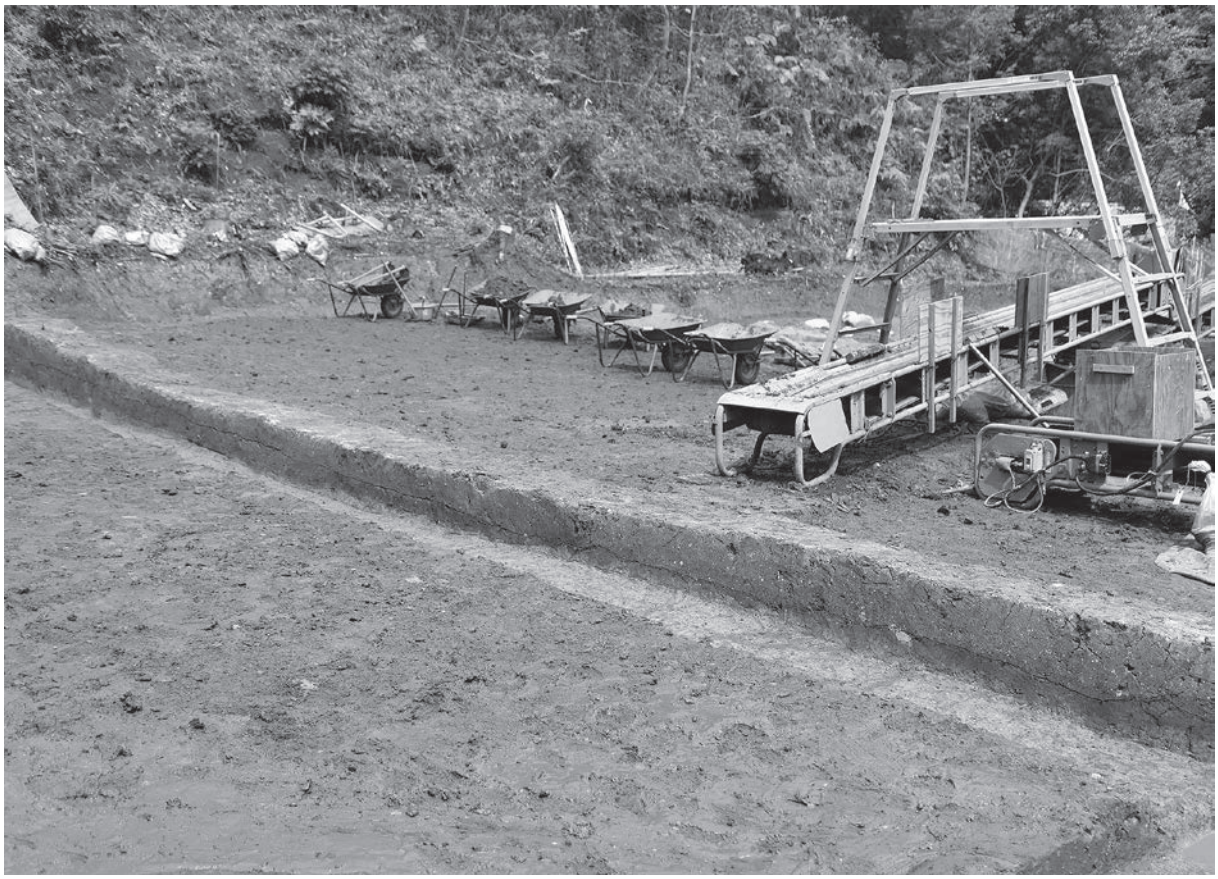
段丘面東壁土層

図版 4

南北トレンチ 1 土層 1（3 層以下）

南北トレンチ 1 土層 2（4 層以下）

東西トレンチ 1（東）土層

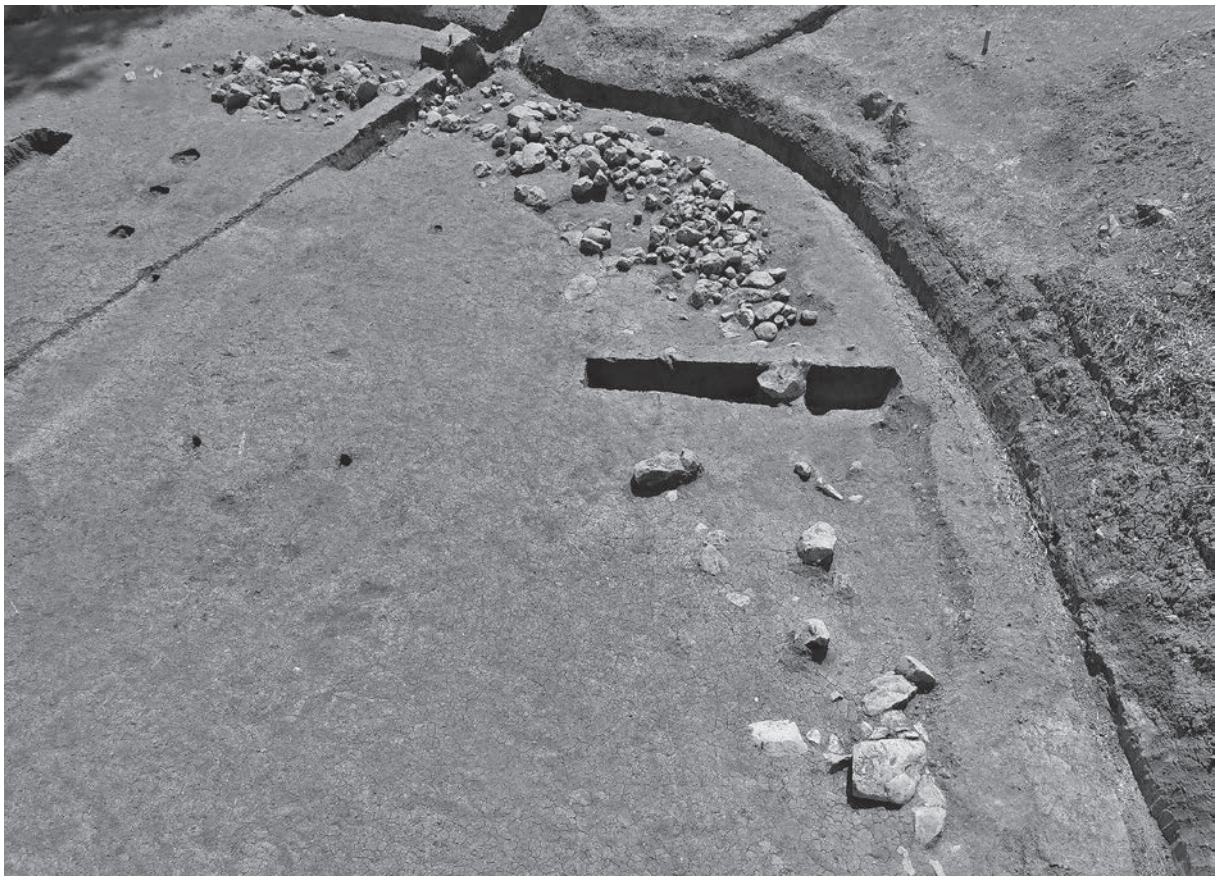


東西トレンチ 1（西）土層

図版 6

NR01 完掘（東から）

NR01 検出



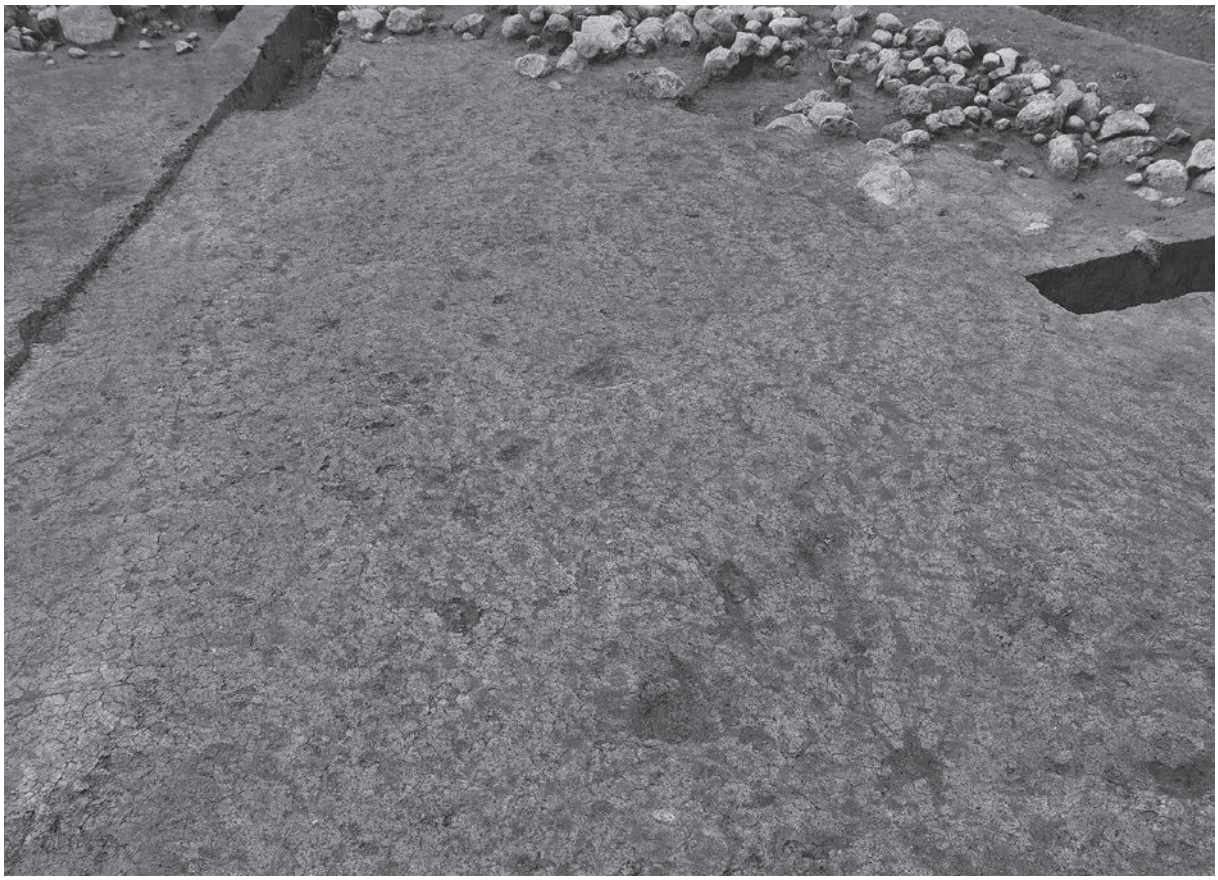
NR01 礫検出

NR01 トレンチ 1 土層

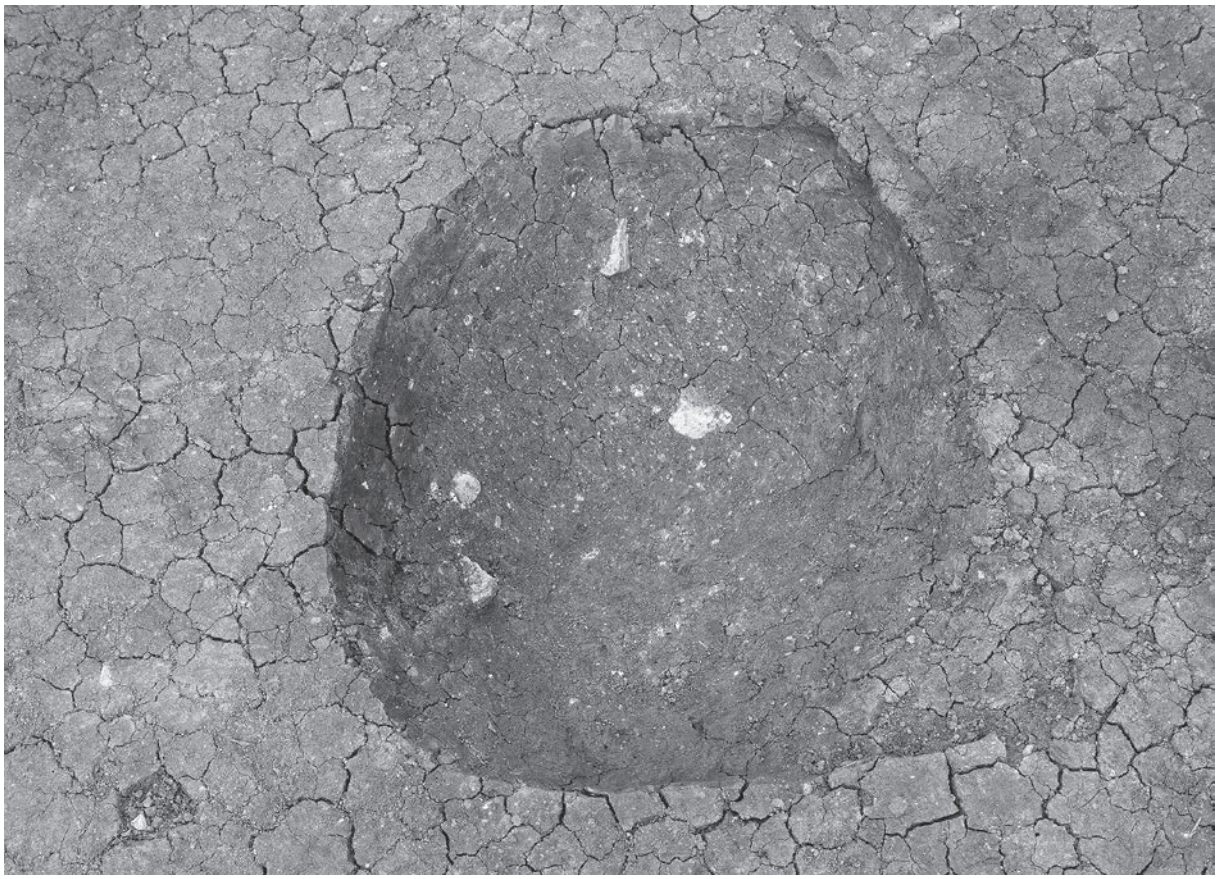
図版 8

NR01 トレンチ 2 土層

C3-C4 グリッド遺構検出

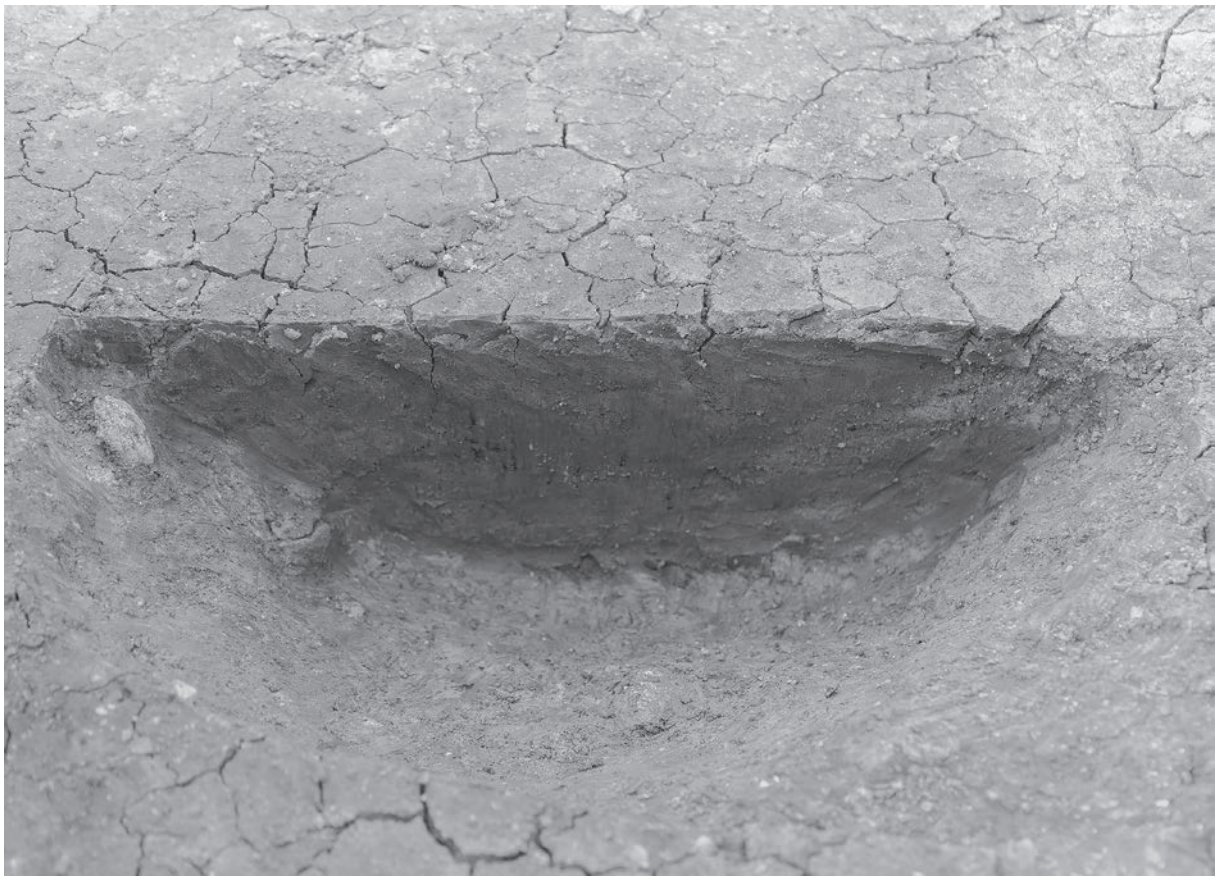


B4 グリッド遺構検出



SK01 完掘

図版 10



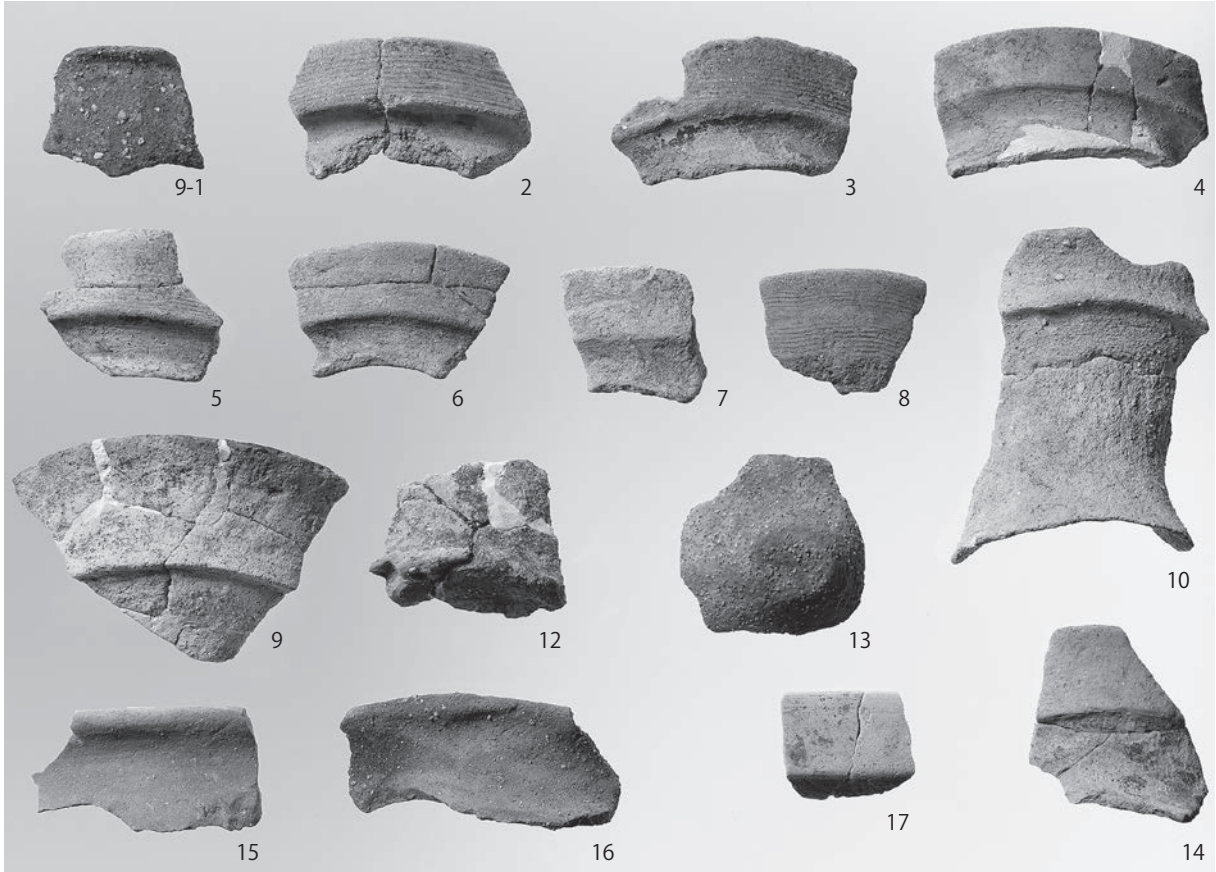
SK01 土層

段丘面遺構完掘

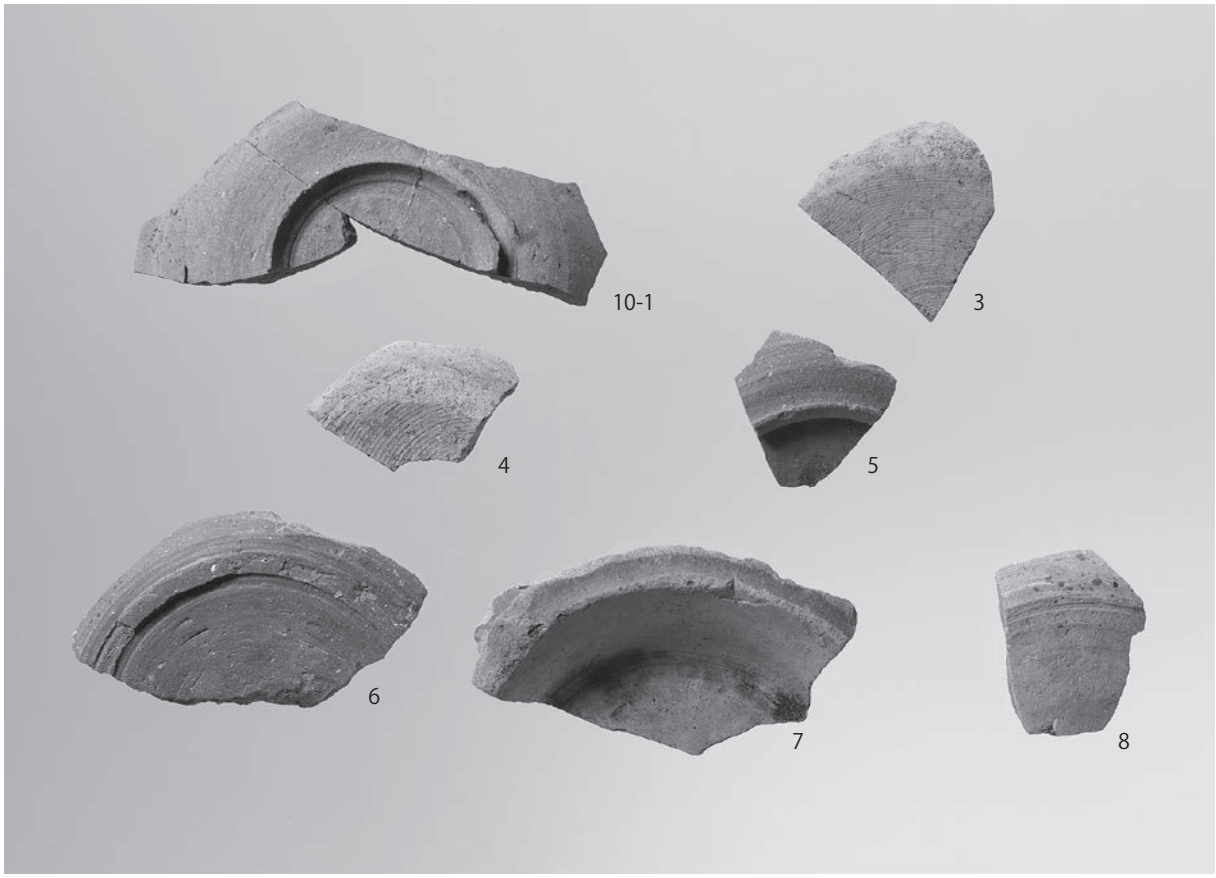
段丘面北西部完掘

段丘面北西部土層

図版 12



斜面出土遺物

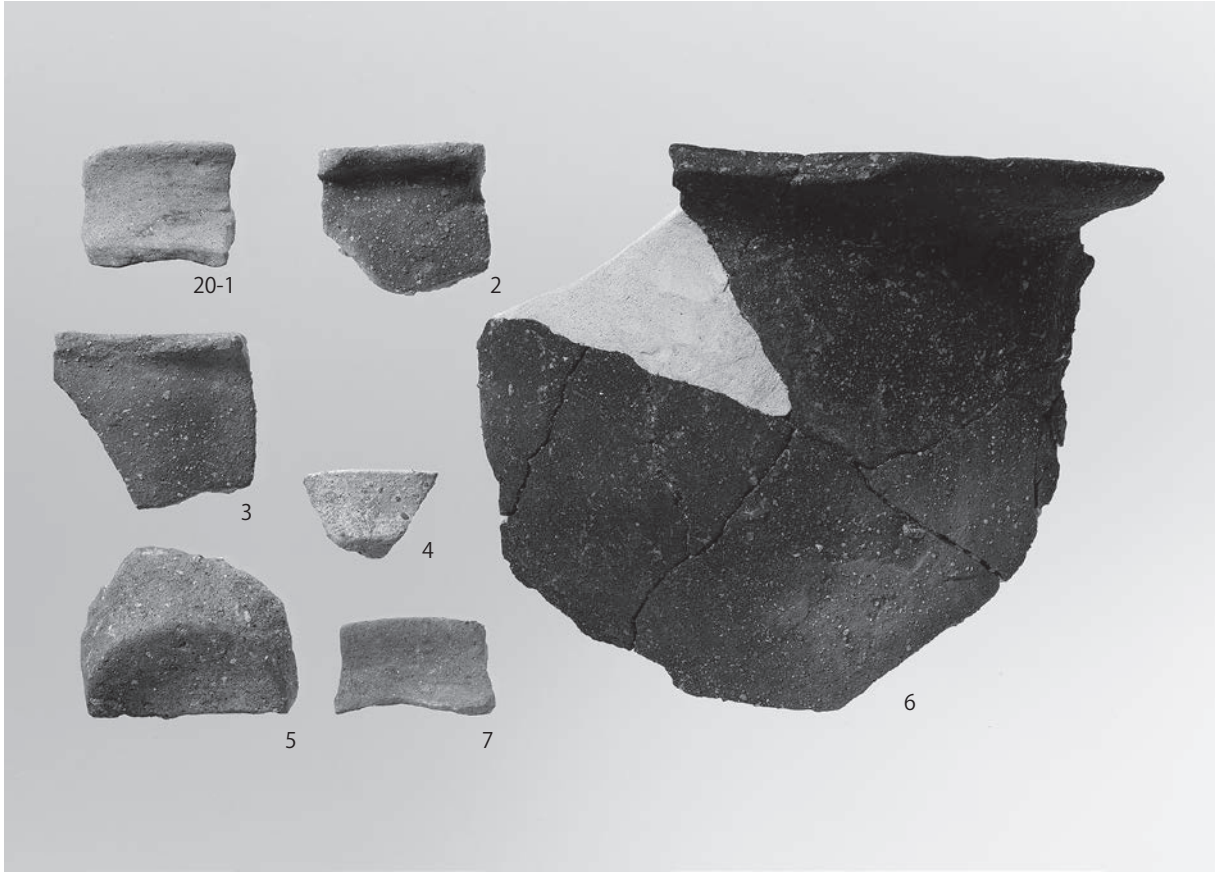


斜面出土遺物

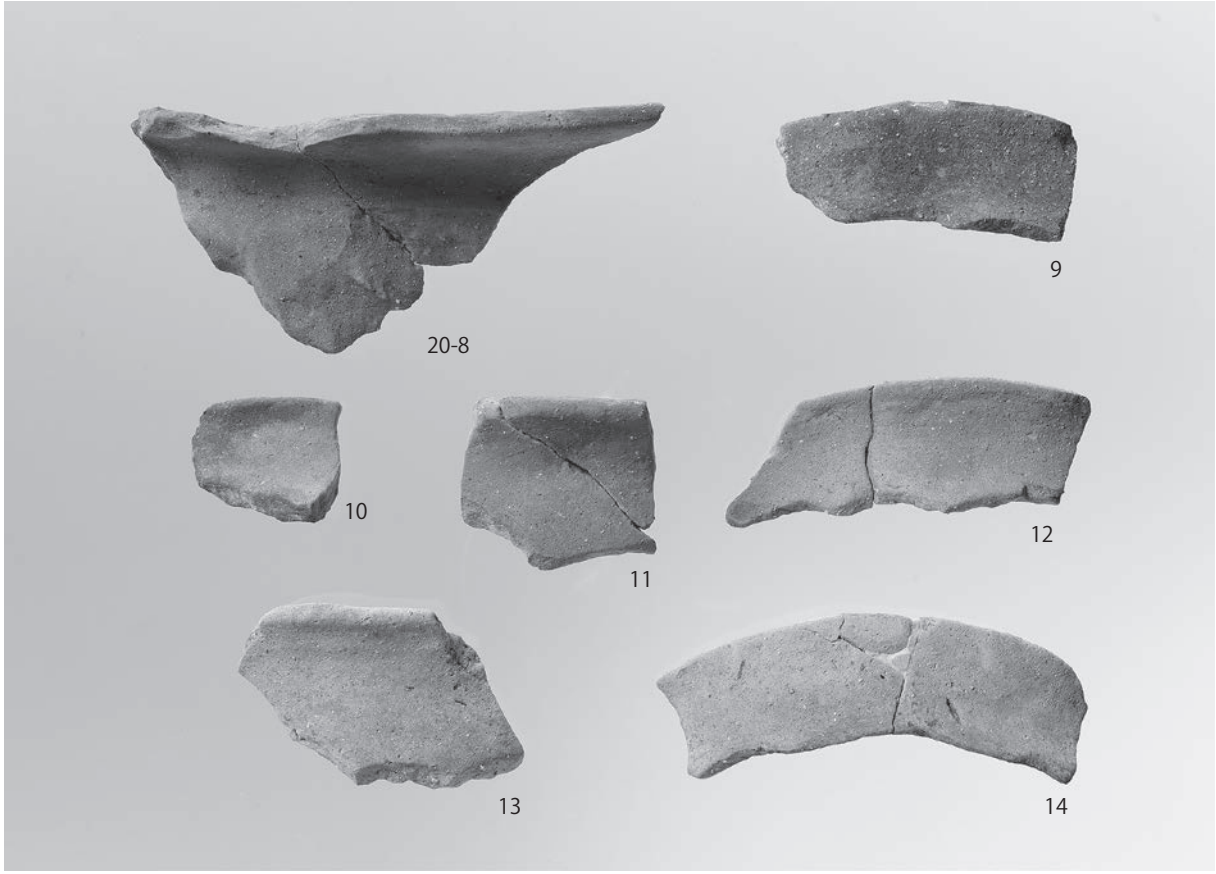
斜面・NR01 出土遺物

NR01 出土遺物

図版 14



段丘面包含層（4～6 層）出土遺物

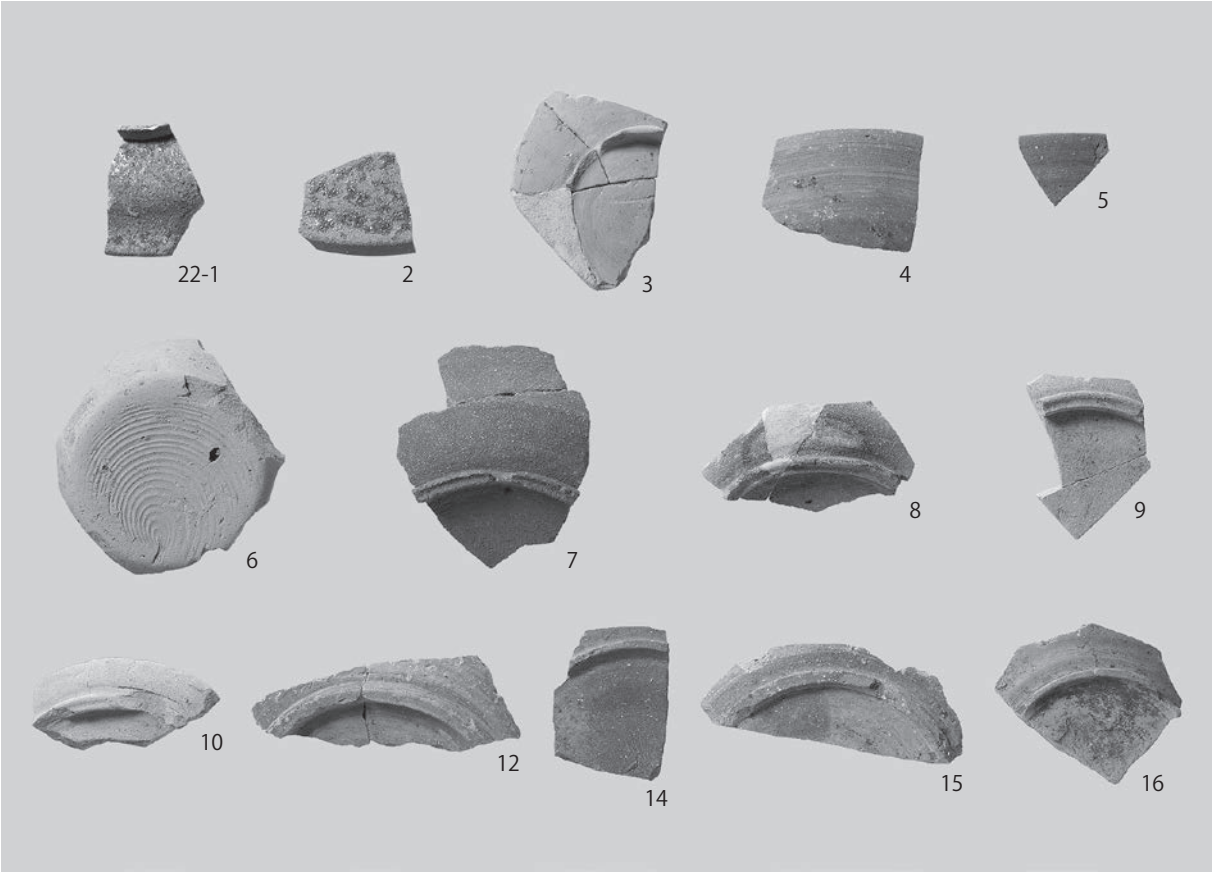


段丘面包含層（4～6 層）出土遺物

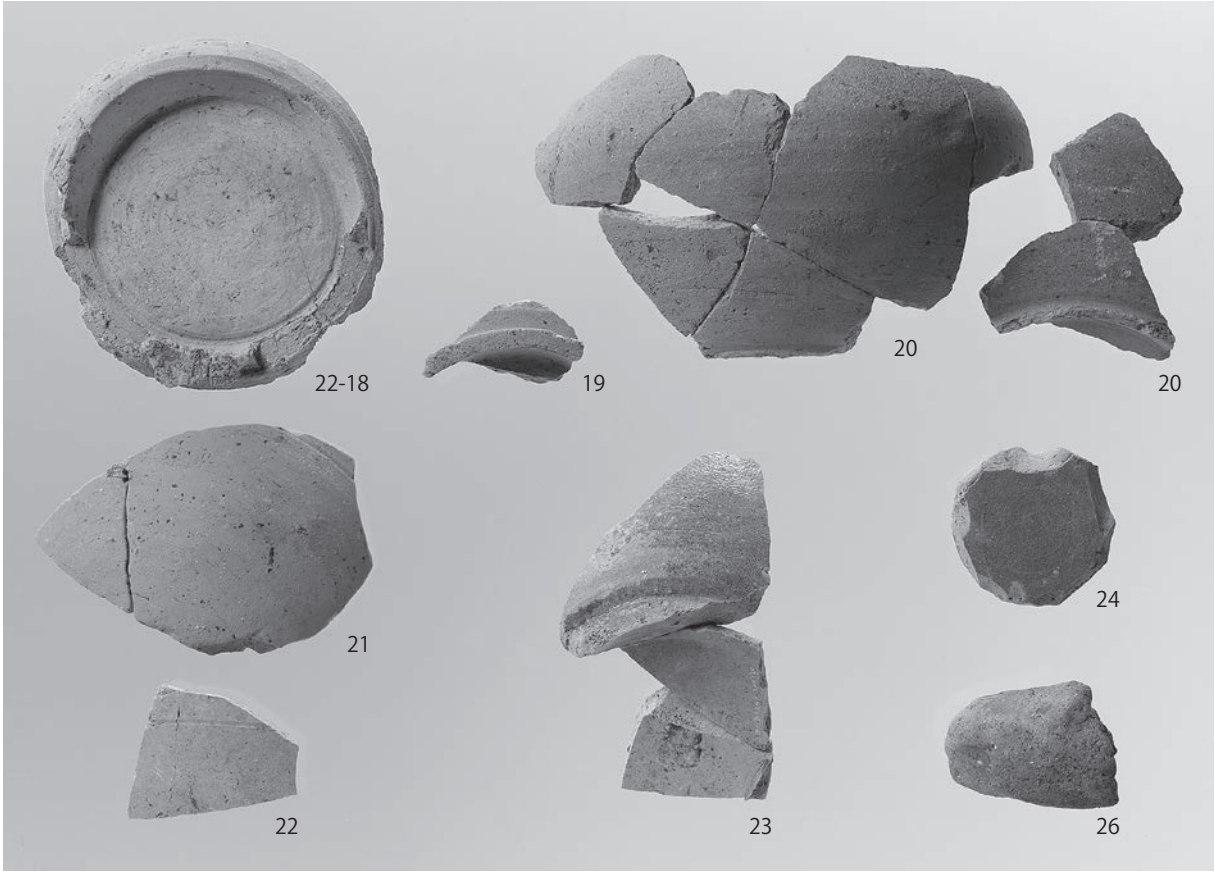
段丘面包含層（4 ～ 6 層）出土遺物

段丘面包含層（4 ～ 6 層）出土遺物

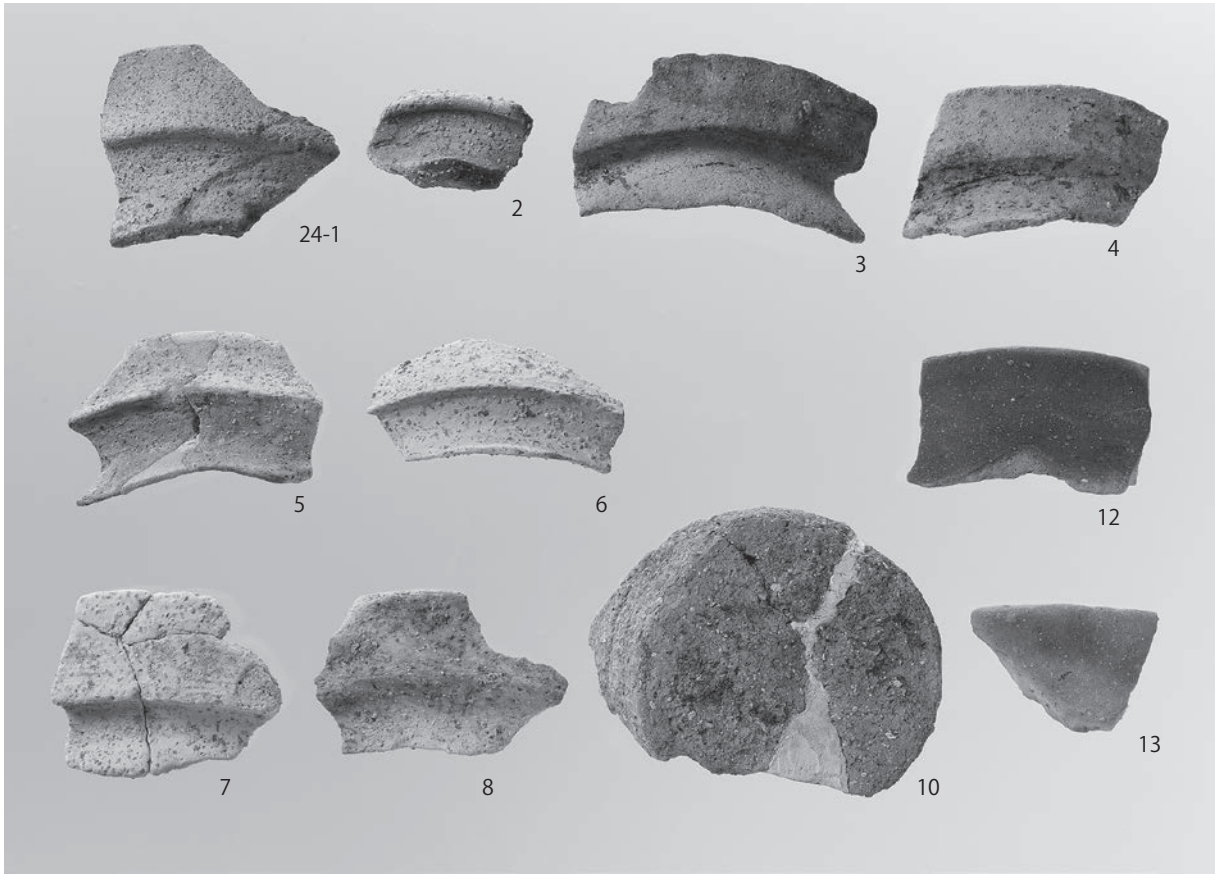
図版 16



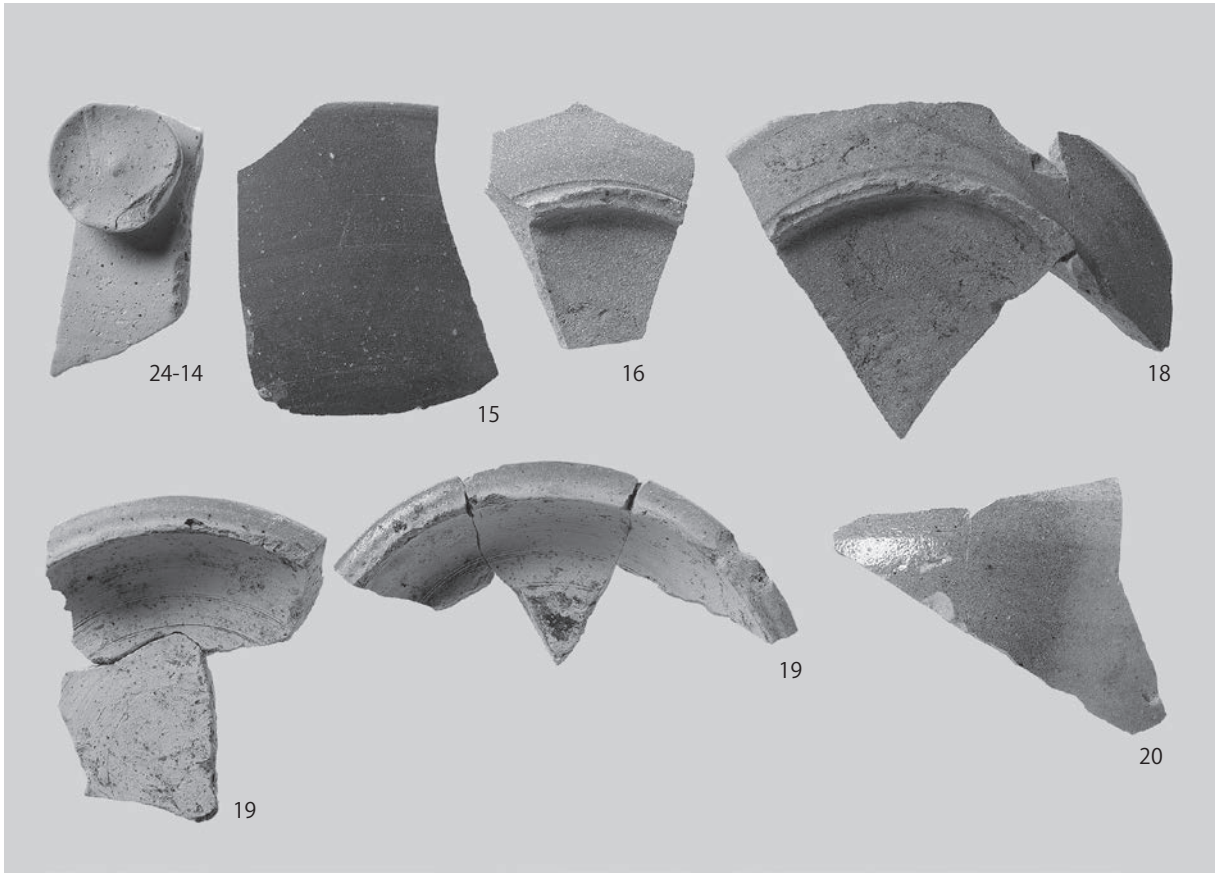
段丘面包含層（4 ～ 6 層）出土遺物



段丘面包含層（4 ～ 6 層）出土遺物



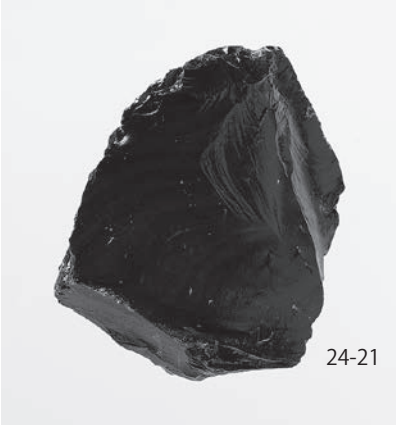
段丘面包含層（7～9層）出土遺物



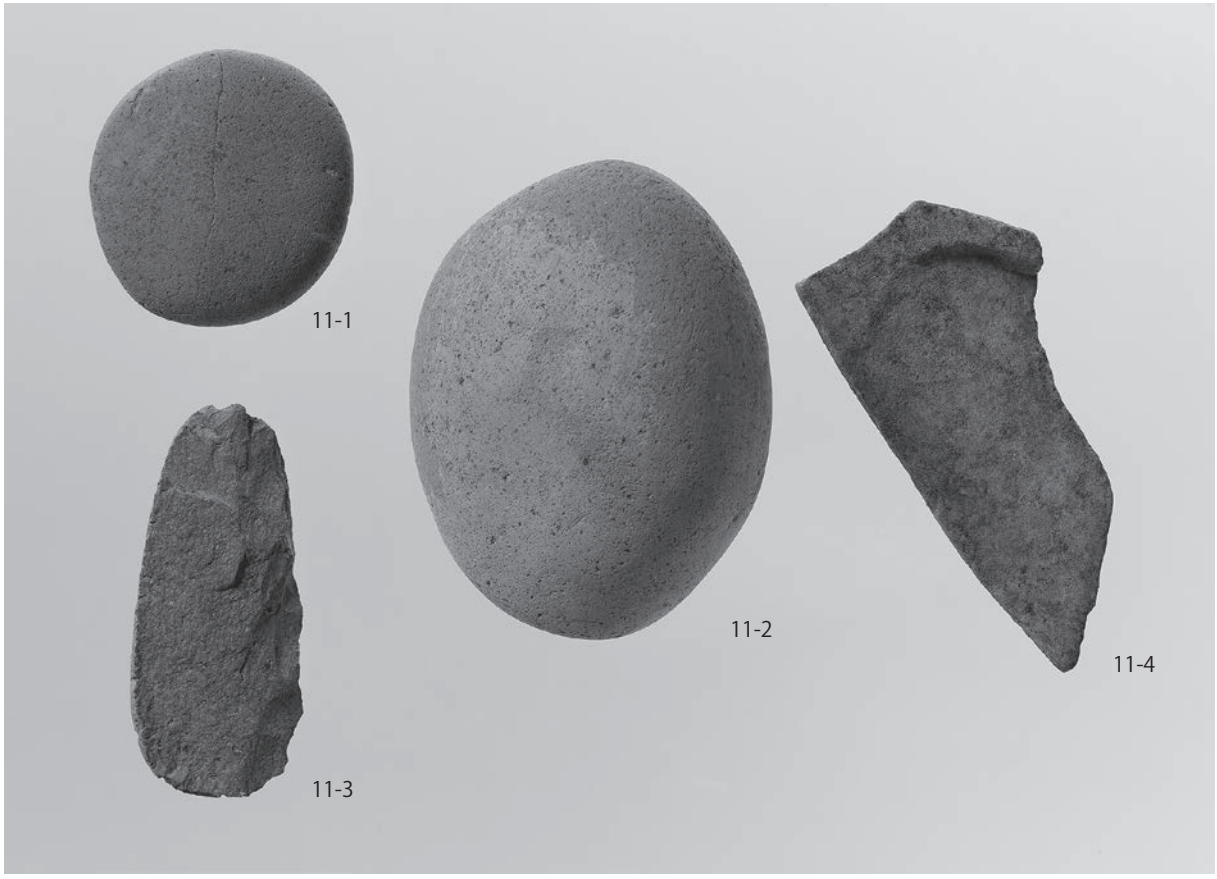
段丘面包含層（7～9層）出土遺物

図版 18

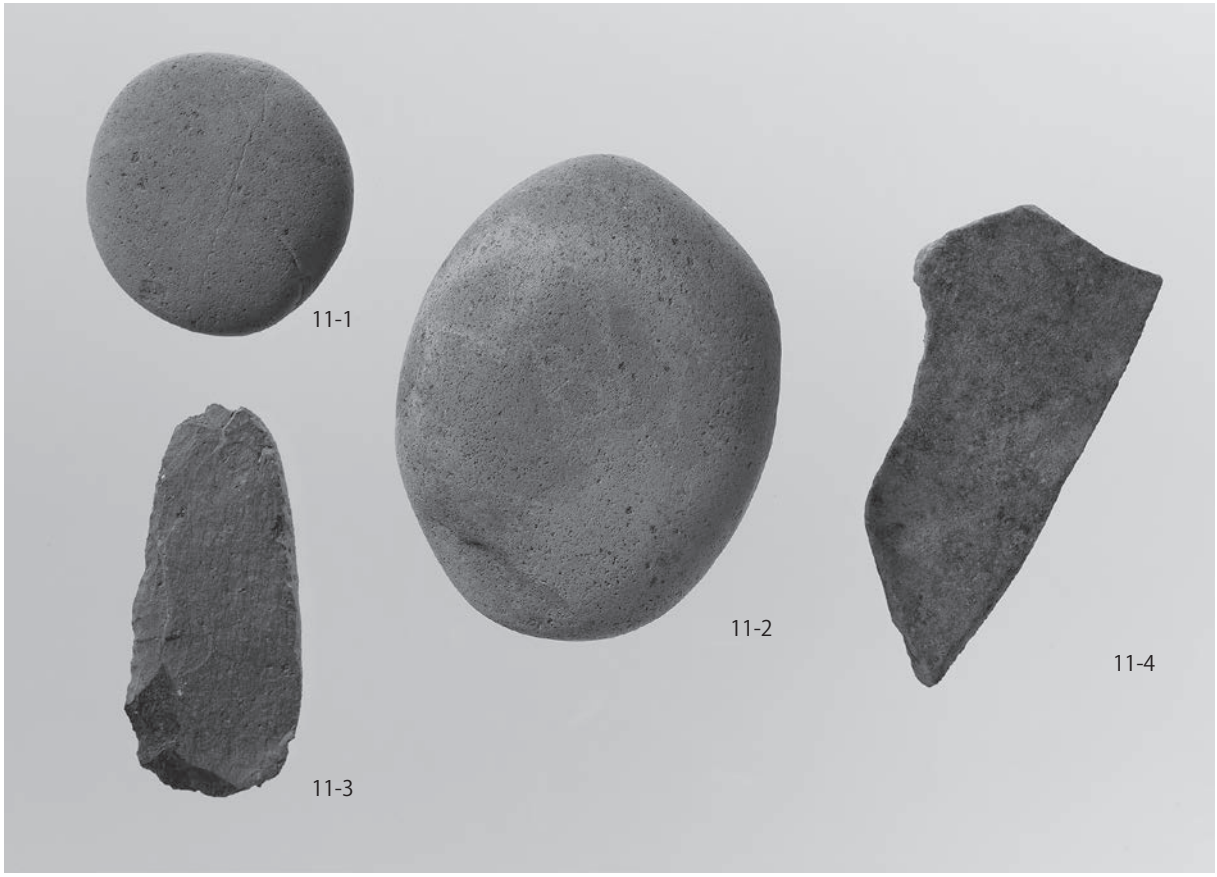
段丘面包含層（7 ～ 9 層）



段丘面包含層（6・7 ～ 9 層）出土遺物



斜面出土石製品（表）



斜面出土石製品（裏）

報告書抄録

ふりがな	こがねがわびーいせき
書名	小金川Ｂ遺跡
シリーズ名	一般国道９号（静間仁摩道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	９
編著者名	宮本正保（編）・渡辺正巳
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター http://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/ ℡ 0852-36-8608　Fax0852-36-8025
所在地	〒 690-0131　島根県松江市打出町 33 E-mail:maibun@pref.shimane.lg.jp
発行機関	島根県教育委員会 〒 690-8502　島根県松江市殿町 1 番地　TEL：0852-22-5880
発行年月日	2021(令和３)年３月 31 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	調査原因
小金川Ｂ遺跡（こがねがわびーいせき）	島根県（しまねけん） 大田市（おおだし） 静間町字小鯛ヶ原（しずまちょうあざこたいがはら） 791-1	32205	A372	35° 11′ 32″	132° 27′ 08″	20200529 ～ 20200904	700	記録保存調査 （道路建設）

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小金川Ｂ遺跡		弥生時代		弥生土器・サヌカイト 黒曜石	
		古代～中世	土坑 1 ピット 20 自然流路 1	須恵器・土師器	鉄鉢形土器 灰釉陶器 転用硯 龍泉窯系青磁

要約	小金川Ｂ遺跡では、古代～中世のピット・土坑・自然流路を確認したが、これらの性格は不明である。遺構検出面の上位にある遺物包含層からは弥生時代～中世の遺物が出土したが、量的には奈良時代後半～平安時代の須恵器が多い。この包含層からは鉄鉢形土器・灰釉陶器・転用硯も出土した。遺構面を形成する層も弥生時代～平安時代の遺物包含層で、灰釉陶器が出土している。灰釉陶器はいずれも猿投窯産で、時期は９世紀後半と考えられるが、仏器とみられるものがあり、鉄鉢形土器とあわせて考えると、周辺に仏教関連施設の存在が想定される。

印刷仕様

紙　　質	表　　紙	レザック四六判	175kg
	本　　文	上質紙Ａ判	57.5kg
	写真図版	上質コート紙Ａ判	70.5kg
Ｄ　Ｔ　Ｐ	Windows10		
	Adobe　InDesignCC　PhotoshopCC　IllustratorCC		
画像原稿	階調画像線数　175 線（ＡＭスクリーン）		

小金川Ｂ遺跡

一般国道９号（静間仁摩道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書９

発　行　2021（令和３）年３月
発行者　島根県教育委員会
編　集　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒690-0131　島根県松江市打出町 33
電話　0852-36-8608

印　刷　株式会社 報　光　社